
真・恋姫無双～招かれた天の御使いと招かれざる天の御使い～

月下の梟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双〜招かれた天の御使いと招かれざる天の御使い〜

【Nコード】

N0854P

【作者名】

月下の梟

【あらすじ】

時は後漢末期。権勢を誇った漢王朝も宦官等の悪政もあり、世は混沌としたものとなっていた。そんな中、易者、管輅の予言が大陸に広まった。

“黒天を切り裂く流星、二人の天の御使いを乗せ、天より飛来せり。その者、白く輝く衣を纏い、その智と輝きをもって乱世を鎮静す。黒き衣を纏いし者、武勇、まさに天を衝き、地を砕く。叡智、まさに雷光一闪、闇を切り裂く”

その予言に応えるかのように二人の青年がこの外史に降り立った。

一人は北郷一刀。聖フランチェスカの二年生。彼はもとよりこの世界に介入する天の御使い。もう一人は皇武。この青年はこの外史に存在するはずのないイレギュラー。

この外史はその招かれるはずのなかった天の御使い、皇武を主とした物語である…

序 章 異世界への誘い

光を背にして微笑むピンクの髪の女の子…何かを伝えようと口を動かし、手を差し伸べてくる。しかし、その唇から声は聞こえず、女の子はだんだん遠ざかり、呼び止めようと声を張り上げ、手を伸ばし駆け寄ろうとしても手の届かない場所へと行ってしまふ…

そこで夢は醒め、その夢から醒めた時には必ず双眸からは涙が溢れ出ている。

続けて見る現実味のある夢…

またいつもの夢だった。そしてその夢はそこでいつも終わり、今日も俺は目を醒ました。ただその日だけはいつもより早い時間帯に目を醒ましていた。

俺の名前は皇武。香耶島高校2年。柔道部に所属している。今年の夏は団体戦先鋒としての出場が決まっている。大会が近いために俺達は毎朝7時から朝練をし、夕方は9時くらいまで練習している。しかし、今の時間は朝の5時。家は山際にあるが学校までは歩いて十分。いくらなんでも早すぎる時間だった。

俺の父さんは昔から続いている武道“高天無双流武術”の第九十九代の元当主。俺も幼い頃からその武術を叩き込まれてきた。そして、15の時にその高天無双流武術の百代目当主を継承した。

当主を継承したとはいえ、父さんは健在でその実力をはるかに俺を上回っており、後見役として見守ってくれている。

ちなみにここで語られる高天無双流は門外不出、一子相伝といった類の古流武術である。

それは剣術、槍術、薙刀術、拳術、柔術、気功術の六派からなる古流武術である。内の一派、気功術は他の五派を極めたとしてもそ

こに行きつくには大きな隔たりがある。これまでの当主にも全てを修めたという者は数少なく、文献にしか残されていないものもある。しかし、この皇武は弱冠十五歳にしてその全てを修め、高天無双流史上最強と言えた。先代の当主である武の父も今でこそ勝てるが、後二年もすれば勝ち目はないだろうと痛感していた。もっともその事は本人が知る話ではないのだが…

百代目当主を継承した俺はその当日にこの高天無双流の裏の顔を知った。それは要人護衛や警察組織が壊滅しようとしている組織への武力介入等、最早裏稼業と言っても差し支えないものだった。最も当主を継承したその夜、何の準備もないままそれに連れて行かれたのだから驚いた。しかもその時の依頼先はICPO、内容は上海市崇明島。ただ言われるままにへりに乗せられ、聞かされた内容はそこで行われるという麻薬取引に関与する組織の制圧というものだった。有無を言わず連れて行かれ、死に物狂いで戦った事と父さんの凄さを目の当たりにしたことは今でも鮮明に覚えている。更にその仕事が終わった時に父さんが言った言葉は

「まあ、これからこんな事がちよくちよくあるから。で、裏の組織からもマークされることになるから、自分の身は自分で守れるように鍛錬は欠かすなよ。」

その言葉は冗談ではなく、これまでも何度か襲撃された事もあった。そんな事があり、いつでも戦えるようにと二本の十手を常に持つておくようにと手渡されている。

「何だ。武か…どうした？こんな早くに。」

「いや、ただ目が醒めただけ…父さんこそ早いね…」

「ふん、早く目が覚めたのなら朝稽古でもしたらどうなのだ？」

「そうだね。一時間ほどしかできないけど、付き合うよ。」

朝稽古をするつもりだった俺はそのまま道場へと足を踏み入れた。

父さんの攻撃は重く、その一撃一撃は体に響いた。そして、父さ

んに目掛けて放った連撃は簡単に受け流され、それと同時に父さんの掌底打が俺を捉えた。俺はそのまま後方へと飛ぶが、そのまま壁に激突した。

「武：お前が本気で戦わなければいけない時が必ず来る。例えこの先何があつてもくじけるな…。」

薄れゆく意識の中でその声を聞いていた。

結局、その組み手を最後に、一度も父さんを倒す事はできなかった。これで999戦999敗が決定していた。次の一千戦目こそは父さんを倒したいと本気で思った。

朝食を取り、俺は制服に着替えると学校へと向かった。

「まだ時間にも余裕があるし、少し寄り道でもしていくかな…」
そう考え、俺は近くにある時浪神社に向かった。

時浪神社は香耶島町でも最も古い建造物でいつからあつたのかも定かではない。境内には樹齢三千年と言われるような桜が腰を据えており、その歴史を物語っている。ここはこの町に住む子供達にとって最高の遊び場所でもあり、最高の避暑地でもあつたのだ。

武が幼い頃から飽きることなく目にしてきたこの桜は武を常に見守ってきており、武だけではなく香耶島町の全てを生まれたその時から見守ってきた大樹だったのだ。桜はこの香耶島町に愛され、桜もまたこの香耶島町を愛していた。

武は時浪神社に行くと必ずこの桜に手を触れ、目を瞑った。そうする事でこの桜の生命の鼓動を感じるような気がしたからだだった。その日もそうして桜の鼓動を感じたその時だった。

——聞ケ…

武はハッとして周りを見渡すが、周りには誰もいなかった。

「気のせいかな…」

しかし、その声は再びその場に響いた。

——オマエナラ…大丈夫ダ…

「誰だ！」

武は周りを警戒しながら呼びかけるが返答はなかった。

——運命二流サレルナ…オマエノ望ム道ヲ進ムノダ…

その声が再び神社に響いた時、風が吹き荒れると同時に武は桜に打ちつけられた。

辺りを騒がす悲鳴や、怒声…さっきは聞こえなかった喧騒に頭を抱えて起き上った。

「痛たた…一体何がおきたんだ…」

辺りを見渡した時、明らかにさっきとは違う光景に愕然とした。

「な、何なんだよ…これ…」

目の前には数人の男が剣を振りかざし、人を襲っていた。そして、周りには火が放たれ、地獄のような光景が広がっていた。

「何やってんだよ…」

その光景に自身の口からは言葉が零れる。しかし、男達にはその言葉は届かず、悲劇は続いていた。

「止めるよ…抵抗もできない人達に…」

目の前で続く惨劇にもはや抑えることはできなかった。

「止めろって言うてんだよ！」

剣を振り下ろそうとしている男の横腹に飛び蹴りを叩き込んだ。蹴りを叩き込まれた男は苦悶の表情を浮かべながら、民家に突っ込んだ。その音を聞きつけ、周りで暴れていた男たちの標的は武へと切り替わった。

「貴様！何をふざけた事をしてくれたんだ！」

凄む男の一人に返す言葉もなく、顎先に掌底打を叩き込み搗ち上げた。

「俺は赦さない…無抵抗の人達を蹴るように傷つけるお前達の行いを！」

武は腰に差していた二本の十手を抜き、男達に対峙したのだった。

序 章 異世界への誘い（後書き）

周りの小説に触発されて思わず手をつけてしまったこの作品。

実はこの話、歴史物として書こうとしていた邪馬台国を舞台とした小説の序章だったりします。その小説、もうネタが三話書き終える前にネタ切れという始末…だったら別の小説にしてみましただろうとネタを探していた時に見つけた“真・恋姫無双”

もともと三国志関係の作品は何でも好きな私。これならいけるんじゃないかと思わず書いてみた自己満足作品です。

しかし、謝罪すべきは原作をプレイしながらの執筆の為、原作を使いまわしているところが多々ありまして、ただ今加筆修正中…

不定期の更新になると思いますが、自身の作品の質の向上の為にも読者様からの感想、ご意見、誤字等のご指摘をお待ちしております。

一章 覚悟

十手は時代劇などでよく役人や岡っ引きなどの捕吏が用いている長さ45センチくらいの鉄の棒で手元近くに鉤が付いている捕縛、制圧に使用される武具の一つである。

刀や槍に比べれば、短く頼りのないように見える武器ではあるが、捕縛制圧においては他に類を見ない程の威力を発揮する。ただ叩くだけでも骨が砕け、手元の鉤で刀や槍を受ければ、その武器は破壊され使い物にならなくなる。ある意味、接近戦においては最強の矛と盾を兼ね備えた武器なのだ。ちなみに武が使用している十手は標準とされるサイズに比べると持ち手が15センチ、棒身が八角形の45センチの全長60センチと長く、攻撃に特化したものだった。

「ハンツ！ そんな棒切れ二つで何ができるってんだ！ 野郎共、取り囲んで袋叩きにしてしまえ！」

盗賊の頭目と思える男が声を張り上げる。その声に男達は武に向って突進していく。武はその突進を軽くかわし、十手をその男の首元に叩きつける。そして、向かってくる男達は武を中心に渦に巻き込まれるように戦闘不能に追い込まれていく。

賊の中でも大柄な男が青龍刀を片手に

「どけ！ この俺様がぶった切ってやるぜ！」

その言葉に賊は武から離れ、円陣を組むように武を取り囲む。男は渾身の力を込め、武に目掛けて青龍刀を振り下ろした。その動きに合わせて武は半歩左に踏み込むと同時に腕を絡めるようにして賊の腕を取る。その瞬間、賊の体は宙を舞い、頭から真下に地面に落ちる。そこにその頭を刈るように容赦なく蹴りを叩きこむ。腕関節を決められ、頭から地面に落とされる男に受け身を取る事は不可能であり、とどめの蹴りで男の首は折れ、絶命した。

武は十手を駆使して男たちの武器を次々と破壊すると同時に腕や足の骨を砕いていく。しかし、一人制圧してもまた一人、また一人と次々に襲ってくる男達を二本の十手を駆使して対抗するが、多勢に無勢…近接武器としてはある意味最強とも言える十手だが、多対一の状況では抵抗するには分が悪かった。

今の状況が続けば、じり貧になるのは否めなかった。俺の使う十手は攻撃特化に作られてはいるものの、それはあくまで少人数を相手にするときに限られる。何度か野盗の武器を奪って使ってみるが、あまりにも脆くすぐに壊れてしまい、使い物にはならなかった。

「このままじゃ…じり貧になるだけだ…何か手は…」

その時だった。目の前の光景が止まり、頭に直接声が響いた。

「汝、力を欲するか…」

周りを見渡すも声をかけてくるような人は一人も見当たらなかった。

「誰だ！どこに隠れているんだ！」

突然、目に前に仙人のような格好をした若い男が降りたった。

「わが問いに答えよ…皇武よ…」

その姿を確認して問いかけた。

「あんたこそ何者なんだ…」

「わが名は神農。三皇の一人。そなたはこの世界に生きる者の言葉を聞き、この世界へとやってきた。」

瞼を閉じて浮かぶのは抗いたくとも抗う術を持たない人々…男たちが欲望のままに略奪、殺戮を繰り返す阿鼻叫喚の光景…

「おれはこんな理不尽なことを許したくない…力でしか止められないというなら俺は力を求める！」

満足そうに神農は笑みを浮かべた。

「ならば念じよ…強くありたいと…そして、その思いの力を思い描き、“顕現”と唱えよ…さすれば、その力、その姿を顕し、其方のものとなるん…」

その声に応え、

「空を断つ、閃光の大太刀、断空龍牙刀。ここに顕現せよ！」

それを唱えた時、手元に光が凝縮し、銀色に輝く刃渡り90センチ強の一本の大太刀が姿を顕す。刀を手に取り半身に構え、大太刀を水平に背後まで回す。

「高天無双流剣術奥義が一、烈風龍閃！」

横薙ぎに振り切った斬撃は真空の刃となり、十数人の賊を一刀両断にした。宙に舞い散る野盗達の腕や胴体、噴き出る血飛沫。その光景を目にし、吐き気を覚えるも再び刀を構え野盗達に立ち向かう。

「化け物だ！」

武の一撃で野盗達は戦意を失っていたが、時間の経過とともに勢いを盛り返し、絶え間なく襲いかかってくる。刀を手に取り、奮戦するが、悪人とは言え、人を斬ってしまった、殺してしまったという現実には悔恨の念に教われるも奮戦する。

どれだけの人を斬っただろうか。そんな中、俺は野盗の中央に周りの賊に怒鳴り声をあげる男の姿を見た。俺は精神を研ぎ澄ませ、「万物を灰燼と化す、紅蓮の槍、紅蓮炎龍槍。ここに顕現せよ！」唱えると同時に再び手元に光が凝縮し、穂先が三叉、柄は黒い長さ2.5m強の槍が姿を顕す。槍を一振りすると周りにいた野盗は吹き飛んだ。そのまま一歩踏み出し

「高天無双流槍術奥義が一、龍巻突！」

回転を加え、突き出した突きは頭と思われる賊を貫いた。その威力は凄まじく、その体に大穴を開け、その摩擦熱で賊は炎に包まれた。頭目の凄惨な死を目の当たりにした野盗達に戦意はなかった。蜘蛛の子を散らすかのように集落から逃亡していったのだった。

それを確認した武は緊張の糸が途切れ、体力が限界に達していた事もあり、その場に膝をつく。最早意識を保つことも難しかった。そして、遠ざかる意識の中、武が目にしたのは赤の鎧をまとった軍

勢と掲げられた“孫”の旗印だった…

二 章 邂逅・上

袁術から野盗討伐の命令を受けて祭と五百の兵を率いて出陣していた。偵察の報告ではこの先の邑を百人程度の賊が襲撃しているとのことだった。視界にその集落を確認できる程の距離まで近づいた時、

「策殿、どうやらまずい状態になっているようじゃな…」

祭の言葉通り、邑からは火の手が上がり、生存者も見込めそうになかった。

「…そうね。だったら人の皮を被った獣を狩り、死者の冥福を祈りましょうか…」

その言葉と同時に進軍速度をさらに上げた。

儂は到着した邑の光景を目にして驚いた。邑の入り口にはその住人と思われるものが非難し集まっていた。そこから邑に足を踏み入れ、中央の開けた場所には槍を手に膝を衝く青年を中心に賊と思われる骸が無数転がっていた。

「い、一体何があったというんじゃ…」

声を漏らす儂の疑問も気にせず策殿は一人で前に出て、青年に近づいて行つた。

「策殿、危険じゃ！ええい、全く。人の言うことを聞かんお人じゃ」

「何？祭…」

不機嫌そうな声を上げる策殿に

「全く…君主としての自覚を持ちなされ。あれが妖の類で策殿の身に何かあったらどうするおつもりじゃ…」

苦言を言うも

「大丈夫よ、祭。それよりも最近、巷でうわさになっている予言を覚えてる？」

「…易者の管輅が予言したあの天の御使いのことか？確か内容は…」

黒天を切り裂く流星、二人の天の御使いを乗せ、天より飛来せり。その者、白く輝く衣を纏い、その智と輝きをもって乱世を鎮静す。黒き衣を纏いし者、武勇、まさに天を衝き、地を砕く。叡智、まさに雷光一閃、闇を切り裂く…というあれの事か？」

「ええ、そうよ。」

「まさか、あ奴がその天の御使いじゃと…じゃが…」

「天の御使いを麾下に加えれば孫呉にとって風評を得ることができる。妖なら私が討ち取れば、名声を得ることができる。どちらに転んでも私たちにとって利にはなるでしょ？」

こうなると何を言っても無駄だということはこれまでの事からよくわかる。

「名を上げるにはもってこいと…全く…どちらにしても用心はしてください。」

策殿の横に付き添い、微動だにしない青年に近寄った。

「おい、お主！われらの声が聞こえるか？」

声をかけても動く気配を見せない青年の肩を揺ると青年はその場に崩れ落ちた。口元に手を当てると、呼吸だけはしており意識を失っているだけのようであった。

「策殿、この者は…」

「城に連れて帰るわよ。」

思わずため息を衝く儂に

「さつきも言ったでしょ。天の御使いなら麾下に加えて、妖の類なら私が殺すって。」

事も無げに笑みをこぼす策殿に

「ウム、承った。しかし、一言言っておきますが、一応はお止めしましたからな…冥琳への説明は策殿からしてもらいますぞ。」

儂はそう言い放つと青年を抱え上げ馬に乗せた。

「ウツ…祭のいけず」

文句を言いつつも策殿も馬にまたがり、軍をまとめて引上げを開始した。

「ウツ…ここは…？」

目を開くと視界には見た事のない天井、いや天蓋というのだろうか…上半身を起こし、周りを見渡すと見たこともない部屋だった。ベッドも現代にはないようなスプリングが利いてないもの…室内の装飾は明らかに日本のものではなく、中華風のもの…

「一体ここはどこなんだ…？」

状況を把握するために記憶をたどってみた。確か今日はたまたま早く置いて父さんと朝稽古をしていた。神社を抜けて、学校に行く…うとして…不思議な声が聞いた後、見たこともないような荒野に立っていたのだ…それで近くには小さな集落があつて、そこを野盗が襲っていたんだ…ああ、そうだ。俺はこの手で野盗を…人を殺してしまっただんだ…

「くっ…」

俺の両手はその時の事を覚えているのか震えていた。

「お、目が醒めたようじゃな。見たところ大きな傷はなかったようじゃが、体は大丈夫か？」

声のほうに顔を向けると扉の所に妙齡の女性が立っていた。

「は、はい。大丈夫…です。ええと、あなたが助けてくれたんですね？ありがとうございます。」

俺は頭を垂れ、礼を言った。

「ウム、まあ、間違つてはおらんが…僕は主に頼まれたから運んで治療をしただけじゃから礼なら…」

「助けてくれた事には変わりありません。ありがとうございます。」

俺は女性に対し、頭を垂れた。

「礼には及ばぬよ。ところでお主、名は何というのだ？」

確かに初対面なのだ。自己紹介くらいするのが礼儀だよな…

「これはすみません。僕は皇武と言います。」

そう名乗り、会釈した。

「ウム、僕は姓を黄、名を蓋、字を公覆という。それにしてもスメ

ラギタケルとは変わった名前じゃな。どのような字を書くのじゃ？」
彼女の名前を聞いた時、あり得ないと思えるその名に驚愕した。もし聞き間違いでなかったら一体ここはどこなのだろうか？

「スメラギは皇帝の皇、タケルは武勇の武と書きます。ところでもう一度名前を聞かせてもらってもいいですか？あと、ここがどこなのか教えてもらえるとありがたいのですが…」

「ふむ、姓名は黄蓋、字が公覆という。で、ここは荊州、わが主、孫策の城、南陽城じゃ。」

どうやら聞き間違えではなかったらしい。

しかし、一体どういうことなんだ…

黄蓋と言えば、三国時代の武将の名前…主君を孫策と言ったことから呉の宿将黄蓋であることには間違いないだろう。それに荊州は中国の昔の地名だ。建物も古代中国のものだと言われたらしつくりくるところがある。ただ、呉の黄蓋といえば、俺が生きていた時代から大体一八〇〇年くらい前の人物で男性…

しかし、今、俺の目の前にいる黄蓋と名乗るのは女性。その表情からも彼女が嘘を言っているようには見えない。仮に彼女の言っていることが事実であるならタイムスリップでもしてしまったのか？しかも目の前にいる女性が黄蓋と名乗っていることから単純にタイムスリップをしたというわけでもなさそうだ…

夢と思っていたけど、昨晚の人を殺したあの感覚は今も手に残っている。つまり、タイムスリップ云々に関して確証は持てないが、昨晚人を殺したという事は現実だということだけは事実だ。

突然、快活な声と同時に扉が開き、煌めくピンクの髪を靡かせ、笑顔を浮かべていた。

三 章 邂逅・下

「起きてるみたいね。気分はどう？」

歳は大体、俺よりも少し上くらい…気さくな言葉とは違い、その瞳は鋭く心の奥底を覗きこまれているようだった。

「体のほうはなんとか…現状把握ができてないから多少混乱しているってところでしょうか。」

女性は驚いたような表情で

「混乱しているって割には結構落ち着いているみたいね。」

今は現状を把握するためにも少しでも多くの情報が必要だ。その為にも会話するしかないな…

「状況を把握するならまずは冷静にならないとどうにもならないですし…ところで貴女は…」

「私は孫策。字は伯符よ。」

彼女が江東の小霸王、孫策か…黄蓋と名乗る女性と孫策を名乗る女性…中華風の建造物、さっきの説明からここは荊州という事…

「名乗ったのだから考え事をする前にあなたも名乗りなさい。」

「すみません。まだ自己紹介をしてなかったですね…僕の名前は皇武といます。」

補足するように黄蓋と名乗る女性が説明する。

「皇帝の皇、尚武の武でスメラギタケルというそうじゃ。」

「へえ、珍しい名前ね。」

「たいてい初対面の人からはそう言われますね。」

孫策と名乗った女性は頭のとっぺんからつま先までじっと見つめた。そして、鋭い目で俺を見据え、

「二、三、話を聞かせてもらうけどいいかしら？」

俺は頷き、

「はい。こちらにもいくつか聞きたいことがありますし…」

「そう…なら、聞くけど…まず、あなたはどこから来たの？」

「日本。僕の推測が正しければ、多分ここから東にずっと行って、海を渡ったところにある島国です。今は倭国と言われている場所でしょうが。」

「ふん。…ねえ。」

「はい。何ですか？」

「あなたがどうしてここにいるのかは聞いた？」

「いえ…詳しい話は聞いていません。」

「なら説明してあげる。昨夜、山賊の討伐に出た私達は山賊が狙っているところと報告があった村に行った。確かに山賊はそこにいた。ただし、骸のみを転がした状態で…そして、あなたはその山賊達の骸が転がる場所の中央にいた…」

その言葉は俺が人を殺したという現実を証明するものだった。

「そうですか…やはり夢ではなかったのですね…僕がこの手で…」

「そうね…多分あの山賊達を退治したのはあなたね。ただ気になるのはあなたが持っていたのはこの変わった武器のみ…どうやってあれだけの山賊達を倒したの。」

孫策は二本の十手を差し出し、俺に見せた。

「この武器は十手という武器で、主に制圧、捕縛に使う物です。あそここの賊のほとんどはそれを使って倒しました。」

手元で弄んでいた十手を黄蓋さんに渡した。

「そうなの。まあ、いいわ…」

その言葉を聞いた瞬間だった。何かを感じた俺は後ろにとびのいた。いい勘をしてるわね…」

孫策さんは突然、腰に履いていた剣を抜き放ち、斬りかかってきた。かろうじて紙一重で回避はしたが、孫策さんの斬撃は徐々にその鋭さを上げてきた。執拗に追い詰めてくるその斬撃は早いだけではなく遅い斬撃までを組み込んできた。緩急をつけてきた斬撃に回避し続けることは難しかった。

そんな時だった。孫策さんの斬撃が止み、孫策さんを注視すると、

孫策さんは上段の構えをとっていた。その気迫はただ事ではなく、気圧されないように耐えるので精一杯だった。そこから放たれる上段からの袈裟掛けの斬撃に俺は覚悟を決めて間合いを詰めた。

最初はただ試すつもりで斬りかかった。完全に不意をついたはずの胸薙ぎの斬撃は紙一重で回避された。その後も、繰り出す斬撃を徐々に早くしていった斬撃、緩急をつけた斬撃も繰り出したがそれも回避していった。千日手となりかねないこの勝負に決着をつける為に剣を振りかざし、私は本気で打つつもりで肩口に斬り付けた。

策殿が剣を振りかざしたその気迫は傍から見ている僕も身震いするほどだった。斬撃は確実に肩口を捉えていた。しかし、次の瞬間に目の前にあった光景は床に仰向けに倒された策殿の姿だった：

孫策と対峙していなかった黄蓋まで孫策の気迫に圧倒されていたのだ。孫策と対峙していた武が感じていたプレッシャーは並大抵のものではなかった。例えるなら飢えた虎に対峙した草食動物と言ったところだろうか：

そんな武に目掛けて、孫策が構えた剣が振り下ろされる。それは武の左肩口に吸い込まれるような軌道を描き、振り下ろされていた。

孫策と黄蓋は武の取った行動に驚愕する。避けるならまだしも武は孫策との間合いを詰めてきたのだ。

孫策の攻撃をかわす為に武がとった間合いを詰めるという行為、これは達人級の武人でもこれを実践できる人は少ない。そして、この行為は一步踏み込みを間違えば、命を失う事すらある。

武の予想外の行動に孫策は驚愕し、わずかに剣速が落ちたのを武は見逃さなかった。反撃に出たのだった。

私は突然、目の前に広がった光景に茫然とした。あまりの事に反応ができなかった。袈裟掛けに打ちおろそうとした私の間合いに彼が入ってきたところまでは分かるがそれから先何がどうなったのかが分からなかった。

孫策の間合いに入った武は振り下ろされる剣の勢いのまま、左手で孫策の右手首を取り、それと同時に右手を孫策の右肘の裏にあてがい、山を描くように下ろした。孫策の体は慣性に従って円を描くように宙に舞い、地に伏したのだった。その時、部屋に一人の女性が入ってきた。

女性は剣を手にして床に仰向けに寝ている孫策とその孫策の手を取り、見下ろしている青年、さらには、二人を啞然とした表情で見ている黄蓋という部屋の光景を見て、状況が把握できず、困惑を隠せないようだった。

四 章 尋問

「…何がどうなったら、こんな状況になったのか説明してくれるとありがたいのだけど…」

武は孫策を引き起こし、部屋に入ってきた女性に事の顛末を説明した。するとその女性は孫策に向き直り、喧々囂々と説教を始めた。

「ええと…改めて自己紹介をさせていただきます。俺の名前は皇武。歳は一七です。」

孫策に対して説教をしている女性は読み通り、周瑜と言った。周瑜はこの部屋に武の尋問をするために来たのだった。孫策に対する周瑜の説教が終わるのを確認して改めて武は自己紹介をした。

「分かったわ。では質問させてもらうけど、あなたの出生地、日本はここから東の海を渡った所にある島国と言ったけど、ここまですうやってきたのだ？」

「普通であれば船が飛行機と言ったところですが、実際は気づいたらこの地にいたのでわかりません。」

「船は分かるが、その飛行機というのは何だ？」

当然と言える質問に武は苦笑する。

「それを説明する前に俺の話を聞いてください。っていうより、そこを話さないと説明できないことだと思いますから…」

「分かったわ。なら、お願いするわ。」

武はこれから説明する事をまとめる為に一息ついた。

「まずは俺がこの時代の人間、ないしはこの世界の住人ではないって事…」

「…どういうことなの？」

不思議そうな表情を浮かべる三人に苦笑を浮かべた表情を俺は引き締め、

「孫策殿、周瑜殿、黄蓋殿。まずは説明の前に一言…」

俺は三人に体を向け直し、頭を下げた。

「俺を助けてくれてありがとうございます。」

深呼吸をして俺は

「俺は孫策、周瑜、黄蓋の名前をあなた達に会う前から知っている。なぜなら、俺は今から約1800年後の未来から来た人間だからです。もつともそれも事実かどうかは俺にも分らないです。何故かといえば、俺が知っている史実に出てくる孫策、周瑜、黄蓋はいずれも男性なんです。だから、単純に時を遡ったという事ではなく、俺がいた世界の時間軸とは全く別の世界、並行世界に流れ着いたのかもしれないんです。」

俺の言葉に不思議そうな表情をする。

「1800年後とはどういうことなの？」

「策殿の言う通りじゃ、もうちよつとわかりやすく説明せい。」

その疑問は当然のことだった。

「簡単にいえば黄蓋さん。貴女が霸王といわれた項羽や、周の太公望といった人物に対面しているのが今の俺の状態といったところです。」

黄蓋は驚いた表情をし、絶句する。

「ふゝん。でも、だからと言ってあなたが未来の世界からきたことの証明にはならないわよね？」

孫策の言葉はもつともだった。

「そうでしょうね…例えば、孫策さんの血縁者や仲間の人達の名前、字を言い当てたり、この時代よりも過去の事を言ったところで何の証明にはなりませんし…」

周瑜も孫策に同意を示し、

「うむ。過去のことであれば、私達でも知っている事。仮に言ったとしても多少学問のできる学者程度でしかないわね。」

周瑜の言葉にどう答えたものかと考え込んだ。ふと、もし自分が通学中の格好でここに流れ着いたとすれば…

「俺の荷物は見ましたか？もし、それがあんならその中には俺がいた時代の道具がいくつか入っていると思いますけど…」

「あの袋の事か…ならばその袋を持ってこさせよう。誰かある。」その声に女中と思われる女性が入ってきた。

「倉庫に行つて、その中にある変わった袋をここに急ぎ持ってくるのだ。」

「かしこまりました。周瑜さま。」

女中は足早に武の鞆を持ってきた。

「この変わった袋には何が入っているのだ？」

「早く開けて見せてよ！」

「雪蓮…」

武を急かす二人を呆れるようにして周瑜がぼやく。

「…まずこれは鞆というのですが、荷物などを入れる事が出来る袋のようなものです。ですが、この時代にはないと思われる素材や装置が付いています。この鞆の生地は触ったなら分かんと思ひますが、網状のものが張り付けてあり、それに防水加工が施された物です。

なので、生活用水程度なら中に入れたものが濡れる事はありせんそして、この口の部分ですが、ファスナーと言ってこの取っ手を滑らせる事で開閉させる事が出来ます。次にこの紙もこの時代にない物だと思ひます。後は自由に見てもらつて構いませんので…」

「ふむ…ならば見せてもらおう。」

そう言つて周瑜はとりあえず鞆の中身を外に出した。

鞆の中に入っていたのはその日に受ける予定だった授業の教科書に筆記用具や部活の道具だった。

「ねえねえ、これは何？」

孫策が手に持っているのは消しゴムだった。

「これは…実演したほうが早いかな…これはノートっていう紙なんだけどそれにこのシャープペン…この時代で言う筆みたいなものなんだけど、これで適当な文字…そうだな…皇武つと。それでこれで

擦ると…文字が消える。修正用の道具だよ。」

「そのしゃーぷぺんとやらも不思議じゃな…なら、これは何じゃ？」
黄蓋が手に取ったのは鞆に着けていたホルダーに入った携帯電話だった。

「それは携帯電話と言って遠くにいる相手と話す事が出来る道具なんだけど…ここでは使えないかな。たぶん電波が来てないから…まあ、写真を撮るくらいはできると思っけど…」

「写真とは？」

「今、孫策さんの姿を周瑜さんは見ているよね。それをそのままを写す事が出来るものなんだ。その中に学生証があるんだけどそこに俺の顔写真が付いている。実際に取ってみるね。」

武は携帯を自分に向けてシャッターを切った。その効果音に三人は驚くが、その携帯に写った武の姿を見てさらに驚いた。

「…わー！武が中に入ってる！」

「これはまた面妖な…」

「…確かにすごいわね。これは妖の術？」

「妖術とかじゃなくて科学と言ったところかな。」

「何だ。その科学と言うのは？道術や仙術のようなものか？」

「学問が一番近いかな。最もその道術や仙術も俺がいた時代の科学などの学術的な理論をもとにして解明されているのもあるみたいだね。」

さらに武は電化製品や車などの現代では当たり前ものの説明を続けた。

「確かにこれらの道具を我らは見た事もないし、作ることもできないだろう…話自体は荒唐無稽すぎるから理解しがたいが、お前が持っていた荷物の中身やその小さな箱に貴様と生き写しの絵があることなどを踏まえれば、貴様が言っている事の全てを否定する事はできません。」

武を判断しようとする周瑜に孫策が呆れたように口をはさむ。

「理屈っぽいわねえ」

「それが軍師の性という奴だな。常に根拠ある物を信じ、理と論を思考の中心に据えるのが軍師と言うものだ。」

「だったら、我らが軍師様はこの子をどう判断する？」

周瑜は武の心の奥底を見透かすように目を細めて武を見つめ、武はその目を見返した。

「…こ奴が天の御使いかどうかは置いておくとして、少なくとも我らが知らぬ国からやってきたのは事実だろう。それに胡散臭いと言えはそうだが、人柄は悪くなさそうだ。…何より澄んだ眼をしている。このような人間が悪人にはなりきれんだろう。」

その言葉に武は思わず、安堵の息をもらした。

「お眼鏡にかなったか。まあ、武力においては策殿と互角に戦えたのだ。わしと策殿が保証するぞ。それにこやつの度胸ぶりはなかなかに好ましいと思っておる。」

「そうね…天の御使いとして担ぎあげるには十分な資格はあるだろう。…雪蓮の好きにきなさい。」

「つまりは武がここにいることを認めるってことよね。」

「そうよ。ただ、一つ聞くが貴様は今後どうするつもりなのだ。」

周瑜の問いに考えるも事実を述べるしかない。

「どうするもこうするも行く宛てもやる事もないからな…」

それがいま武が置かれている状況なのだ。さらに言えば、今の武にこの世界を生き抜くすべは何一つなかった。

「…それだったらさ。私達としばらく一緒に行動しない。」

「いいんですか？」

この申し出は俺にとってはありがたかった。

「ただし、彼にはここにいて条件としてさっき雪蓮と決めた幾つかの事を約束してもらわよ。」

周瑜の言う事はもつともだ。働かざる者食うべからずという言葉があるようにどんな形であれ、生活する手段を提供してくれるのだ。

それに見合う対価は支払うべきだ。しかし、気になるのはその条件だ…

「条件って？後、何ですか？さっきから何度か出てきている“天の御使い”っていうのは…」

聞きなれない言葉に聞き返す。

「管輅っていう易者が大陸全土に吹聴して回ったのよ。」

孫策の言葉に黄蓋が言葉を続ける。

「管輅曰く、“黒天を切り裂く流星、二人の天の御使いを戴き、天より飛来せり。その者、白く輝く衣を纏い、その智と輝きをもって治世に導く光となる。黒き衣を纏いし者、武勇、まさに天を衝き、地を砕く。叡智、まさに雷光一閃、闇を切り裂く。その武勇をもつて乱世鎮める…彼の者達を手にいれし者、乱世を統べる覇者となる”とな。それで状況証拠から貴様がその一人と言う事は十中八九間違いないだろう。」

「だから、あなたが天の御使いという存在…いえ、そういう存在になれるって事。」

「…そういう存在になれる？ああ、なるほど…」

要は俺がその天の御使いである必要はない。ただ、それらしい人がここにいるってことが重要という事だ。

「…分かったようだな。」

「まあね…」

「じゃあ、あなたはこの孫呉で私達とともに行動するという事で決まりね。」

「分かった。で、俺がここにいる為の条件を聞いておこう。」

「一つ目は、あなたは孫呉に与する天の御使いとしてふるまう事。」

「分かった。善処する。」

「二つ目の条件は、あなたの知恵を呉の統治に役立てる事。」

「知恵？俺の知恵なんて、たかが知れてると思いますけど…」

俺程度の人なんて幾らでもいる。それに孫呉を代表する軍師、周瑜から知恵を貸せと言われても何をしていいのか見当もつかない。

「要はあなたがいた世界の知識で呉の統治に役立つ様な事があるなら私達に教えてって事。」

なるほどと納得する。

「そういう事なら幾らでも協力するよ。」

「三つ目はあなたから私の配下の武官、文官と率先して交流を持つ事。」

他の人達と交流をもつ。それは呉の統治を手伝う為だけでなく、生きていくうえで必要な事。それをここでいう必要がある事なのだろうか？

「どういう事？」

「まっ、簡単に言ってしまうえば、口説いてまぐわれって事ね。」

「そうか。わかった…ってまぐわう!？」

「ええ、そうよ。もちろん嫌がる女の子に無理やりするのは駄目だからね。」

「無理やりそんな行為には及ばない!けど、何でそんなこと…」

「天の御使いとその子孫がこの呉にいる。または天の御使いと関係をもった者がいるという事実が重要と言う事よ。」

「なるほど、そういう事が…」

言ってしまうえば天の御使いは神の使い。この時代の人達にとっては神仙の類に等しく、畏怖、畏敬の存在であり、絶対の正義。血筋のつながりも同様にこの時代の人間にとって畏敬の対象であり、血統に対する過剰なほどの意味合いを持つ。俺がそれを認めた場合、孫呉はその両方が手に入る。

「つまり、俺がその天の御使いを名乗ることで神秘性のある血統が手に入るってことだな。そして、この国は神の使いの血をひく者、神の使いと関係をもった者が統治する国。そんな俺がいるこの呉は国内では畏敬、対外的には畏怖の存在…孫呉に逆らう事は天に逆らうことに等しいと認識される。特にこの影響を受けるのは被支配層の人達…味方としてならその指揮は増大し、頼もしい事この上ないが、敵方に回ればその存在は脅威でしかない。」

「ほう、なかなか飲み込みが早いな。」

「そこまで言われればね…まあ、行く宛てもなければ、やらなければならない事もない。俺の力が役に立って言うなら微力ながら力になるよ。ただし、三つ目の条件については承服しかねるところがあるけど、あくまで双方合意の上でしか行っ気はないからな。そこだけは譲れない。」

「うん、それでよろしい。なら、冥琳、通達をよろしくね。」

「全く…相変わらず無茶な注文をしてくれるわね…」

ため息をつく冥琳に、悪びれない笑顔で孫策が笑みを浮かべる。

「そこを何とかしてくれるのが冥琳じゃない。期待してるんだから。」

「

「はいはい、分かったわよ。」

「うん、じゃあ、改めて自己紹介するわね。私は孫策。字は伯符。

真名は雪蓮よ。」

「ほう、真名までお許しになるか！」

驚いた表情で黄蓋は孫策を見据える。

「だって、体を重ねる事になるかもしれない相手なんだから、それぐらい特別扱いをしてあげないとね！」

とんでもない発言が多いような気がするが、さっきから感じていた疑問を口にする。

「さっきから気になってたんだけど、真名って何？」

「真名とは親兄弟などの親しい間柄の者や、信頼に足る者のみが呼ぶ事を許されるその人が持つ真なる名の事じゃ。」

「たとえば、その真名を知っていてもその人の許しなく真名を呼ぶ事は許されないの。それを許可なく呼べば、その場で切り殺されてもしょうがないの。」

「…その真名を託されたって事は孫策は俺を信頼してくれたって事の証ってわけだよな…」

「まあ、そういうことね。」

「…責任重大だな。分かった。俺もその信頼に応えられるように精

「一杯やってみるよ。」

「本当に飲み込みが早いな。うむ、ならば、私の名は周瑜。字は公瑾。真名は冥琳。私の真名も武に託す。よろしく頼む。」

「うむ、儂も改めて名乗らせてもらおう。わが名は黄蓋。字は公覆。真名は祭じゃ。よろしく頼むぞ。」

「俺の姓名は皇武。字と真名はない。俺の世界で言うなら真名は武が真名にあたると思う。だから武と呼んでくれて構わない。雪蓮、冥琳、祭。これからよろしく願います。」

俺は頭を垂れ、三人はそんな俺に笑顔を返してくれた。

五 章 初陣・上

雪蓮、冥琳、祭の三人の自己紹介を受けた後、冥琳の補佐をしている軍師の陸遜を紹介された。彼女もまた俺にその真名、穩を託してくれた。まあ、あまりにも軽いノリで託されたものだから、何か不安が残るが いいのだろうか…

それから、雪蓮は荊州本城に居を構える袁術の召集を受け、ブツと文句を言いながら部屋を出た。

「すまないけど今の現状って何がどうなっているの？」

今の現状がつかめなければ、動きようがない。少しでも状況を掴まないと、例え役立てるような事があっても動きようがないのだ。

「ふむ、まずはその説明をせねばならんな。冥琳。」

「ええ、まずは私達の生い立ちから説明しよう。」

冥琳たちはそんな前置きの後、淡々と冥琳達を取り巻く環境について説明してくれた。

まず、俺がいる場所は荊州と言うところで、その太守に袁術という人物がいる事。

雪蓮の母、孫堅に率いられ、一時は荊州近くまで勢力を広げたが、その戦の中、孫堅が不慮の死を遂げた事で勢力が衰退した事。

孫堅戦死の戦死により、内乱が勃発。後を継いだ雪蓮は仕方なく、荊州の太守、袁術の客将という立場に甘んじているという事。

しかし、いずれは独立し、天下統一に乗り出したいと思っている事。

「今後は平穩とは無縁の生活を送る事になるから覚悟はしておけよ。」

冥琳のありがたい脅し文句で説明は締めくくられた。

俺がこの珍妙な三国志の世界に来て一週間ほどのことだった。館に飛び込んできた一人の使者の登場により、ついに戦乱の幕が開くことになった。かの有名な黄巾の乱の勃発だ。大陸の各地でその動乱は広がり、世は阿鼻叫喚の時代となったと…

そんな孫策の下に一通の書簡が届く。それは袁術からの召喚命令…内容は黄巾党の制圧命令だろう。

使者の話では漢王朝より各地の有力諸侯に対して、黄巾党討伐の勅令が下っているらしい。それは漢王朝の衰退を意味していた。

「…軍議ね。俺が出る必要はないんじゃないか？」

俺は中庭に来るように言われ、そこにいた。しかも呼ばれた内容が軍議に参加しろとなれば、ごく普通の反応だと思う。

「お前を客扱いする道理もなければ、そんな余裕もない。それに初めに知恵も貸す事も条件に含まれていただろう？それに今度の戦からは武にも部隊を率いてもらう。部隊の編成は武の好きなようにして構わないから、事前に面通しなどは済ましておけよ。」

「ん、分かったって…ちょっと待ってくれ。俺は部隊を率いた事もなければ、戦場に立った事もなんだぞ。それをいきなり…」

俺が軍議に参加するというのは当然と返されたうえに、戦場への参戦の要求。

「いきなりという訳ではないだろう？まだ準備する期間はあるんだ。いずれ、武は戦場に立つて指揮して行かなければならないんだ。戦場に立ち指揮を執るという事は座学だけで身に付くものではない。実際に経験して初めて身に付くものだ。」

「ま、気楽に構えておけばよい。何も敵総大将の首を獲りに行つて来いという訳ではないのじゃ。武が指揮するのは遊撃隊。戦場の状況をいち早く把握して臨機応変に対応すればよい。」

「…簡単に言ってくれるな。大体、みんなの配下の兵達が実力もはつきりしない新参者の俺を信用するのか？大勢の人間を動かすって

ことは俺の力量が兵達に認められていないといけないだろう。」

「だったら兵士さん達に武さんの力を見せつけてあげればいいじゃないですか」

「ふむ、雪蓮と互角に戦える武力があるのだ兵達もすぐに認めるだろう。」

それが正論なものだから言い返しようがない。

「…確かにそうなんだろうけど…簡単に言ってくれるよな…」

「それについては改めて話そう。」

「分かったよ。って、雪蓮がいないけど？」

普通ならこの席にいるべき人…まあ、座っていることも珍しいけど…

「雪蓮は袁術に呼ばれて荊州の本城に向かっている。要件は十中八九、黄巾党討伐の事だろう。で、今回の議題もその黄巾党討伐の事だ。」

「この時期の出頭命令という事はそれ以外に考えようがないですからね。」

相変わらず暢気な声を上げる。

「それを見越して儂らは準備ができ次第、この館を出発し、策殿と合流を果たす。」

祭さんはこれからの行動を端的に説明してくれた。

「で、合流して、すぐに黄巾党討伐に向かうという事か？」

「そういうことだ。」

「ん、分かった。ところで軍議の内容って結構重要な内容だよな？なんでこんな人目につく場所でやるんだ。」

大体軍議なんてものは関係者以外に聞かれてはいけないような内容がほとんどだ。それをこんな人目に着くところするのは意外だった。

「ここが一番他者の耳を警戒できるからな。」

「なるほどね…」

袁術が目を光らせているこの状況下で密談でもすれば、孫策に翻意

有りとして討つ格好の機会を与える事になる。ならば、普段から常に目に付く場所で会議や談笑をしていれば疑われずに済む。そうすれば、いざ決起する時にも袁術の目を気にすることなく、堂々と会議ができるということだ。

「状況の説明を終えたところで、発生した問題について意見を聞かせてほしい。穩、頼む。」

穩の表情はいつものほほんとした表情ではなく、一人の軍師の表情へと変わっていた。

「はい、当面の問題は三つ。一つ目は兵数の不足、二つ目は軍資金、三つ目は二つ目に絡みますけど兵糧ですね。」

「まずは兵数の問題だが…」

「敵の数は？」

「荊州で暴れている黄巾党は南北の二部隊で北が本隊、南が分隊。

…袁術さんの事ですから確実に私達を本隊に当てるでしょうね。」

「…となれば、兵は多いに越したことはないが…集められそうな人数はどうじゃ？」

「多く見積もっても五千がいいところでしょうね…」

「それでは心もとないのう…分隊だけなら何とかならんでもないが…」

「まあ、無理でしょうね。袁術さんの事ですから絶対に本隊を宛がってくるでしょうし…」

「確かにそうじゃろな…うーむ…」

「…兵数の差は策で何とかするしかないということね…兵法としては邪道だが、無い袖は振れん。」

「とりあえずは最低限の数…ということでしたん置いておきましょう。次は軍資金の問題ですが…」

「私が把握している館の金子は多くはない。戦ともなれば武器や兵糧、軍馬…それらをそろえる為にも軍資金が必要だが…」

「町の有力者に協力を要請するという手もありますけど…それでも

十分な資金には満たないでしょうし……」

「兵と一緒に無い袖は振れないということか……」

「ですねえ……どうしましょう？」

「今のところ思いつくことはない。しかし……資金がなければ兵糧の調達もできない。どうしたものか……」

「ここまで静観していた武が口をはさむ。」

「簡単な話だろ？袁術に出させたらいいじゃないか？」

「今まで沈黙を保ってきていた武に三人の視線が注目する。」

「……どういう事が訳を聞かせてもらおう。」

「いや、だつてさ。話を聞いていれば、袁術は雪蓮に黄巾党の本隊を宛がいたい。逆に言えば、自分達が本隊と戦うことは避けたいという事。だったら、黄巾党本隊の討伐を請け負う代わりに、兵士、軍資金、兵糧を袁術に出させればいい。」

「拒否してきたら？」

「多分そつちのほう都合がいいと思う。拒否してくれば、雪蓮と合流をして南の分隊を撃破。その後、勝利の様子をこの荊州の各地で喧伝すれば、太守としての面子がある袁術は北の本隊と戦わざる得ない。黄巾党の本隊となれば袁術軍だけでは対処しきれないだろうから、ここぞというところでこちらから援軍を出してやる。そうすれば袁術にも貸しができるからな。」

条件を承諾すれば孫呉の戦況は一転、拒否すれば袁術に貸しを作れる。

「見かけによらずなかなかあくどい事を考えますね。」

「……要求の内容はどうする？」

「兵を五万とそれを賄える兵糧と武器、武具……軍馬は一万って言つたところでいいんじゃないか？」

「……いくら袁術が馬鹿とはいえ、それだけの条件なら断つて来るじやろうな……」

袁術の現状がわからないが、これだけの物を捻出するのは困難と思う。

「我らの現状では黄巾党の本隊に当たるのは厳しいな。うむ、武の案を採用しよう。」

「よし、ならばすぐに策殿に伝令を出し、交渉をお願いするかの。」

「それが良いでしょう。」

「うむ、誰がある！」

「はっ！」

「これより策殿に伝令を放て。内容は……」

伝令兵に指示を与える祭さんの横で冥琳がじっとこちらを見ていたのに気付く。

「……何？何かおかしいこと言ったか？」

「いや……雪蓮の言う通り、案外いい拾い物だったと思ってな。」

「……俺が？大したことはないと思うぞ。」

「いやそんなことはないさ。なかなか優れた洞察眼をもっている。

ふむ、先ほども言った事なのだが、今回の戦、お前にも出陣してもらう。お前ほどの武と智謀があれば戦場でも十分に通用する。」

「通用するといわれてもな……人の生死に係わるような戦場に立った事なんて一度もないんだぞ。」

「ならば立て。経験を積む事で人は成長するものだ。」

「それはそうかもしれないけど……」

「怖いのか？」

「……そうかもしれない。確かに俺はこの世界に来てすぐに人を殺した。あの時は無我夢中だった。だけど俺は戦争とは縁のない世界にいたんだ。だから突然、戦場に立てと言われて立てるほど強くはならない……」

「怖いと思うは当然だ。戦争ともなれば、私とて生きて帰れる保証は何一つない。だが、武……お前が先ほど提示した案。それが採用された今はその策を検索した責任を取らなければならない。この献策によって勝ち戦になっても負け戦になっても、敵味方関係なく多くの方が死ぬことになる。勝手な言い分になるかも知れんがな、自分

が吐いた言葉に責任を持て。」

俺を冥琳の視線はまっすぐと見つめていた。

「…俺が戦場に立つという事は責任を取るという事になるんだな？」

「ああ、お前が行動したことで起こった結果。それを真正面から受け止める。…それが責任を取るという事だ。」

「分かった。」

思いついた事をただ口に出しただけ…ただ、それだけだった。でも、それは間違ってた。自らの意思で言葉にする。それはその言葉には責任が伴う。真剣に生きていれば生きているほど…言葉の重さ、それを俺は改めて知らされた。そんな当然なことを俺は忘れていたんだ。

「…俺も出陣する。」

「そう言ってくれると思っていたよ。」

「いろいろと葛藤はあるけどね…ただ俺は人を殺す事ができるかは分からない。あの時はただ無我夢中で…今あの時の事を思い出すと改めて震えが来るんだ…この手で人を殺したんだって…それでも俺は…人を傷つけたり、殺したくはしたくない。もちろんみんな同じ気持ちだっってわかってる。冥琳だっって、雪蓮だっって傷つけるのが楽しくて剣を振るっっている訳じゃないっってことは…」

「確かにそうだ…だがな、武…今回の敵は黄巾党…民草を苦しめる者達だ。私達はそんな輩に容赦はできない。してはならないんだ。」
一息ついて冥琳は

「お前の智も武も私達は認めている。だからお前も私達を頼れ。お前はお前が考えているよりも私達にとっても大切な存在なのだ。」

俺はその言葉に涙を流しそうになるのをグッと堪えた。

「今回は黄蓋殿の一隊に加える。五百人位の小隊を任せる事になると思う。遊撃隊となるが、黄蓋殿や雪蓮がしっかりと敵を引きつけてくれるだろう。だからお前はお前が思うように動くといい。」

「分かった。頼りにしているよ。」

その言葉に三人はそれぞれに戦の準備の為に持ち場に帰って行った。

本当なら俺が彼女達を支えてあげないといけないのだろうが、俺には決定的に経験が不足している。戦場において経験不足というのは何よりも危険極まりない。経験が不足している今は勝利を掴むことはおるか、生き残る事も難しくなるだろう。

「経験か…元の世界に戻るかわからない今は何が何でも生き延びる事…それが一番重要だ…その為にも何でも経験していかないと…でも…」

戦いに加担するという事はこの手で人を殺めるという事…誰が言っていたんだろうか…一人殺せば殺人犯、十人殺せば殺人鬼、百人殺せば英雄だったか…いずれ俺も人を殺す事に慣れてしまっんだろうか…

俺はただこれから巻き起こる戦乱の世に立ち向かう術を探していくこととなった…

六 章 初陣・下

流石の袁術も孫策が提示した条件を断ってきた。

しかし、袁術が支援を断った事で孫策は既に出陣した周瑜達と合流し、電光石火の如く進軍。荊州南方の黄巾党と対峙した。

対峙したのは張曼成を総大将とした軍勢七千五百、また、副将には？茂、波才が控えていた。鶴翼陣を組み、迎撃の構えを取っていた。

孫呉はそれに対し、総数五千。鋒矢型に陣を展開する。先陣に孫策、二千、中軍に陸遜一千、後曲に周瑜一千、そして武と黄蓋が率いるそれぞれの遊軍合わせて一千。

張曼成は孫呉の陣立てとその兵数を見て最早、勝ったものと決め付けた。

鋒矢型の陣の長所は突破力には長けている事である。逆に短所は横撃や方位陣形には脆い陣形である事だ。

こちらが陣を展開した後でこの布陣。殺してくれと言っているようなものだった。副将である波才と？茂は天性の戦上手と謳われる孫策の布陣を不審に思ったが、大将の張曼成は二人の進言を受け入れず包囲戦闘に踏み切った。

「蒼天已死…黄天当立…我らはこれより蒼天の獣…孫呉を打つ！皆の者、正義は我ら黄天にあり！臆せずに進み、蒼天の獣共を掃討せよ！総員突撃ー！」

張曼成の掛け声に黄巾兵達は雄叫びをあげ、突撃を開始した。その様は全てを食い荒らす蝗の大群かの様だった…

「世は乱れ、人心は荒む…我らの目の前にあるはその元凶、黄巾の賊徒！これより我ら孫呉は飛躍の時に入る！この乱を収め、我ら孫

呉の名を世に知らしめ、平和な世を我らの手で築くのだ！総員抜刀せよ！突撃！」

孫策の鼓舞に孫呉の兵達の士気は最高潮に上がった。

孫策軍は瞬く間に張曼成軍に取り囲まれようとしていた。孫策軍は徐々に後退を始めていた。張曼成軍は勢いに乗り孫策軍に熾烈なまでの追い打ちをかけていった。しかし、孫策軍霸電光石火の如き速さで撤退を開始した。黄巾軍は包囲しきれず、鶴翼陣は崩れ、方円陣のようになっっていた。それを確認した周瑜は大号令を出し、右翼左翼に待機していた黄蓋隊と武の部隊に前進させた。

左翼の軍を率いていた？茂は咄嗟に行軍速度を下げ、完全に包囲される事だけは回避できた。しかし、ほぼ包囲されている今の状況を苦々しく思った。

鶴翼陣に限らず、どの陣形も完全無欠の物などはない。相手の行軍状況を見て布陣を変え、臨機応変な対応をしなければならない。確かに鶴翼陣は最終的には敵を包囲して包み込むような陣形になるのはおかしくはない。寧ろ、それが自然な流れである。しかし、現状は勝ちに急ぐあまり包囲しきる前にこちらが密集陣形になってしまっているのだ。これではと、？茂が思った時、左翼に突如現れた孫呉の軍に？茂軍の兵達は浮足立った。

右翼の陣を率いていた波才も？茂同様にこの状況を苦々しく思っていた。包囲するはずの自身達が逆に包囲されかけているのだ。しかも中央の張曼成はそのことにも気付かず更に進軍をしようとしているのだ。中央の援護に軍を動かそうとすれば、右翼から黄蓋軍の出現…波才は？茂に撤退準備をするように伝令を放ち、いかにしてこの状況を切り抜けるかを思考した。

俺は五百の兵を率いて敵左翼を回り込むように進軍していた。

「御使い様：敵は本隊に集中していますが、本隊は大丈夫なのでしようか？」

不安がる副官に軽く笑みを浮かべて

「：ここは孫策を信じて俺達は素早く敵左翼に回り込み包囲するところが先決だ。だから、少し行軍速度を上げよう。」

冥琳の策は的中した。鶴翼の陣に対して鋒矢の陣という明らかに不利な陣形を取ることで敵軍を釣り、逆に包囲することに成功した。その時だった敵左翼に配置されていた部隊がこちらに気付いたらしく俺達に向かって進軍を開始した。敵軍を確認した俺は部隊の兵達を鼓舞する為に号令をあげた。

「み、御使い様！敵が来ます！」

「：分かった！敵は数は多いが所詮は烏合の衆、まずは俺が初撃を放つ！その後、浮足立った敵を討つ！皆、臆せずに進むんだ！」

黄巾党は敵：討たなければこちらが討たれる。俺は覚悟を決め、腰の刀に手を掛けた。

「：高天無双流抜刀術、烈風龍閃！」

横一文字の斬撃がこちらに向かってくる黄巾兵を切り裂いた。その一撃に黄巾兵の進軍が緩んだ。

「今だ！総員突撃だ！」

目の前にいた兵士達が吹き飛ばされた事に？茂は驚愕した。

「一体何が起きたというのだ！」

？茂は兵士に確認した。

「はっ！先ほど左翼に現れた軍勢に兵を向けたところ、一人の男が剣を横に振った刹那、わが軍の戦鬪にいた兵士達が真つ二つに……」

「何だと！？孫呉の兵には化け物でもいるというのか！？」

愕然とする？茂の下に前線の兵士から伝令が入る。

「伝令！孫呉軍の兵約八百。左翼より突撃してきます！」

「チッ！已むを得ん！総員突撃してくる敵を迎撃する！各員、怯まずにかかれ！」

号令をかけるとともに？茂は愛刀を片手に駆け出した。

冥琳の策は的中…よくまあ、簡単にかかるものじゃ…

「よいか！皆のもの！これより儂らは敵右翼を叩く！臆するなよ！」
儂の号令に配下の兵達が喚声をあげる。

「うむ、ならば弓隊。狙いは敵右翼！構え…撃てー！」

黄蓋隊が放った弓は対面していた波才隊に降り注いだ。

「チツ！？茂と連絡はつかんのか！」

「はっ！？茂隊も左翼より現れた孫呉の部隊と交戦中の為、連絡は最早…」

「報告します。本隊が孫策軍と交戦に入りました。」

兵達の報告を受け、波才は苦虫をつぶしたような顔をした。

「…本隊と私達と？茂隊がそれぞれ分断されたことで兵力差による私達の有利はなくなり、戦の勝敗も決したか…」

波才は少し考え込むと

「これよりわが隊は解散とする。各自それぞれに逃げ延び生き抜くのだ！」

「波才様は…」

「私はアイツを助けにいき、合流後撤退する。」

「分かりました…ご武運を…」

立ち去る兵を見送り、波才は馬に乗り駆け出した。

？茂軍は突撃してくる孫呉軍を撃退しようとするが徐々に抑え込まれようとしていた。主将の？茂も奮戦するが相手の勢いに圧されつつあった。そんな？茂の前に一人の武将が立ちはだかった。

？茂はこれは好機とその武将に立ち向かった。

「我が名は黄巾党張曼成軍副将、？茂！その者！孫呉の将と見た！いざ、尋常に勝負せよ！」

大地を震わすような声、手にした巨大な武器を振るう事で起きた衝

撃波に孫呉の兵は恐れ慄いた。そして、その名乗りを受けた将は手にした刀を向け、

「その申し出、孫呉が将。皇武がお受けする！いざ尋常に勝負！」と、？茂に負けぬほどの声を張り上げ、八双の構えを取り突出した。

俺は？茂と名乗る黄巾の将の申し出を受けた。一騎打ちとなれば十中八九、他の兵達への被害は抑えられる。確かに、殺気を込めて斬りかかってくる者を相手にするのは至難な事だが、多対一で戦うよりも一対一の戦いの方が俺にとっても望むところだった。

私の名乗りに答えたのは十代後半と思える細身の若武者だった。私は構う事なく手にした大剣を振り下ろした。青年は手にした細い剣を私の大剣で受け止めるような構えを取るが、その剣が折れるような感触はなく、代わりに手に着た衝撃は大地を叩きつけた感触だった。青年は剣を私の大剣を滑らせるように受け流し、私の右肩にめがけて剣を振り下ろしてきた。

「舐めるなー！」

私は叩きつけた剣を引き寄せ、剣の腹で青年の斬撃を受け止めた。青年は間合いから離れると、剣を鞘に納めた。

振り下ろされる大剣を俺は刀が大剣と接触する寸前に刀を倒し、流すように刀を振り上げ、刀の峰を対峙する将、？茂の肩口に振り下ろした。

「舐めるなー！」

叩きつけた大剣を素早く引き寄せ、俺の攻撃を受け切った。俺は戦闘前に冥琳達と話していた内容を思い出した。

「兵力差を覆す圧倒的な力で覆す？」

「そうだ。今の孫呉にとって必要なのは兵力の他に重要なものとして風評というものだ。風評が高まれば自然と人が集まり、資金や軍

事力の充実は容易になる。」

「つまり、今回の黄巾党の討伐は…」

「うむ、孫呉の力を見せつけるいい機会と言う訳じゃ。」

「ええ、今回の戦は民を虐げる黄巾の賊退治…悪者退治って事になるから風評を高めるにはもってこいの相手ってわけ。」

「圧倒的な力でこの兵力差を覆すか…はっきり言って無茶を言うよな…」

俺は刀を納刀し、刀の柄に手を掛けた。

「？茂と言ったな…」

「…その通り、わが名は？茂。誇り高き武人だ。」

俺はそれを聞き、

「ならば？茂…俺が放つ攻撃を受けてみよ！高天無双流抜刀術が奥義が…双龍閃！」

突進しながら間合いに入った瞬間に抜刀した。

私は突進してくる青年に大剣を振り下ろした。私の剣は確かに青年を捉えていた。しかし、青年が放った斬撃が私の武器に接触した感覚はなかった。しかし、私の剣は真つ二つに両断され剣先が吹き飛ばされた。それと同時に私の体は青年に引き寄せられるように吸い寄せられ、青年の二撃目が私の脇腹に突き刺さった。胸から空気が抜けるような感覚に私は咳き込んだ。

「カハッ…」

私が構えを取りなおそうと顔を上げると目の前には青年の剣が突き付けられていた。

「勝負あります。ご覚悟を…」

その言葉を放たれ、私は敗北を悟った…

俺は刀を突き付けた。

「勝負あります。ご覚悟を…」

この言葉を告げた時、決めた筈の覚悟が揺らいでいた。

―俺はこの刀で人を殺したいのか…

―殺したくない…そう願っていた…

―でも殺さないと孫呉の風評は…

―風評なんかよりも人命ほど重要なものはないだろう！

―でも…

―でもじゃない！

自問自答を続け、刀を振り下ろすことを躊躇していたその時だった。風を切る音とともに一本の矢が飛来した。俺は紙一重でその矢をかわし、？茂から間合いを取った。

「？茂！無事か！？」

？茂にその将は駆け寄り？茂も折れた剣を杖にして立ち上がった。

「無事とは言えんな…しばらくは剣を持てそうにない…」

「…あなたは？」

「私は黄巾軍の将、波才。？茂の救出に来た。」

「ならば、？茂さんを連れて早くこの場より立ち去ってください…」
その言葉に二人は驚いていた。

「…どういう意味だ？」

「その通りの意味です。すでに軍同士の勝敗が決した今、あなた達二人の命を取る理由は俺にはない…」

「手柄首だろう！なぜ討たない！」

その言葉に俺は叫んだ。

「殺したくない！例え敵だとしても俺は殺さずに済むなら殺したくはないんだ！さあ、行ってください！他の誰かに気付かれないうちに！」

その言葉に波才は？茂の手を肩にかけ、立ちあがった。

「礼は言わない…いずれ敵か味方が相まみえるときは容赦しない。覚悟しておけ！」

そして、二人は馬に跨り戦場から離れていった。

「よ、よろしいのですか…逃がしてしまつて…」

「構わないよ。仮に敵として立ちほだかる事があれば、俺がまいた種だ。俺が責任を持つて撃退して見せるさ…それよりもそろそろ敵本隊に対して火計が実行される。俺達はその巻き添えを食わないように後退する。」

「はっ！承知しました。」

兵隊は他の兵達への伝達の為に走つて行つた。

「これでいいんだ…これで…」

そのつぶやきは誰にも聞かれることなく空にのまれていった。

黄蓋軍と武の部隊の戦闘が収束した頃、本隊の周瑜の号令に合わせ、火矢が放たれた。黄巾軍に放たれた火矢は見る見るうちに燃え広がり、一瞬のうちに黄巾軍は張曼成もろとも焼き尽くされたのだつた。

孫策軍の活躍は周瑜や陸遜が放つた細作により荊州各地に広まつた。そして、噂は噂を呼び、孫策の精強な軍団はかつて英雄として讃えられた霸王項羽に見立てられ、小霸王が率いる軍勢と畏怖され、大陸全土に知られるようになったのだつた。

この一戦により、袁術は黄巾党の本隊と当たる事になり、黄巾党本隊に苦戦する袁術軍は孫策の救援を受け、何とか領内の黄巾党を制圧する事ができた。君主としての無能さを顕わにした袁術の風評は地に落ち、武勲をたてた孫策の一党の評判は鰻上りとなつたのだつた。

七 章 黄巾の乱と参戦と内政

孫策達が荊州の黄巾党を制圧してもそれは大陸全体からすれば地方の些細な出来事にすぎなかった。

騒乱は騒乱を呼び、燃え盛る火にガソリンを掛けるかのように騒乱は大陸全土に伝染していった。阿鼻叫喚の地獄絵図と化した世界の夜明けはまだ先だった…

漢王朝はこの反乱を抑える為に官軍を総動員させ、これに当たった。しかし、黄巾党の大軍勢を前に太平の世というぬるま湯に浸かりきっていた官軍にかつての精強さはなく、漢王朝の衰退を世に示しただけだった。

官軍を打ち破った事により勢いに乗った黄巾党はその規模をさらに拡大していった。

そんな情勢の中、各地の諸侯は現状を覆そうと立ち上がった。そんな諸侯達は各地で黄巾党を打ち破り、黄巾の乱は徐々に収束に向かいつつあった。そして、遂に諸侯は黄巾党の首魁である“大賢良師”張角の本拠地冀州に詰め寄せたのであった。

許昌に本拠地を置く陳留の刺史、曹操。

袁術の従姉にして河北を抑える袁紹。

幽州を治める北方の豪族公孫瓚。

義勇軍を結成し、各地で連戦連勝を重ねる劉備。

その他にも西涼の馬騰など勇名轟く諸侯が参戦していた。

そして、その諸侯の中に俺達孫呉の軍勢もいた。

荊州の黄巾党軍を制圧した孫策軍は追撃を重ね、荊州国外まで追いやる事に成功したのだった。遂に冀州の地にて黄巾党との最終決戦が行われようとしていた。

時を少し遡った荊州、南陽城。

「と、言う訳での。孫策。今こそが黄巾党を殲滅する好機じゃと思わんか？」

「…確かに時期はそうね。…だけど私の兵だけじゃどれだけ頑張っても殲滅は無理よ。」

孫策の言葉は事実であつた。戦は相手より多く、兵を集める事が常道。幾ら孫策の兵が精強とはいえ、覆す事ができない程の兵力差。それを覆す事ができる人などこの世には存在しないだろう。人外の力を持つ者ならば別かもしれないが…

孫策のその言葉に袁術は小馬鹿にしたような驚きを見せて

「何じゃ？最近は何に民達に英雄とか祭り上げられておるようじゃが、その期待を裏切るつもりかの？」

孫策の顔には怒りの表情が出そうになっていたが、ぎりぎり持ちこたえているようだった。

「そんなことは言つてないわ。単純に兵数が足りないから無理だつて言っているのよ…黄巾党本隊の兵数はざっと見積もっても二十五万。それに比べて、私の兵はどれだけかき集めたとしても一万も集まればいい方…これじゃ戦にもならないわよ。最も各地に散っている呉の旧臣達を呼び寄せても構わないなら、殲滅は無理でもある程度戦うくらいは可能でしょうけど…それでも黄巾党を殲滅撃破する事は不可能でしょうね…」

「ふむ…なら特例として認めてやるのじゃ。じゃから、さっさと呼び寄せて妾の為に黄巾党をやっつけてくるのじゃ。」

駄目元で言つた孫策は驚くのと同時に呆れ顔だった。

「…分かつたわ。袁術ちゃんはどうするつもり？」

「勅命じゃ。妾も出るぞよ。」

その言葉に側近の張勳が続けた。

「私達は万全の準備を唱えた後、西進して黄巾党の分隊を撃破しますので、孫策さんはお強いですし、北方の本隊との戦闘をお願いしますね。」

「無茶を言ってくれるわ…」

「孫策ほどの将であれば敵は強いほど嬉しかろう？頑張って名声をあげてたも。」

「…とりあえずありがとうと言っておくべきかしら？」

「うむ、苦しゅうない！」

「これで通達はお終い？だったら、私は館に戻って準備をしてくるから。」

「下がってよいぞ。…妾を喜ばせる結果を期待しておるぞ。」

孫策は立ち上がり、ため息をつき城を出た。

「あつ、孫策様が帰ってきましたよ…」

雪蓮はどうやらまた無理難題を言われたようで難しい表情をしていた。

「ただいま…」

雪蓮の様子に冥琳は呆れた顔をして

「その顔だとまた何か無茶な事を言われたんでしょ…ね…」

雪蓮はため息をついて

「黄巾党の本隊を叩けだって…ほんと無茶ばかり言ってくれるわよ…」

…

その言葉にその場にいた全員が呆れた顔をした。

「なんとなくは予想しておったが…本隊を叩けとは…情報だと大賢

良師が率いる黄巾党の本隊は二十万とも三十万とも聞いておるのに

…

「私達だけで勝てるわけないですよ…」

「俺も同感だな。さすがに今の戦力でその大軍に立ち向かうのは無謀だよな…」

その場にいた誰もが頷いた。

「普通の人ならそう考えるわよ…でも、あの二人は…」

「正真正銘のおバカさんですからね…」

「確かに馬鹿じゃからな…」

「救いようのない馬鹿ですしね…」

「そんな事を言っては馬鹿に失礼だろう？」

口をそろえて袁術達の馬鹿さ加減を確認する。

「しかし、策殿はどうするおつもりじゃ？」

「とりあえずはみんなを呼び寄せてから考えるわ。」

「みんな？という事は袁術は旧臣を呼び集めることを容認したのか？」

「本当に馬鹿よね…」

皆は改めて袁術達の馬鹿さ加減に呆れるのだった。

「しかし、今はその馬鹿さ加減ありがたい。これで軍が增強できる。」

「うむ…これから先々のことを考えるならば確かにこれほどありがたいことはない。」

「今の朝廷に統治能力は皆無…そして今回の黄巾党の乱…これから先は動乱の時代になるのは明白ね。」

「同感ね。ではすぐに使者を出して各地に散っている旧臣達を呼び寄せよう。」

「ええと…興霸ちゃんに、周泰ちゃん。孫権様に尚香様にも連絡しないといけませんね。」

穩のその言葉に雪蓮は

「尚香はまだいいわ。まだ連絡しないで…これから先は賭けになるから…」

「…尚香様が残っておってくれば、孫家の血が絶える事もない…という訳か。儂は賛成じゃ。」

「そうね…では尚香様には今しばらく待機してもらおう。」

「ええ、お願いね…」

「出陣はいつにするつもり？」

「すべての準備が整うまでは出陣しないわ。袁術にもそう言い含めておいたから、しばらくは何も言っていないでしょう。」

その言葉に三人は頷いた。

「それはありがたいです」では、私は使者の選定と兵站の準備に取り掛かりますね。」

「ならば軍編成に関しては儂が承ろつかの。策殿と公謹は軍略の決定をお願いしようかの。」

「部隊の合流には行軍途中で実施するからそのつもりでお願いね。」

「任せましょう。では軍の編成が終了次第出陣しましょう。」

雪蓮は一息ついて皆の方を見て言葉を綴った。

「いよいよこの戦いから私達、孫呉の独立に向けた戦いが始まる。

皆、私に力を貸してね。」

「当然だ。」

「堅殿との約束…じゃからな…」

「はい。」

三者三様に返事を返すがその言葉に秘められた思いは誰もが一緒だった。

黄巾党本隊との戦が決まってから早五日…俺は今回も一部隊を率いて参軍する事になった。その為、昼間は祭さんと鍛錬、夜は冥琳と軍略に関する講義を受けるとというのが日課となっていた。

「…と、ここまででは分かるか？」

私は武の思った以上の才覚に驚いていた。

「ならば、この馬陵の戦いで孫賓が何故、撤退中に竈の数を減らしていたのか応えてみてくれ。」

「…さつき冥琳が“魏の兵は勇猛果敢、斉の兵は臆病者”っていう風評が魏国で広まっていたという話をしていたよね。だとすれば、魏のホウ涓は斉軍の逃亡兵が増えていると考えるはずだから、深追いさせる為に竈を減らしていたんだと思う。そして、孫賓と旧知の中で優劣を競い合った仲だというなら、なおさら決着を急ごうとするから、追撃は少数になる。そこを待ち伏せて奇襲すれば、勝利は確実だよ。逆に本当に兵が少なくて、確実に逃げるといふ事な

ら、竈の数を減らさずに増やすって手があるかな？これなら、負けているはずの兵が増えているって錯覚を相手方に起こさせる事ができる。普通は逃走中の軍隊に兵が加わるという事はないから、相手方は恐怖を感じて追撃はできなくなるだろうしね…」

今回、私が言ったのは孫賓とホウ涓の関係、魏国の斉に対する評価、そして、撤退中に竈を減らしたことだった。

「…正解だ。驚いたな…」

あまりにも理想的な答えを指し示した。しかも、それだけではなく、その策からまた別の策まで発展させてきたのだ。私は試すつもりで今、穏と考えている税収増加に繋がる政策について問いかけてみた。「そういえば、武。今、私が穏と思索しているのだが、税収がなかなか安定しないんだが、どうすればいいと思う。」

その言葉に武は少し考え込む素振りをした。

「…パツと思いつくのは貨幣制度を導入して貨幣での納税、商人はその事業規模で税率を変える…もちろんその代わりに事業の保証や特権を与えるのもいいかも…更に加えていくと職業ごとに納税額を変えてみるのも良いかもしれない。但し、職種ごとで納税額を変える場合、戸籍に併せて区画整備も推し進めた方が得策だと思う」

「貨幣での納税の利点は何だ？」

現状の呉では貨幣は多少流通はしている。しかし、どちらかと言えば貨幣よりも物々交換が主流となっている。今後も貨幣が流通するとも思えなかった。

「貨幣の流通に関しては租税を貨幣に変える事で民衆は必然的に貨幣を持たざるを得ない。それで、貨幣を導入すれば物の価値の水準ができるから経済の活性化にもつながる。ちなみに購入する商品それぞれにわずかに税をかける。例を挙げるとある商品を購入するのに銅銭十枚必要とする。これに一割の税を掛けるんだ。そしてこの税金を商人に払わせる。そうすれば、商品を購入するたびに税金を払う事になるからその分税収が上がる。これは商人の売り上げ総額の一割を納税させる形を取るのが最善と思う。」

「…商人の事業規模での税収の差別化と事業の保証は？」

「大富豪と小さな商人じゃ年収が明らかに違う。これから同額の税金を徴収すれば、不平が出るのは当然。だから、ある一定以上の年収を持つ大富豪に限り、割増で徴税を行う。その代わりその商人の事業を保証するか、特権を与えてやるんだ。例えば、灌漑事業などの国家が行うような事業の請負と言ったところかな。国から事業を任されるという事は信頼できる商人だつて事を民衆に主張できるから商人にとっては喉から手が出るほどの風評になると思う…」

「…しかし、最初の二割負担の税は民衆の不満を集める事になるんじゃないのか？」

「不平が出ないということはまずないだろうけど、民衆もすぐに慣れるから…大体、商品を購入しないと生活ができないからね。それにこの方法なら万遍なく税金を集める事ができるからね。」

「うーむ…」

「後、農民に対しての税制だけど、税率は三公七民くらいにして、それを商人が買い取つてその金銭に変えて国に納める。で、農民達には米の他にもさまざまな農作物、工業製品などにも従事させてそこでできた製品を自由に販売する許可を出す。もちろんこれにも少し税金を掛けてやるといい。ただ、納税に関しては民衆や商人に大きな負担をかけないようにしないといけない。だから、一つの税金で大きく取るよりも一つ一つの税金を少なくして税金の種類を増すのが一番と思う。」

「税金を少なくしてそれで税収は上がるのか？」

「税金は増税したからといって、税収は上がるもんじゃないでしょ。増税をすれば、増税した分だけ民衆からの不満が高まるから逆に税収は下がると思う。」

「なるほど…では、何故、区画整理が必要と思つた？」

「住民の事を考えるとどこに行けば必ずその品物が手に入つて状況は凄くありがたい。更に同じ職種の業者を集めて、その職種ごとに組合を作らせて互いに不正な取引をしてないかを監視させる。そ

うすれば、こちらがあまり手を加えなくても価格調整から物流まで全てを任せる事ができる。もう一つ加えれば、国としてその組合の営業を保護して、その対価として納税をさせればいい。」
これまでの武の話聞いてる限り、私達では思いつかないような奇抜な案が飛び出してきたのだ。

「全くお前には驚かされる…」

「そうはいつでも俺が言っていることなんて俺がいた世界の先達が考えた事をそのまま言ってるだけだからな…」

「それでもだ。例えそれを知識として持っけていても使うべきところで使えないなら意味はない。それにしてもお前がいた天の国とは一体どんなところなのか…」

「どんな所って言われてもな…」

その質問は実際されるとすごく困る質問だ。普通の世界と言えば普通の世界なのだが、こちらとあちらの世界では常識が違うのだ。だから、こっちの世界の常識は俺のいた現実世界では非常識で、逆に俺がいた現実世界の常識はこっちの世界では非常識になりうるのだ。
「私はお前とは論議を交わすのは嫌いではない。まあ、お前のように博識と言えるような者が多くいると思うと天の国を恐ろしくは思わがな…」そして、それと同時に天の国の事を知りたいとも思っただ。

「その言葉に俺は嬉しくもあり少し気恥ずかしかった。」

「俺のいた国か…どんな所から説明すればいいんだろう…」

「何でもいいのよ…」

突然の闖入者に俺と冥琳は驚き、声のほうに視線を向けた。

「「雪蓮!?!」」

「何よ…そんなに驚いた顔をして…」

驚くのは不思議なことじゃない。確か雪蓮は…

「雪蓮…あなた、確か軍略考えるのを私に任せて、軍編成の方に回るって言ってたわよね…終わったの…?」

「…終わってたわよ？」

その表情からは終わってない事は明らかだった。

「雪蓮…」

冥琳の背後にはどす黒い気が立ち込めているようで思わず身を引いた。

「…まあ、いいわ…」

その冥琳の言葉に俺と雪蓮は思わず、ほっと息をついた。

「ところで、何の話をしていたの？」

「武がいた天の世界の話だ。」

その言葉に雪蓮の顔は一転して目を輝かせた。

「何々？それ、私も聞きたい！」

冥琳はため息をつき、

「…武は天の国にいた時はどんな生活をしていたんだ？」

どんな生活…実際、答えにくい質問だ。

「どんな生活か…根本的な事は同じなんだけど…こっちの世界と俺がいた世界は社会情勢が全く違いすぎて、どこから説明すればいいものか…」

「簡単なことからでいいのよ。例えば、どうやってその日の糧を得ていたとかさ。」

「確かに気になるな。」

糧、つまりは食事ってことだけ…

「ねえ、どうなの？武は自分で作ってた？それとも、労働の対価として受け取っていたの？」

自分で作るという事は自給自足と言う事…これは違う。かといって就職していたわけでもないから自分で稼いでもない…最も稼業で金を得ていたのは親だ。

「特に、何もしてなかったな…」

その言葉に二人とも驚いていた。

「えー！だったらどうやって生活していたの？」

「まさか、よからぬ事に手を染めていたわけでは…」

俺はあわてて否定した。

「そんなことはしていない！…俺がいた世界では働かなくても家で食事はできたんだ…」

「どういう事だ？日々の糧が勝手に出てくるとでもいうのか？」

「俺くらいの年齢の奴らは全員学校に行く義務があるんだ。成人…俺の世界では二十歳になる大人に就労、納税の義務が国から与えられているんだ。だから俺達の年齢の奴らのほとんどは親に養ってもらってるんだ。」

俺と同じ年代と言えば大抵は学校に行って勉強してって言うのが大半だ。就職はまだ先の話だし、むしろ進学の為の勉強ってのがメインだったからな…

「なんと！？」

「だから、俺がいた世界では俺と同じ年代の奴らは学校に行って勉強して、親が子供を養うってというのが当たり前だったんだ。もちろん親には感謝しているけどね。」

雪蓮は驚いたような顔をして冥琳は

「学校、とは何だ聞いた事がない言葉だが？」

「軽く触れたけど、簡単に言えば学問を教えてくれる所。若い…俺くらいの奴らが集まって教育を受ける場所を学校っていうんだ。」

「天の国にはそんな場所があるのだな。」

「うん、俺のいた国は俺のいた世界の中でもしつかりとした制度が確立していたから、俺もそこで勉強して…」

「将来の仕事に役立てるといふ訳だな…ふむ…若者を一つの所にまとめて勉学を教えるか…人材育成にはこれ以上ないくらい効率的な方法だな。」

「効率的…と言えばそうなのかな。確かに学校があるおかげで読み書きも大体七つ八つの子供くらいから皆できるわけだしね。」

「何と！天の国ではそんな幼子まで読み書きができるというのか！？」

「うん、ほとんどの人がね。あくまで俺が住んでいた国ではという

話だけど…」

「それは驚きだ…」

冥琳は興奮気味に呟く。二つの世界の常識の違い。今の冥琳を見ているとそれを改めて知らされる。

「雪蓮、その学校という物を我が呉においても取り入れてみてはどうだ？」

「…私は今の立場の事を考えると賛成できないわね。」

笑顔で問いかける冥琳に、雪蓮は難しい顔をして答えた。

「確かに冥琳の考えは分かるわ。でも…」

「反対の訳は？」

「当たり前じゃない？支配する側の人間が庶民に学を与えたいと思う？学を身につければ、頭が回る。頭が回れば、よからぬ事を考える輩も増えるわ。」

確かに、雪蓮の言う事はこの時代においては尤もなのかもしれない。雪蓮の言う事にも一理あるしかし、これから呉を治め、政を行う上で人材は不可欠だぞ？それに学校を取り入れれば、我々が必要と思える人材を効率よく育成できる。」

「確かに冥琳の言うとおりね。けどね、本当に有為の人材なら、放つておいても頭角を現すものよ。」

「しかし、だな…」

二人が本気で論戦する姿は傍から見れば、ただ喧嘩しているように見えたりするが、こうやって本気で言い合えるってことは本当にお互いを信頼してないとできない。二人の喧嘩には誰にも断ち切る事の出来ない絆を感じさせられた。

「雪蓮…ちよつといいかな？」

「ん？武も何か意見があるの？」

「俺は冥琳に賛成だな。識字率が上がれば、呉は今よりも発展すると思う。」

雪蓮が冥琳に反対する理由が分からなかった。

「雪蓮、天の国もそうやって発展しているのではないか？」

冥琳も俺に続いて雪蓮に意見を求めた。雪蓮はやはり難しい顔をしてお考え込んでいた。

「…そうね。確かに呉は発展するかもしれない。孫呉の支配を盤石にする為というなら学校は大歓迎よ。けど、私は決してそうはならないと思うわ。」

「なるほど…そういう事が…」

冥琳は今の言葉で雪蓮の真意をつかんだようだった。

「どういう事なんだ。」

雪蓮は一息つくとも静かに頷いた。

「繰り返し言う事になるけど、孫家に尽くす為以外の目的で庶民に知恵をつけられたら困るのよ。この国にすべての人民が孫呉に忠誠を誓っている訳じゃないわ。まあ、当たり前的事なんだけどね。」

確かに雪蓮の言うとおりだ。今の時代は弱体化したとはいえ漢帝国、他にも多くの諸侯がいるのだ。何も有力な諸侯は孫呉だけではないのは事実。その孫呉も今の情勢の中では弱小勢力の一つでしかない。「私達に不満を抱いている人間が、余計な知恵を身につけたらどうなると思う？それに今までは不満のなかった庶民も、知恵をつけたせいで政の裏にも目を向けるようになるかもしれないわよね。」

「でも、そういう意見があるからこそ国は良くなるし、発展していくんじゃないのか？」

「私達は善意で国を治めている訳じゃないわ。天下を平穩にしたい。そう思うからこそ、庶民から税を集め、軍を鍛えて戦をする。それは支配者に与えられた特権なの。その特権を危機に晒す事に一体何の意味があるというの？」

そう言い放ち、雪蓮の力強い瞳が俺を射抜くように見つめる。雪蓮が放った言葉は現実的で飾り気のないそのストレートな言葉の重さに俺は言葉を失った。

「民衆には私達に守られているのだという虚構こそが私を支配者として民衆に認めさせているのが今の現実なの…だから、その支えをなくすような諸行には、悪いけど賛同できない。」

この世界は俺がいた世界とは違うんだと言外に言われている気がする。それでも俺は

「…確かに雪蓮の言っている事は頭ではわかるんだ。でも…それでも、文字の読み書きと簡単な算術くらいは最低でも必要だと思う。だから、孫呉がこれから強い国になって盤石が体制ができたなら大丈夫だよな？その時には必ず導入してほしいと思う。」

確かに教育機関の導入は長期的なスパンで見ても必要事項だ。何かがあつて有力者が倒れた時、国を立て直すための人材は必ず必要になる。仮に健在の時であつても人材は多いに越したことはない。一人に全ての権力を集中させた時、その国が長続きしない事は学んできた歴史で知っていたから…

「分かつたわ…でもそれがいつになるかは分からないわよ？それでもいいの？」

俺はその言葉に頷き、

「十分だよ。ありがとう、雪蓮…」

ここまでの話を聞いていた私は

「…なあ、武。お前は将としてだけではなく、文官としての仕事もやってみないか？」

武は顔を横に振って

「さすがに無理と思う…今でも精一杯なんだから…」

「そうか？お前ならやれると思うんだがな…」

私は残念に思ったが、いずれ武は孫呉の一角を担う人物になるだろうと確信した。

そして、二週間が過ぎた。準備を整えた雪蓮達は出陣し一路冀州へと向かった。俺もその行軍に加わっていた。いまだに人を殺すことには抵抗がある。それでも戦わないと護れないものがある…そう自分に言い聞かせ、槍を握りしめた。

八 章 黄巾の乱／前哨戦／

時間は止まってはくれず刻一刻と流れていく。その時間の中で戦の準備は整い、出陣の時がきた。目指すは冀州、黄巾党主力部隊が駐留する地での決戦だ。前情報では黄巾党主力部隊の兵数は二十万とも三十万とも聞いている。対して孫呉の軍勢は一万を切っている状態だ。今の状況で黄巾党本隊に当たるのは自殺行為…冀州には多くの諸侯が集まっているという話だから、その諸侯とどれだけ巧く連携できるかがカギとなる。どちらにしても困難な戦いになる事は間違いないだろう…

「穏、蓮華達はいつ合流できるって？」

その言葉に

「伝令では兵を集めてから合流するという事ですから少し時間がかかるとの事です」

「そう…なら、初戦は私達だけで戦う事になるわね…」

孫策はため息をつき、

「ふむ、さすがにこの戦力で黄巾党の本隊と事を構えるのは得策ではないからな…」

黄蓋も苦虫を噛み潰したような表情をした。

「無い物ねだりをしてもしようがない…敵本拠地周辺では諸侯の軍も動いてます。とりあえずは私達だけでできるだけの事をしましょう。」

周瑜の言葉に三人は頷いた。

「うん、なら方針はそれで行きましょ。まあ、どうせ戦闘はまだ始らないんだから今のうちにお昼にしましょ。」

「そうじゃな…」

「私は武の所に行ってくるから、あとはよろしくね。」

孫策は嬉々として立ち上がり天幕を出ようとする。

「分かった。…だが、あんまりからかってやるなよ？」

周瑜のその言葉に孫策は振りむき、

「それはできない相談ね。じゃあね〜」

と、そのまま走り去っていった。

「余程、あ奴の事が気に行ったようじゃな」

周瑜は黄蓋の呟きに

「まあ、それもあるでしょうが、おそらく蓮華様の事を伝えるつもりでしょう。」

「でもあの蓮華様が武さんの事を受け入れますかね〜？」

「その心配もあるじやろうが、あ奴の手腕なら問題はなかるう。あ奴ほどの知勇兼備の者は近年見らぬからな。」

「確かにそうですね。武さんが来てからは私も冥琳様も政務でもかなり助けられていますからね〜」

「違いない。しかし、もう少し色恋沙汰にも興味をも興味を示してもいいのだがの…」

「…多分、雪蓮もその辺の念押しのために行っただけでしょね…」

三人はそろってため息をつくのだった。

「何だろうな…こののどかさ…今が戦時中って事を忘れそうになるな…」

弁当を手に青く広がる空を見て俺はぼやいた。これから戦闘になるとは頭では分かっている。今回が激戦になる事は間違いない。周辺で食事を取っている兵士達…ここにいる何人が生き残れるのか…そして、俺が今回の戦で勝利を手にして生き残れるかも不安ではない。

「たーける！元気にやってる？」

突然、背後から衝撃が降ってくるのと同時に背中に当たる柔らかな感触と雪蓮の明るい声。

「雪蓮…」

「何？元氣ない顔して…どうしたのよ？」

「気にすることはないさ。ただ、今回の戦の事を考えるとなんか気が重くって…」

「まあ、二回目でこんな大きな戦だものね…不安なのはわかるわ。不安といっても将であるあなたが不安そうな表情をすれば兵にもそれが伝染する。そうすると勝てる戦いも勝てなくなるわ。でもね、これだけは覚えておいて。あなたのそばには私達がいる。戦場であなを孤立させはしないから、安心して。」

「…ああ、信賴している。で、何か用があったんだろう？」

雪蓮は不思議そうな蚊をして俺の顔を見た。

「あれ？なんでわかったの？」

「なんとなく…かな。といつても、戦闘開始が近いこの状況でここまで来たって事は何か伝える事があったっていう事、普段なら伝令兵を出せば済む事だけど、雪蓮が直接来たって事は戦以外の事で何かがあったってことでしょ？で、どうしたの？」

その言葉に雪蓮は

「ん…私が武を拾ってきたときに約束したでしょ。呉の武將を口説けて。」

確かにそんなことを約束したのを覚えている。

「ああ、確かに…俺なりに頑張っているつもりなんだが…」

「それでね。もう少ししたら私の妹が合流するんだけど…」

「妹…孫策の妹って、孫権の事か？」

もしこの世界の歴史が俺の知っている歴史と相似しているなら、孫策の兄弟関係にあるのは孫権と孫尚香くらいだ。しかし、孫策が女性であるという事はその弟に当たる孫権もまた女性という事になるんだろうけど…

「そうそう。でも、妹の事は話したかしら？」

「いや、何も聞いてないさ。ただそういう知識があったただけだから…」

「ふーん。それも天の国の知識ってことなのよね」

不思議そうに雪蓮は頷き、

「まあ、どうでもいいわ。それで、妹の事なんだけど…ちょっと真面目すぎで、カタブツっぽいところもあるんだけど、とっても良い子なのよ。可愛いし、胸も大きいし、お尻の形も最高だし」

雪蓮が妹の孫権の事について説明をしているのだが、どうもその意図が見えず手元の水を口に含みながら話を聞いていた。

「で、私の後継者はその孫権。だから、武は何が何でも孫権を孕ませなさい！…約束よ？」

最後の一言に俺は思わず、口に含んでいた水を吹き出してしまった。
「ケホッ、ケホッ…雪蓮…突然なんだよ…大体なんだってそんな事を急に…」

雪蓮は涙目の俺を見据えて、

「これからの孫呉の為に決まっているでしょ。と、言う訳だから頑張つてね。期待、しているわよ。タ・ケ・ル！」

啞然とする俺を放置して、雪蓮は走り去っていった。

「投げっぱなしジャーマンかよ…」

台風一過とでもいうのか、本当に風のような人だ…

「言いたい事はわかるんだが、孫権に会った事もないのにあんな事を言われてもな…俺にどうしろと…」

額面道理の意味で捉えればそういう事なんだけど…

「何をやっておる？そんな間の抜けた顔をぶら下げて…」

「間の抜けたって…祭さん…まあ、別に否定はしないですけど…」

「まあ、なんとなく策殿がお主の所に行くと言っておったから、大方、孫権様の事を言い含められておったんじやろうが…何か気になる事でもあったのか？」

祭さんの質問に先程の話をかいつまんで説明する。

「孫呉の為…か。まあ、こんな世の中じゃからな…いつどうなつてもおかしい話ではない。」

「でも、俺は…そんな状況になった時この手で守れるなら俺は護るよ…だから、あんな発言はしてほしくなかったな…」

「ふつ、儂も策殿もそう簡単には死なんよ。それよりもお主は策殿と交わした約束をしつかりと果たす事じゃ。約束を守らん男に価値はないからの。」

バシバシと背中を叩いてくる祭さんを見上げ、

「…何とかやってみるよ。俺なりに頑張ってみるが、俺は元の世界ではそんな女の子とどうのって事もなかったし、無理って可能性もあるよ?」

「そこはお前さんの手腕にかかっておるのだから、儂は何も言えんの。まあ、一言言えるとすれば、お前さんは心に感じた事、思った事を真摯にぶつけていけば、自然と女は心を開いてくれる。…わしが保証してやろう。」

祭さんの言葉に少しだけ心の荷が軽くなったような気がした。

「ありがとう…祭さん。」

「うむ、しつかりと口説いて胤を注ぎこめよ!君主公認でそういう事ができるんじゃ。役得と考えよ。」

豪快に笑いながら祭さんは天幕のほうに立ち去って行った。

「…真っ正直に思いをぶつける…か。」

真摯に思いをぶつける事、簡単なようで難しい事。ただ、俺は今、俺ができる最善の事をするしかない。きっとそれが実をなすんだと信じて…

食事を終えた私達は行軍を再開した。私の横に馬を並べ、行軍する武に話しかけた。

「武。今度の戦はお前も実際に戦場に立つてもらう事になるが、大丈夫か?」

私が心配したのは武はここではない平和な世界から来た青年である事。この世界では同じ年頃の青年も戦場に立つことは珍しくはない。しかし、こ奴にとってはそうある事ではないと言っていた。

「大丈夫って応えたいけど、不安と言えば不安かな…」

「…それで構わないさ。初陣ではないとはいえ、今回は二度目の戦

…ここまで大きな戦はそうは無かったからな…怖いと思うのは恥ずかしい事じゃない。」

武が手にした槍を握りしめるのを見た。

「怖いっていうのが少し違うんだ…」

その言葉に私は首を傾げた。

「これからの戦闘で自分が殺される恐怖っていうよりも自分が人を殺す事で自分の中で何かが崩れていくような気がするんだ…で、いつが自分が人として生きていられなくなるんじゃないかって…」

その言葉に私は

「武…私の話を聞いてくれ…私や雪蓮、祭殿はこれまでも多くの戦で戦い、多くの命をこの手で奪ってきた。確かにそれは忘れてはならない事実だ。しかし、我らとて罪なき者に手を掛けた事はない。我らが手を掛けたのは人としての誇りを棄てた咎人。そして、今、我々に敵対しているのも多くの民衆を苦しめている咎人の集まりだ。我らは国を治める者として奴らを討ち、民衆を守るという責務がある。だから、戦っているのだ。武がこの先、戦で心を失いそうになれば、私達が必ず支えてやる。だから…」

私の言葉を武は一言一句を漏らすまいと聞いてくれた。

「…冥琳の言う事はわかる。頭では理解しているんだ。民衆を守る為、国を守る為…この戦いが何かを守る為の戦いだって事は…だから、俺も覚悟を決める。例え、この手が血に染まり、修羅道に落ちたとしても心だけは失わない…」

その言葉に私は嬉しかった。

「…武ならきつとそう言ってくれると思っていたよ。ただ、気を付けてくれ。今回の戦からは常に戦場に立つてもらう事になるが、お前の存在を袁術に知られるのを避けたいのだ。今はまだ、天の御使いという名称は天下に知れ渡ってはいない。しかし、お前の名が天下に知れ渡れば、おそらく袁術が動き出す。」

俺はその言葉に思い当たる節がある。

「…手元において保護しておいた方が安全ってことだな。天の御使
いって名称は扱い方一つで凶器にも成り得るって事だよな？」

冥琳は頷き、

「相変わらず聡いな。」

「確かに俺にそんな価値があるかどうかは別にして天の御使いと言
う名称に意義があるって事だから…」

「確かに天の御使いと言う名称はお前が言う通りの存在だ。天の世
界…お目の言う現実世界と言う奴だが、そういった物に畏敬や尊敬
の念を抱く者は多く、そして、それを利用しようとする輩もな…ま
あ、利用しようというのは私達も同じだが…」

その言葉に

「気にしないでいいよ。俺にとっては冥琳達はこの世界に来て初め
てであった心許せる存在…こんな戦乱の中でたった一人で放り出さ
れていたら今頃この世に俺はいない。それこそ虎か熊の餌になつて
いるか、山賊に身包み剥がれて殺されていたと思う。だから、感謝
こそしても、利用されたなんて思わない。」

「…ああ、すまん。」

俺がこの世界でこれまで生きてこれたのは雪蓮達に出会える事がで
きたからだ。そんな時、かつて父さんから言われた事を思い出した。
「人と人が出会うつていうのは偶然じゃない。誰もが何かしらの縁
でつながっている。人と人との出会いと言うのは必然なんだ。だか
ら、武。お前は出会いと言う物を大切にしなさい。お前が出会った
人はお前にとつて意味がある人で、その人にとつても武は意味のあ
る存在となるんだ。」

父さんの言っていた言葉の意味が今、分かった気がした。だから、
俺は…

「冥琳、俺はこの世界で必死に生きるよ。前いた世界の事も忘れな
い。でも、この世界に来た以上俺もこの世界の人間なんだ。だから、
戦う事を迷わない。」

冥琳はそういう俺を優しく見ていてくれた。

「でも、気にしてくれてありがとう。」

冥琳は何も無かったかのような表情をして言い放った。

「どうであれ、お前と言う存在は呉の重要な力となる。気を配るのは当然のことだ。礼を言われるような事じゃない。」

「それでも、俺は嬉しかった。だから、何度でも礼を言わせてもらう。ありがとう……」

「……ふつ。雄として優れているとは、やはり言い得て妙だったか……」
横から見た冥琳の顔は何故か赤みがかっていた。さっさと先に行こうとする冥琳を慌てて俺は追いかけた。

「武。そろそろ斥候が帰ってくる。戦闘準備にかかろう。」

そう冥琳が言った瞬間、一人の伝令兵が冥琳の下に駆けつけてきた。
「報告！前方に砂塵を確認！黄巾党の分隊と思われます！あちらもこちらに気付いている様子で、城を出て布陣する模様！しかし、孫策様が……！」

「孫策がどうした？」

言い淀む伝令兵に

「どうしたんだ？重要な報告なのだろう？」

「ハッ！孫策様が前線部隊を率いて先行しています！」

「何！？」

「おいおい……総大将が先行してどうするんだ……」

「全く、世話が焼ける！穩、武！部隊をまとめ、すぐに追いかけるぞ！」

冥琳の言葉に俺は鎧を踏みしめ、駆け出した。

「冥琳様あゝ前方に雪蓮様の牙門旗を発見！」

「やっと追い付いたか……！待ちなさい、雪蓮！」

俺達が雪蓮に追い付いたのはもう黄巾党軍と接敵間近の位置だった。
「無理だつて。一度走り出した兵を止めたら折角の突進力が無駄になるでしょ？それに、相手はたかが黄巾党。すぐに蹴散らしてあげるから。じゃあ、そういう事で……また後でね。祭、行くわよ！」

「心得た！」

雪蓮と祭さんはそれぞれの武器を手に敵軍に向けて突進していったのだった。

「…って、雪蓮！？相手がたかが黄巾党ってそんな問題じゃないだろうがー！」

俺の叫びは荒野に響き渡ったがそれが雪蓮達に届く事はなかった…

「…ああ、もう！穏、武。戦闘準備だ！」

「はあゝい！」

「応！」

「突進する孫策隊、黄蓋隊の部隊の補佐をする。陸遜隊は左翼より、武隊は右翼より、周瑜隊は後詰として入る。行くぞ、我らが英雄、孫策を守れ！」

周瑜の号令に兵達の歓声が応え、進撃を開始する。ついに黄巾党殲滅戦の前哨戦が開幕したのだった…

九 章 黄巾の乱／＼小霸王の武と援軍の合流／＼

黄巾党の分隊を率いていた将、韓忠は前方から接近する部隊を発見した。

「韓忠様！前方に砂塵あり、敵です！」

「何、ならば我らも打って出る。相手はこの連中だ！」

黄巾兵の一人が前に歩み寄り、

「敵の旗印は“孫”。江東の孫策の者と思われます！」
それを聞いた韓忠は

「江東の孫策か…孫堅こそ強大だったが、孫策などしょせんは袁術の飼い犬にすぎん！者共、後れを取るな！我に続け！」
その掛け声に黄巾党の分隊は孫呉へと突進を仕掛けたのだった。

孫策軍は袁術から受けている支配を甘んじて受けている状態であり、袁術の客将として今も江東の虎と言われた母、孫堅の遺志を受け継ぎ、その牙を研ぐ事は忘れてはいなかった。そんな孫策軍の精鋭を黄巾党軍の一部隊程度で抑え切れる理由はなかった。瞬く間に黄巾党軍は崩れ、統率を失った。それに対して孫策は前線部隊を押し上げ、さらに進撃。黄蓋隊と協力して敵軍を二分した。更にそこに追い打ちをかけるように陸遜、武の二人がそれぞれに挟撃を仕掛けた。加えて、孫策と対面した部隊の将、韓忠はその一太刀の下に斬り伏せられた。将を失い混乱を極めた黄巾党軍は最早、相手にはならなかった。

「前線部隊が更に進軍速度をあげましたよ／＼雪蓮様も祭様も流石ですわね。」

「…あまり褒めたくは無いわね。」

勝利に一息つきながらも冥琳さまは苦い顔で凱旋してくるであろう雪蓮さまを待ち構えたのだった。

「総大将が自ら先陣を切つて、突撃したからな…」

確かに時として、総大将が先陣を切つて勇を奮わなければならない場面があるのは分かりますが…

「雪蓮の考えもわかるが、勇敢さを示すのに必要なのは自身の勇氣と敵の質だ。相手が勇ましく、精錬された者達なら話は別だが、奴らは黄巾党、烏合の衆にすぎん。そのような相手では世間に示せるのは勇敢さではなく蛮勇…悪評にしかならんと言つのに…」

武さんと冥琳さまはため息をつき、

「確かに…勇敢と蛮勇では意味が全く違う。まっ、ちょうど帰つてきたみたいだし、言い訳は本人からという事で…」

その表情は笑っているが、目は二人とも笑ってはいなかった。冥琳さまは目尻を上げ、悠々と帰還した雪蓮さまを睨みつけた。

「雪蓮！」

その剣幕には流石の雪蓮さまも驚いたらしく、飛び上がるような素振りを見せ、慌てた様子で武さんの背中に隠れた。

「総大将自ら敵軍に突っ込むなんて項王の真似事をしているつもり？」

「ごめんなさい…でもさ、やっぱり兵士達を鼓舞する為にも兵士達には私の勇敢な姿を見せなきゃいけないじゃない…？」

武さんは何度目かのため息をつき、

「雪蓮の言つ事もわかるけど…」

その言葉に雪蓮さまの表情は一転した。

「でしょ、でしょ！」

「ただ、項羽は劉邦とか多くの有力な諸侯が相手であつた時にその武勇を奮つたから今でも有名が轟いているんだろ？今回の場合、相手は黄巾党。数は多くても実態は食いぶちを失つた民衆、ならず者の烏合の衆。そんな相手に勇猛果敢な姿は示すことはできないと思う。それに冥琳が心配しているのはそこじゃない事はわかってるんだろ？」

「うー武のいけずー」

頬をふくらましごねる雪蓮さまも冥琳さまに向き直る。

「…うん、今後は気をつけます…」

その雪蓮さまの様子を見て冥琳さまはやれやれと言った感じで

「…じゃあ、次からは私の指示に従ってもらいますからね。いいわね？」

冥琳さまが念を入れて注意を促すが雪蓮さまは

「はあ…い…」

と、渋々といった感じで返事を返す。

十中八九繰り返すな…これじゃ冥琳の気苦労は絶えないだろうな…

「穩。一帯を黄巾党の陣地に向かわせ、物資の確保し、そこに陣を再構築させよ。他の部隊は蓮華様達の部隊との合流地点へ向かうぞ。黄蓋殿は部隊を纏め、被害の報告を…その後、雪蓮を止められなかった言い訳をしっかりと頂きましょうか…」

「グッ…わ、わかった…」

「さて、どのような言い訳が聞かせていただけるか、楽しみにさせていただきますよ。」

冥琳の表情は口は笑ってはいるが目が怒ってる…ここは触らぬ神に祟りなし、という事で…祭さん、ご愁傷様です。

結果として初戦を勝ち星で飾った俺達は被害もそう多くなく、戦利品などを確保して、孫権軍と合流する為に、さらに北へと軍をすすめたのだった。

「伝令！後方に砂塵を確認。旗印は孫、甘、周。孫権様の部隊です。」

「わかった。下がっていいぞ。」

伝令は一礼をして天幕から去っていった。

「さすが、蓮華様だ。蒼天中央に日輪が至る期限に…という約束の制限をしっかりと守ってくれている。」

周瑜の称賛に

「そういう融通の効かなさが心配の種ではあるんだけどねえ…」

「真面目な娘…なんだなあ。」

「カタブツとも言えるわよ?」

面白半分に孫権について説明する雪蓮を祭さんは止めるつもりで口を挟んだ。

「まあ、色々と言いはあるじやろうが、孫家の人間として頑張っておられる御方じゃよ。」

祭さんのその言葉に俺は近づいてくる孫家の牙門旗を見つめながら、孫権を待つことにした。そして、その軍勢は目の前で止まり、その中から指揮官と思える三人がこちらに走り寄ってきた。そして、そのうちの一人が雪蓮に歩み寄り、

「お姉さま! 今、報告を聞きました! 単騎で敵陣に突入し、賊を殲滅するとは何事ですか!」

なんか吹聴されてないか…?

「あなたは孫家の家長にして我ら孫呉の指導者! それがこのような戦いで蛮勇を振りかざして何になるのです!」

雪蓮もその剣幕に

「ご、ごめんなさい…」

と、タジタジになっている。

「少しはご自分の立場をわきまえて、行動してください。あなたは我らにとつての玉…なのですから。」

「はあ…い…」

拗ねたような返事を返す雪蓮に満足しないのか、少女の説教は火に油を注いだようになっていく。

「…あの娘が孫権?」

「ああ、雪蓮の妹にして孫呉の後継者、孫権様だ。」

「…雪蓮がカタブツって言っていた理由が何となくわかるかな…」

「確かにそういう面があるのは否定せんよ。だがな…」

「英雄としての器ということであれば、孫策殿よりも上じゃ。最もこれは孫策殿が言っていた事じゃが、孫策殿が乱世を鎮める英雄な

らば、孫権様は治世を治める英雄、とな。まあ、後は経験を積むことで大成していくじやろ。」

「分け隔てなく優しく、みんなからも愛されてる、素晴らしい御方ですよ。」

祭さんや穩の評価を聞くと決して悪い娘ではない事はわかる。しかし……

「納得できんのはわからんでもない。孫権様があのようにおっしゃるのはご自身のおかれた立場を弁え、且つそれを誇りに思っているからに他ならない。その証拠に平素の蓮華様はお優しい方だぞ。」

三人の評価は高く、いずれも真面目で優しい娘と言う事だった。

「……ここで冥琳達に孫権の事を聞いて変な先入観は持ちたくないから、後は孫権と直に話をしてみて、自分なりに孫権という人を知ってみる事にするよ。」

三人は頷き、

「それでいいさ。……噂をすればなんとやらと……こちらにいらっしやったぞ。」

そう言われ、振りむいた視線の先には桃色の長い綺麗な髪に空のように澄んだ青い目の女の子が立っていた。

「……貴様が天の御使いと言われている男か？」

その青い眼で射抜くようにこちらを見て問いかけてきた。

「一応な。最もそんな名称に興味はないし、その自覚もない。」

高圧的な物言いとはいえ言われた事は初対面の人が先ず感じる事……

「……胡散臭いわね。」

「言われなくても自分自身が一番それは理解しているさ。」

「……この人間かは知らないが、先に警告しておく。お姉さまを誑かすつもりならば、即刻立ち去りなさい！」

あまりに高圧的な態度に反論しそうになるが、

「孫権様。確かに素性と言う面ではこ奴は保障できませんが、今まで行動を共にしてきて感じた事はこ奴が信頼に足る人物と言う事。」

加えて、その知識は大海のごとく、我らでは考えの及ばぬほどの博

識の者です。貴種として孫策様が拾ったのはあながち間違いではないでしょう。また、こ奴の手腕は孫策様の片腕として十分な実力があるかと…」

「付け加えさせてもらえば、こ奴の武は策殿とも伯仲、軍の統率に關しても光る物がございますからな。」

冥琳、祭さん…褒めすぎだろ…それに孫権だけじゃなくて後ろに控えている二人の女の子も驚いているよ…

「公謹様が認める博識…」

「姉さまと互角の武勇…」

孫権と背中に長刀を背負った女の子は言葉を漏らす。三人目の女の子は祭さんの言葉に触発されたのか腰の刀に手を掛けようとしていたが、目があつた瞬間に柄から手を話した。ここでの刃傷沙汰はいかがなもんだろう？

「まあ、公謹がそういうのならそうなのでしょうね。でも私はまだ認めないわ。」

そう言つて孫権は踵を返し、立ち去つて行つた。後ろの二人もそれに連ねるようにして立ち去つていく。

「…あれが孫権だよな？」

その問いかけに冥琳たちが頷く。

「何か辛そうだな…」

「えっ？」

不思議そうな顔をする冥琳達に

「まあ、直感的なもんなんだけどこかなり孫呉の後継者である事にプレッシャー…と、重圧を感じてるんだろうな。何か見えない鎧を着こんでいるって感じたな…」

その言葉に三人は驚いたような表情で覗きこんでくる。

「な、何だよ？俺、おかしい事を言つたっけ？」

「いや、驚いているだけだ… たつた、あれだけの会話でよくもそこまで感じ取れるものだ…」

「同感じゃ…儂らも肩の力を抜くようにと言つておるのじゃが…」

「もう孫権様の癖みたいなものですからね。時々肩の力を抜いてみるのも良いんでしょうけどね。」

「みんなもそう思ってたんだ。まあ、気持ちはわかるけどね。“江東の虎”と言われた母御、孫堅様、そして今、“小霸王”と謳われる姉、雪蓮。これだけ勇名が轟く人たちが集まっているんだから…最も、雪蓮のあの自由闊達、自由奔放な性格も原因の一つなんだろうけど…」

思わずその場に二つのため息が漏れる。

「まあ、そんな孫権様はただ高貴な者、君主としての心得を実践されとるだけじゃからな。」

「何、その高貴な者の心得っていうのは？」

「素性の知れない者を近づけない。甘言を弄する人間を近づけない。金玉に執着しない、の三点ですね。」

俺が思い出せるだけの歴史人物を考えてみてもその三つを求めた人物は長続きしていない。

「国が滅ぶ原因の多くはその三つに絞られる。…だからこそ孫権様はその心得を実践されているのだよ。」

「まっ、心配せんでも貴様の人となりに触れば自ずと心を開いてくれるじゃろう。ただし、貴様も孫権殿に認められるだけの努力は怠らん事じゃな。」

豪快に笑いながら、祭さんは背中を叩いて応援してくれる。そうやって皆にからかわれていたところへ雪蓮が立ち去ったはずの孫権と二人の女の子を連れてやってきた。

「あれ？どうしたんだ、雪蓮？」

何気に言った一言に風を切る音…思わず身を反らし、その風を切る音を立てた剣を構えた孫権の姿を視界に確認した。

「貴様、なぜ姉様の真名を口にするっ！」

続く斬撃を交わしながら、

「おい！雪蓮、誰でもいいから止めてくれよ！」

その言葉に

「何でよ。蓮華の攻撃くらいだったなら軽く受け止めれるでしょ？」

同感とでも言うように祭さんや冥琳は頷く。確かに紙一重でよけているが、幾分余裕があるのは確かだ。しかし、ここでこちらが手を出すのは筋違いと言うものだ…

「孫権。斬りかかってくる気持ちにはわかるが、話を聞いてくれ！俺は直接、孫策から真名の雪蓮を預かったんだ！」

その言葉に孫権の斬撃が止む事はなかった。

「姉さまが貴様のような素性も知れぬ輩に真名を許すものか！出まかせを言うな！」

その言葉に

「武の言ってる事は本当よ。武には真名で呼ぶ事を許しているもの。私だけじゃなく、冥琳と祭、あとは穏もね。」

その雪蓮の言葉に孫権の斬撃がぴたりと止まった。

「なっ…！？」

孫権の視線の先で冥琳達が呆れた顔をして頷いている。

「それほどの人物と言うのですか？この男は…私には胡散臭い男にしか見えませんが…」

胡散臭いって事は重々承知してますのでこれ以上繰り返さないでほしいのだが…

「胡散臭いというよりも私は公謹様達が真名をお許しになった事に違和感があります。どういうことでしょうか？」

多分じゃなくてもストレートに言っただけ分、幾分性質が悪くないか…

「ふむ。まあ、納得できんものかもしれないかもしれん。しかし、こ奴はこの先お前達の伴侶となるかもしれない人物だからな。」

冥琳の言葉は三人を驚愕させるには十分だった。

「あ、あの…それはどういうことでしょうか？」

「武はあの管輅の占いに出てきた天の御使いなの。そんな貴種の血を孫呉に入れる事ができたら、大きな力になる、それだけよ。」

「少なくとも、孫呉には天の使いの血を引く人間がいる…という風

評を得る事ができるだろうな……」

「そういう訳。武を保護した時に契約したのよ。孕ませろってねv」
その言葉に三人は啞然とした。我を取り戻した孫権は

「な、何という浅慮！お姉様は私達のことを無視するおつもりですか！」

激昂する孫権に雪蓮はにべもなく、

「無視するわよ。特に蓮華。私の後継者……孫呉の次期当主であるあなたの意思はね。」

雪蓮の台詞に孫権は言葉を詰まらせる。

「孫呉が強国にのし上がり、天下を目指す……それは容易な事じゃないわ。天下を目指すには何が必要なの？」

その言葉に

「孫呉が天下を取る為に必要な事は……国力、兵力、そして、それらを得る為の資金です……」

「成果よ。ならば、その資金を集める為には？」

「多くの民衆の支持を集める事……」

「そうね。その民衆を支持を集める為に今の孫呉にとって足りないものが風評。民衆が魅せられるものがないの。だから、武の持つ天の御使いと言う風評が必要な。その風評があれば、母様の夢、孫呉の宿願……呉を独立させ、天下統一に乗り出す力を得る為にも武の協力が必要不可欠なのよ。」

「……ずるい。ずるいですよ、お姉様……母様の事を引き合いに出されたら、私には何も言えなくなるではありませんか……」

「知ってる。だから、母様の名前を出したの。……だけど安心しない。強制ではあるけれど、本気で嫌がるのなら無理はさせない。それは武にも言ってる。……お互いを知りなさい。まずはそれからよ。」

確かに雪蓮の言葉は重く、理に適っている事だった。しかし、孫権がずるいと思う事は確かだろう。否定をするという選択肢が切り取られていったのだから孫権は返す言葉がなく黙りこんでいた。

「興覇、幼平。話はわかったな？」

冥琳のその言葉に

「…は」

納得のいかないという顔でキッと睨みつけてくる紫がかった髪の少女。

「は、はい！」

少し顔を赤く染めながら返事をする長い黒髪に背中に長刀を背負った少女。

そんな二人を見ながら祭さんは

「まあ、見た目は胡散臭いかもしれんが、なかなか気骨のある奴じやからな…」

なんだかんだでいい事を言ってくれるから嬉しかった。

「そうですね、こう見えても頭はいいですし、優しいですし、人が良いですよ」

…穏は褒めているつもりなんだよな…でも、どう考えても最後の一言は貶めてくれたよな？

皆がフォローしてくれたが肝心の孫権はやはり気に入らないようだった。俺を睨みつけ、不満を隠そうともせずにとつぽ向いた。その様子に雪蓮はため息をついた。

「とにかく三人は武に真名を預けなさい。」

「はい！え、ええと…姓は周、名は泰、字を幼平、真名は明命と言います！武様、よろしくお願いします！」

顔を赤く染めたまま、明命と名乗る少女…

「皇武っていうのが俺の名前だ。まだまだ未熟者だけど、これからよろしく。」

「はい！よろしくお願いします！」

笑顔で元氣一杯に返事をしてくれた事で自然と肩の力が抜けていくのを感じた。

「我が名は甘寧。字は興覇。王命により真名を教えよう。思春と言う…」

表情を変えずに淡々と自己紹介を済ませる甘寧という少女。いずれも孫呉でも有数の武将だった事を思い出す。

「よろしく頼むよ。」

「認めるかどうかは孫権様次第だ……」

それだけ言っと思春は踵を返し、孫権の後ろに下がった。孫権に忠誠を誓った騎士と言ったところだろうか……？

「……孫権さん。」

不機嫌な表情を丸出しにして

「何だ……」

「俺が気に入らないのはよくわかる。俺も自分が尊敬する人物と久しぶりに会った時、その人の傍によく知らない人間がいたら、今の孫権と同じような状態になると思う。最も俺が胡散臭いつてのが一番なんだろうから……そんな男に真名っていう大切な物を預けるのは嫌なんだって事はわかる……だから、俺に真名を預ける必要はない。」
俺は一息ついて言葉を続けた。

「俺はこれからも雪蓮達と……皆と呉を強くする為に協力していくつもりだ……だから、その中で俺を見て、本当にこいつなら真名を預けていいと思った時に改めて預けてくれればいいから……今は一人の協力者って事でここに皆と共にいる事だけは認めてほしい……それは甘寧さん、周泰さんにも言えることだ。」

その言葉を孫権は黙って聞いていた。

「今の俺の願いは雪蓮達の夢を叶える為に雪蓮達を支えていきたい。ただそれだけだから……」

「……会ったばかりの人間の事を見透かすようなことはできん。だが、冥琳たちが私を騙すような真似はしないという事は知っている。だから、間接的には信じてやる。」

そっぽ向いた視線を漂わせながら孫権は言葉を続けた。

「だが、勘違いはするな。あくまで間接的にという事だ。だから、もしお前が裏切るような事があれば私はお前を討つ。」

そう言っ腰に履いていた剣を抜き、剣先を俺に突きつける。

「…分かった。肝に銘じておくよ…」

その言葉で十分だった。孫権のその言葉から少なくとも俺の本心だけはわかってくれたみたいだった。これからは俺の努力次第って事だ。

「はい、自己紹介はこれでお終い。部隊の再編成をして、すぐに出立しましょうか。」

雪蓮の掛け声が響き、俺達は来る決戦に備える事にした。

十 章 黄巾の乱、終幕の幕開け

曹操軍の天幕にいた曹操の下に曹操軍の軍師荀彧が飛び込んだ。
た。

「華琳様！わが軍南方に新たな舞台を発見しました！」

「…旗印は？」

「旗印は“孫”。現在、袁術の客将となっている江東の孫策のものと…」

それを聞いた曹操は口元を上げ、ほくそ笑んだ。

「そう…これでこの乱世も面白くなりそうね…」

「そうでしょうか？」

「だってそうじゃない？大体、猿が虎を飼い慣らそうなんて考えている事自体、不愉快極まりないわ。でも、それも遂に終焉の時が来たって事ね…」

「どういうことでしょうか？」

「言葉どおりの意味よ。先見の明があるものであれば、今後の展開を考えれば自ずとこの地に集結する…それは即ち、黄巾党の命脈は尽きかけ、黄巾党の殲滅をするにはまたとない好機。それなのに袁術が向かった先は南方の分隊。これは強大な敵にあたり、現状の損失を恐れ、弱者を叩く事で功名を成そうとした愚か者の考え…それに対し、孫策は寡兵ながらもこの地に兵をすすめ、賭けに出た。但し賭けとはいえ、今、この地には多くの諸侯達が集まっている。これだけの諸侯がいるならば、黄巾党如き賊に後れを取る事はない。黄巾党を制圧した後、孫策の名声は天にも昇る勢いで大陸を駆け巡るでしょうね…」

「名声を得た孫策は今後の群雄割拠の時代で有利に事を運べるようになるって事だな。」

「その通りよ。」

この曹操軍の天幕にいるこの男。この男の名は北郷一刀、管輅の占

いで言われていた二人の天の御使いの残り一人であった。孫呉の天の御使いと曹魏の天の御使い…この二人の存在が今後の乱世に光さず存在となるのかは誰にもわからなかった。

孫権の部隊との合流を果たした孫呉の兵力は二万に膨れ上がった。そして、既存の部隊と合わせ、部隊の再編成を行い、初戦を勝ち切った勢いのままに諸侯が集結した黄巾党が本拠地としている城へと向かった。

「冥琳…斥候は戻ってきたのか？」

「いや、まだ戻ってきてないが…それがどうかしたのか？」

「どうかしたのかって…冥琳もわかつているんだろ？いくら兵が増えたとしても何の策もなしに殲滅できる相手じゃないってことくらいは…それに策を立てる為にも斥候が集めてくる情報は重要だからな…」

「…まあな。まあ、まだ斥候が帰ってくるには多少時間がかかる。

先に私達の周辺の友軍の状況の確認をしておこうか…」と言いたところだが、武はどの程度まで把握できている？」

俺はこの地に集まってきたいると思われる諸侯を思い出しながら一つ一つ言ってみた。

「…この周辺に集まっている軍勢か…漢王朝からは何進、皇甫嵩、朱儁の三つの部隊。諸侯からは河北の袁紹、幽州の公孫瓚、陳留刺史の曹操、義勇軍率いる劉備、その他は西涼の馬騰…って言ったところかな。」

満足そうな笑みを浮かべ

「うむ、正解だ。数にすれば二十万と言ったところだ。これだけの数がいるなら相手は二十万とはいえ、相手は喰い詰め者や賊といった烏合の衆…普通に戦えば、我らの圧勝になるだろうな…」

確かに訓練を受けた精兵と、寄せ集めの軍勢では勝負にならないだろう。

「つまり、他の諸侯とうまく連携を取る事ができれば、黄巾党との戦いを有利に進めれるという事なのか？」

「確かにそうなのだが…」

言い淀む冥琳に問いかける。

「何かまずい事でもあるのか？」

「うむ、初対面の軍が連携を取るという事は例えるならば、かつてのお互いに争いを続けた呉と越の国を同盟させるようなものだ。」

呉と越と言えば春秋時代に激しく争った国同士で呉越と言えば、極めて仲の悪い事を表す言葉…そのような言葉が生まれるほどに激しく争った国だった。

「そういう事が…」

「それにな、諸侯が求めているものを考えれば諸侯同士が連携を取る事は難しい。」

諸侯が求めるもの…孫呉にとっては名声。それは他の諸侯にとっても同じ事だ。

「…なるほど。諸侯が求めているものは名声。ここでの名声は黄巾党の息の根を止めたという事。だから下手に連携を取ってその手柄を横取りでもされたら参戦した意味がなくなるってことか…」

「うむ。しかし、諸侯は自分達だけでは辛い戦いを強いられる事は分かっているだろう。」

確かに冥琳の言うとおりだ。自国の勢力だけであの大軍を相手取るのは自殺行為に等しい。仮に制圧でいたとしてもその損害は大きく今後の群雄割拠で大きな後れを取る事になるだろう。名声を手に入れたら、自軍の損害は最小限に抑えたい…この二つの条件を満たすには…

「…諸侯が取るべき道は他の勢力に攻めさせて、頃合いを見計らって攻撃を仕掛け、弱った黄巾党にとどめをさす。で、その際は必ず敵総大将を討たないといけないって事。」

「その通りだ。最もそれは各諸侯も理解しているだろうが…それが周知の事実である以上、我らが取るべき策は…」

「周囲の状況を調べ、他の諸侯の攻撃の最後の方に便乗して、敵総大将の撃破もしくは敵城の制圧に集中するって事だな。」

遂に俺達孫呉は黄巾党が本拠地とする城に到着した。

「これはまた…何というか絶景だな…」

確かに二十万近くの軍勢が集結しているとは聞いていたが、余りのその壮観な光景に俺は驚きを隠せなかった。

「何驚いているのよ。」

呆れた様子で俺に雪蓮は声を掛けてくる。

「いや、俺が前いた世界でこれだけの人間が一堂に会しているなんてそう滅多に見れる光景じゃなかったから…」

それを聞いた冥琳は

「ふっ、それは困るな…これくらいの人間を見ただけで驚いてもらってはな…なあ、雪蓮？」

俺は何が言いたいのかわからずに雪蓮達の顔を見る。雪蓮は冥琳の顔を見て、その意図が分かったのか口元を軽く上げ、ニヤリと笑った。

「そうね…武？これから私達って勢力を広げていくのよね…って事はこの規模の軍勢を率いて戦いに出る事もあるの。」

俺は雪蓮の表情から口クでもない事を言われそうな気がしてならなかった。しかもそれが冥琳が絡んでいるとなると性質の悪い冗談ではすみそうにはない。

「…何が言いたいんだ？」

「フフン。だって、武がこれだけの軍勢を率いて号令をかけるところを見てみたいじゃない？ねえ、冥琳？祭もそう思うでしょ？」

その言葉を聞いた二人は

「ふむ、確かにそうじゃな。武の名を持つ将、天つ国の皇武が率いる軍、“天武”とでも言ってみるか？」

「それはいいかもしれませんがね。どうだ？武？」

予想的中、しかも冥琳に至っては目が本気だ…

「今のこの人数で驚いているような俺ができると思う?」

「できる、できないではないさ。やってもらうんだからできるようになってもらうぞ?」

冥琳は本気の目で俺を見る。俺は雪蓮を見るとその顔は満面の笑みで

「面白いじゃない。今じゃないけど、まあ、いずれはそのつもりよ。」

「…面白い、面白くないで大都督を任命するのはどうかと思うんだけど…」

俺はため息を一つつき、冥琳は

「ふっ、何も今すぐじゃないさ。いずれはと言う事さ。」

最早、何を言っても三人の中では既に決定事項のようだった…

「まっ、何にせよ。この場を切り抜けなければ今後、名を成す事は出来ないわね。とりあえず武を大都督にする話は保留にしておいて、この戦いに集中しましょ。」

「そうね… 穩、この城の見取り図があつたはずだが持ってきてくれ。」

「はい。これですね。」

そう言つて穩は一つの図面を台に広げた。それを雪蓮達は覗き込み、考え込んだ。

「…厄介な城だな。」

「攻めるに難く、守るに易い。まさに理想をそのまま絵にしたような城ですからね。」

その図面を見ると確かにその通りだ。確かに正面は広く大軍を展開させることは容易いが、左右は大軍が攻撃を仕掛けるのは難しい。更に背後には切り立った崖が聳え立っていて、侵入も困難だ。つまり、側面からの攻撃は大軍が一気に押し寄せる事が困難な状態だから少数の兵を置くだけで事足りる。だから、正面に多くの兵士を配置して、正面からの攻撃に重点的に警戒を置いておくだけで攻撃を

いなす事ができる。背後はあの急な断崖から降りてくる敵はいないから警戒する必要はない。

「…全軍を展開できるのは全面のみ、左右は狭く大軍で攻めるのは無理がある、か。」

「…後ろには絶壁がそびえていて、回り込むのも不可能かと…」
孫権と思春も同様の考えのようだ。だけど…

「めんどくさいから、真正面から突入しちゃうよ」

「確かに勇猛さを示すのには最適じゃな」

「何を馬鹿な事を言っているのですか、二人とも！性質の悪い冗談を言っている時ではないでしょう！」

「ええ、私達はどっちかと言うと本気なんだけど？」

「なおの事、性質が悪いです。」

一言で切り捨てられた雪蓮は不満そうにしていた。俺はそんな二人のやり取りを眺めていた。

「…武。お前ならどうこの城を攻める？」

突然の問いに俺はびっくりした。

「えっ？」

「…お前ならこの城をどう攻める。意見を聞かせてほしい。」

「…城内の配置図を見た感じだとこの右に固まっている建物は兵糧庫か何かと思ったんだ。黄巾党の兵数が総勢二十五万って言うたから相当な量の兵糧が蓄えられていると思う。で、左側にある建物が宿舎かな？」

それを聞いた冥琳は穂の方を見る。

「そうですね、武さんの言うとおりですね」

「だったら、軍を敵城正面に敵を引きつける部隊、左の宿舎、右の兵糧庫に夜襲を仕掛ける部隊の三つに分ける。で、まずは正面に敵を引きつけて、左の宿舎に火を放つ。敵が混乱している間に兵糧庫を陥落させる。兵糧庫を落とせば、敵は混乱するだろうから後は一気に突入して、中央の本丸を落としてやればいいと思う。」

「しかし、我らには正面に敵を引きつけるほどの兵はいないんだぞ

！？」

孫権の疑問は当たり前前の事だった。寡兵の軍勢に対して兵を集中させる理由はない。だからこそ…

「この作戦を実行するとすれば夜。昼間は他の諸侯が間断なく攻めているからね。確かに孫権の言うとおり兵数の少ない俺達だと正面に敵を引きつけるのは難しい。だから、正面に敵を引きつける為にここは偽兵を使うべきと思う。」

「偽兵だと？」

「そう。兵士一人につき松明を複数持たせるんだ。そうすれば、本来の数の倍以上の兵が攻めてきたって思わせる事ができるからね。」

「樹上開花、か…」

冥琳の方向に孫権は顔を向けた。

「局を借りて勢を布けば力小なれど勢大なり。鴻、達に漸む。その羽もって儀となすべし。寡兵を偽兵を使って、敵を引きつける訳か面白い。祭殿。諸侯が軍を引き揚げた後、敵城周めに部隊を集結させてください。」

「ふむ、それはいいが、夜襲か？」

「掛けるふりだけで十分です。奴らの正面に部隊を集中し、先ほど武が言ったように兵には松明を多く持たせ、銅鑼を徹底的にならしてください。」

「我らが囹となる訳か。」

冥琳と祭さんはにやりと笑う。

「祭殿が敵正面で囹となつていて、思春、明命の部隊で宿舎、兵糧庫にそれぞれ機をずらして、火計を仕掛けよ。雪蓮は城内に火の手を上がった事を確認した後、祭殿と合流し、城内に突入。これでいいかしら？雪蓮？」

「いいじゃない？ワクワクしてくるわ。」

歡喜に満ちた表情で雪蓮は口元を上げる。

「しかし、作戦に絶対の保証がない以上、お姉様が前線に出るのは反対です！」

雪蓮を止めようとする孫権の声は悲鳴にも近いほど感極まっていた。
「蓮華。戦に絶対はない。それぐらいの事はあなただって分かっているでしょ？」

「しかし…」

「聞きなさい、蓮華。戦に勝つには道天地将法の条件を揃える事が必要。でも、これを揃えても負ける事があるのが、戦なの。だからこそ今の状況で戦に勝利するには時運を掴む事…そして、今がその時だからこそ戦を仕掛けるのよ。最もこの程度の城攻めで私が死ぬなんて事無いから。大丈夫！大体城攻めは祭の仕事だもんね。」
祭さんは大きく頷き、

「そうじゃ孫権様。儂に任されよ。」

「だから、蓮華は安心して私の背中を…孫呉の王の雄姿をその目に焼き付けなさい。」

孫権は涙を双眸にため、コクリと頷いた。

「フフフ、良い娘ね…じゃあ、蓮華は後方に下がちなさい。」

「はい…」

「よし。ならば、思春、明命は精鋭部隊を編成し敵城内に潜入する準備を。」

「御意！」

「祭殿は前線にて雪蓮と待機。穩は後曲にて蓮華様の補佐に回れ。」

「冥琳たちはどう動くの？」

「私は左翼の敵に当たり、武、お前は右翼の敵に当たれ。」

「えっ？武も本格的に戦場に出るの？」

「ああ…、俺も皆と一緒に戦う。敵だからと言って殺したくなんかは無い。でも、だからと言って雪蓮や皆が傷つくのはもつと嫌だ。それに俺は決めたんだ。戦うって…そうやって決めた事をやり遂げる。それが皆に答えるって事だと思うから…」

「そう…分かったわ。そこまで考えているなら私は何も言わない。だったら、冥琳。武の補佐に誰かをつけましょう。」

「そうだな…補佐として適任なのは…程普殿に頼もうか。」

程普、孫堅の代から仕えた古参の将で祭さんとは同期にあたる将である。武勇策謀に優れた将としても有名であった。そして、編成が決定した俺達は諸侯が陣に帰還する夜が更けるのを待った。

夜は更け、出陣の時間がすぐそこまで迫っていた。

戦争、それは人と人が争い、傷つけあい命を奪う。味方はもちろん敵にもそれぞれの正義を主張して争う。

戦争なんてものに正義は無い。でも、戦わないと護れないものがある。それは頭では分かっていた。それでも刀を奮ったびに考えてしまう、俺はなぜ人を傷つけているんだろうかって…

こちらの世界に来て戦場に出たのは初めてではない。戦場から帰ってくれば、生きて帰れたことへの安堵感と同時に人を殺したという事実と人を殺し、自分が自分で無くなりそうな事への恐怖に苛まれていた。そして、その迷いが晴れる間もなく戦場に出る時間が近づいていた。。

「フウ…」

俺はため息をつき天幕を出て、空を見上げていた。

「…一人でこんな所で何をしている？」

突然の背後からの呼び掛けに俺が振り向くとそこには孫権が立っていた。

「孫権か…孫権こそこんな所にどうしたの？」

「先に質問をしたのは私だ。貴様が先に答えるのが筋だろう。」

「そうだね…」

俺は苦笑して

「ちよつと考え事をしてたんだ…何で戦うんだろう？どうすれば生き残れるかってさ…」

「怖いのか…？」

俺はその問いに答える事に逡巡した。

「正直怖いな…殺されるなんて御免だし、殺すのだって嫌なんだ。甘い考えだって考えって事もわかるんだけどな…」

「そうか…お姉様が認めたっていうから勇敢なのかと思ってたけど意外と軟弱な奴なのね。」

孫権は口元を隠すように笑顔を見せた。

「そうだな…でも、献策をしたのは俺で…俺のこの作戦が皆を危険な戦場に送る事になったんだ。それなのに、ここで俺だけが逃げ出すわけにはいけないしな…」

そういう俺を驚いたような表情で見ていた。

「で、空を見上げて心を落ち着かせようとしてたって訳さ…」

「そうか…」

「で、孫権こそどうしてこんな所に来たんだ？」

「わ、私は、その…」

孫権は何か言いたそうな表情でいるがその口はなかなか動かなかった。

「…まあ、言にくいならそれでいいよ。俺も別に気にしないからさ。」

会って間もない俺には言にくい事もあるだろうと、俺は孫権に背を向け、天幕に戻ろうとした時だった。

「これが…今回の戦が私にとっては初陣なんだ…緊張して何が悪い…」

その言葉に振り向くとぼつの悪そうな顔をしている孫権がいた。その言葉で最初に会話した時に感じた事を思い出した。将として…王としての姿を皆に示す為に無理をしている…そんな彼女の姿はきつと本来の姿じゃないのだろう。緊張しているという言葉は孫権のそんな姿を暗に示しているような気がした。初めての戦に緊張し、王族の一人として背伸びする姿は俺を保護してくれたみんなの為にと戦う俺の姿と何となく似ているような気がした。

「ははっ…そうか、そうなんだな…」

そんな事を感じた俺は思わず苦笑した。

「な、何を笑っている!」

「ごめん…馬鹿にしてるわけじゃないんだ…ただ緊張しているって

聞いてさ、何か親近感みたいなものを感じてさ……」

「ふんっ……」

「この戦いが終わった後もさ、こうやってお互いが無事でいられるといいな……」

「盗賊程度に後れを取るような私ではない。お前も安心しておけ。」

「……お前は私が守る。」

照れ隠しのつもりか孫権は明後日の咆哮を見つめながら語りかけてくる。

「私は孫呉の王族の一人として兵達を指揮するのだ。……兵を守る事は私の責務だ。それが民を……国を守る事だと私はそう信じている……」
孫権が拳を握りしめ、宣言するその姿に俺は王族としての孫権と言うよりも一人の女の子としての孫権を感じ取っていた。

「……俺、決めたよ。孫権は俺が護る。」

「何を言っている？王としての私がお前などに……」

俺は孫権の言葉を聞く耳は持たなかった。

「だから、俺は決めたって言ったんだ。それは孫権が何と言おうと俺が貫き通すべき、俺の誓いだ。それに俺が守るのは王としての孫権じゃない。俺が護るのは孫権って言う一人の女の子だから……」

「……／＼き、貴様にできるのか？」

「できるか、できないかなんて問題じゃない。護るって決めたんだ……」

孫権は俺に背を向け

「ふ、ふん！勝手にしろ。期待はしてないが好きにすればいい……」

そんな孫権の背中に俺は思わず笑みがこぼれた。

「了解。勝手にさせてもらうよ。」

「……変な奴。私は自分の部隊に戻る。お前も作戦決行の期限には遅れるなよ。」

そう言って立ち去る孫権だったが、長い髪の間から覗かせる耳はこの暗がりの中でもわかるほどに真っ赤に染まっていた。

「孫権か……少しは分かりあえる事ができたのかな……でも……」

孫権は絶対に支えてやらなきゃいけない。もし、今の状態が続けば、孫権は孫権としてゐる事ができなくなる。だから俺は…

「誓うよ…俺は孫権を支えよう…俺が持てる全ての力を使って…」
俺は唱えるように自分に言い聞かせたのだった…

孫権と武が会話を交えてしばらくの時が立つた。

「これより作戦を開始する。興覇、幼平。行け！」

周瑜の掛け声に二人は駆け出した。そして、その掛け声が孫呉と黄巾党の最後の戦いの始まりの合図だった。

十 章 黄巾の乱、終幕の幕開け（後書き）

アクセス累計30,000、ユニークアクセス5,000人突破！
お気に入り件数50件突破！

この小説を読んでいただいた読者の皆様、御礼を申し上げます。
本当にありがとうございます！

これまでも何名かの読者の方から感想もいただき、励みとなっております
おります

今回の話でやっと黄巾の乱も佳境へと入りました。これから原作
に準拠していく予定ですが、拠点フェイズなどでいろんな勢力の武
将との絡みなども含めて行こうかと…

個人的に絡めていく武將の候補は趙雲、董卓軍、曹操軍ほかにも才
リジナルのキャラクターが何人か…

今後の構想はある程度できてはいるんですが、それも反董卓連合ま
で…それからがちょっと行き詰っているところがあってなかなか進
んでいませんが、なんとか頑張っていけますよ

これからもよろしく願います

十一章 黄巾の乱の終幕

遂に黄巾党との最終決戦の火蓋が切って落とされた。

城内へと潜入した甘寧と周泰の二人の行動に呼応する為に孫策と黄蓋の部隊は全面に進軍した。それに驚いたのは黄巾党である。目の前に突如として、十数万とも思えるほどの大軍が接近してきたように見えたのだから。孫策と、黄蓋は部隊の兵達に武の献策の通り、それぞれの兵士に複数の松明を持たせていた。多くの炎が揺れる光景に黄巾兵達は肝を冷やした、その戦力を城の前方に固めたのだった。

孫策は黄巾兵が正面に集結してきたのを確認すると

「これより我ら孫呉は黄巾党との最終決戦に挑む。孫呉の勇士達よ！恐れるな！我らが力、黄天の獣達に見せつけるのだ！」

たったの一声で孫呉の兵士達を鼓舞し、兵士達もそれに応え、雄叫びをあげた。

闇に響く雄叫びに黄巾党の兵士は肝を冷やしていた。

「グッ…ええい！者共、怯むな！蒼天已死す。黄天に当に立つべし！今、悪しき蒼天は死に、我らが黄天こそが正義なのだ。これは我らの正義を示す聖戦である！何が何でもこの地を守り抜くのだ！」
黄巾党の将の鼓舞に兵士達は応え、応戦を開始したのだった。

周泰隊は宿舎への火計実行の為に城内に潜入した。潜入の時点で既に大半の敵兵は正面に集結した孫策隊に引き付けられていた為、宿舎の警備は皆無だった。

「これより宿舎への火計を行います。各自、各所に火を放ってください！」

周泰の合図に周泰隊の兵士達は散り散りに分かれ、放火活動に入っ

た。

甘寧隊は兵糧庫への火計実行の為に城内に潜入した。さすがに黄巾党の者全てを賄う為のものだけあって兵糧庫の規模は通常のものとはケタ違いだった。それゆえに、兵糧庫の警備は嚴重なものだった。

「一体何が起きているっていうんだ!？」

「分かんが、俺にわかんのはどこかの軍が攻めてきたらしいってことぐらいだ。」

「正面に集結しているんだろ? だったら俺達も行った方がいいだろ?」

その時であつた。その男達の視界に入ってきたのは宿舍が燃え盛っている様だった。

「お、おい! 宿舍が燃えているぞ!」

「急げ! 急いで火を!」

刹那、鈴の音が一つその場に響くと同時にその男は息絶えていた。

「よし! 殲滅部隊は黄巾兵を殲滅し、工作兵は兵糧庫への火計を実行せよ!」

「応!」

兵士も応え、甘寧隊の火計が始まった。

正面の敵にあたつていた黄巾党の兵達も城内の異変に気がついた。振り向けば城内の至る箇所でも火の手が上がっているのだった。一部の兵達は消火活動に残りは城壁上から攻めてくる敵の迎撃に力を注いでいた。

周泰と甘寧が敵の宿舍と兵糧庫に火を放つ前、敵の反抗に物量の少ない孫呉は不利な戦闘を強いられていた。城の前で戦う孫策と黄蓋、城内で火計を行っている甘寧と周泰、敵左翼にて戦闘を展開する周瑜、敵右翼にて交戦中の武。いずれの部隊も必死に一進一退の

攻防を繰り返していた。そんな時、孫呉の将の下に伝令が届いた。その報せは孫呉の将達を震撼させるには十分だった。

「伝令！南方にて袁術軍と交戦していた黄巾党分隊五千が袁術軍の囲みを突破し、わが軍後方の孫権様の部隊に直撃。孫権様、陸遜様は現在交戦中！至急、援軍を！」

孫策はその報せに焦りを隠せなかった。今中央で戦闘を行っている孫策隊と黄蓋隊が援護に行けば、孫権の救出は可能かもしれないが戦線を下げれば、黄巾党は討って出てくるだろう。そうなれば、撤退しながらの戦闘になり、前線の維持は不可能だ。そして、そこから軍を崩され、再起できなくなるだろう。孫策隊、黄蓋隊のどちらかが援護に言っても同じ事だろう。孫策はただ孫権が持ち堪えてくれる事を祈るしかできなかった。またそれは共に闘う黄蓋や城内で戦闘に入っている甘寧、周泰も同じ思いであった。

敵右翼との戦闘に入っていた周瑜は苦虫をかみつぶしたような表情をした。

「クツ、ここにきて袁術の奴め。黄巾の分隊を討ち漏らしてくれるとは……」

周瑜は毒づくが事態の好転は見込めなかった。退けばそこから前線が崩れ、孫呉に価値は無くなり滅ぶしかなくなるだろう。その状況が分かっているから周瑜も動く事は出来なかったのだった。

孫権が指揮する輜重隊を袁術軍の攻撃を逃れた分隊が襲撃した。孫権が指揮する兵数は一千に対し、黄巾党の分隊は五千、孫呉の各将もそれぞれに戦闘に入っていた為、応援に行けずこの状態を覆うのは不可能に近かった。

その報せを受けた時、武は戦場の敵右翼に当たっていた。それを聞いた副将の程普に一つの作戦を提示して、武は馬に跨ると前線へ

と躍り出た。

「黄巾兵に告ぐ！我は天より遣わされし、孫呉の守護神なり！我が神槍の前に貴様らの党首、大賢良師など虫けらも同然よ！恐れる者は去れ！立ち向かおうというなら来るがいい！天罰を降してくれようぞ！」

その言葉に黄巾兵は激怒した。黄巾党内において党首張角の存在は神格化されたものであり、今の武の言葉は武自身が神であるとの宣言、それは張角の神秘性を完全に否定するものだった。頭に血に上った黄巾兵は西側城門を解放し、討って出たのだった。

それを確認した武は馬首を返し自身の部隊と合流し、全速力で撤退を開始したのだった。

「口だけか！この臆病者め！」

黄巾の部隊はとにかく追いかけた。それこそ全速力で周りが見えなくなるほどの勢いだった。武は部隊の兵達に旗をたたむように指示を出し、自身が戦闘していた場所のちょうど真後ろに布陣していた袁紹の陣地に向かっていった。袁紹の陣地に突撃するかと思った時であつた。

「散！」

武の号令で部隊は二つに別れた。黄巾党は勢いのまま袁紹軍の陣地になだれ込んでいったのだった。

武は今回の戦闘が始まる前に副将の程普と打ち合わせ部隊の兵士達を一ノ組、二ノ組に分け、号令一つで動くようにと言い伏せていたのだった。この話を後で聞いた雪蓮達は武の指揮能力に驚愕するのだった。

孫権と陸遜の二人は背中合わせに武器を振るい、奮闘を続けた。その身に傷は増え、兵達同様に体力は限界に近づいていた。孫権が兵士を鼓舞するが、それも効果はなかった。次第に追い詰められ、孫権が覚悟を決めたその時だった。上空から風を切り裂く音とともに

に一本の紅い槍が孫権に迫る黄巾兵達の前に突き刺さり、一人の青年が舞い降りた。それは黄巾兵達の動きを止めるには十分の衝撃であった。

青年は地に刺さった槍を抜くと、黄巾軍に突撃した。

突然の襲撃に袁紹軍は驚愕した。顔良、文醜の奮戦もあり、黄巾党を撤退させる事は成功した。しかし、突然の事に被害は少なくとも無く、陣地を後退させる他なかった。そして、黄巾党の追撃をかわした武の部隊はすぐさま、程普の部隊と合流して後方の援護へと向かったのだった。

孫権と陸遜の無事を確認した武は安堵した。投げた槍を手に掴むと横一線に振り抜き群がる黄巾兵を吹き飛ばした。続け様に武は間合いを詰め、舞を舞うように立ちまわり始めた。その姿は敵味方構わず魅せられたのだった。

「武殿！お待たせした！さあ、者共！黄巾党の分隊を叩くぞ！生かしておくな！」

武に追い付いた程普は配下の兵達に指示を飛ばした。武が指揮していた兵達は孫権の部隊を襲撃した黄巾の部隊との交戦に入ったのだった。陸遜ははっと我に返り

「孫権様！援軍ですよ！私達も押し返しましょう！」

「そ、そうね。皆、援軍が到着したぞ！これより反撃を開始する！私に続け！」

兵士達の士気は上がり、あれほどまで追い込まれていた孫権隊も勢いを増し、五倍近かった兵力差も皆無に等しかった。

孫権軍壊滅の危機の報せを孫呉の将達が受けてから少しの時が経過し、再び伝令が各軍に入った。

「伝令！皇武隊、程普隊により孫権隊、陸遜隊の救出成功！四隊は合流し前線に上がってくるとの事！」

その報せに孫呉の将兵達は胸をなでおろしたのだった。

武が孫権の部隊と合流し、前線部隊の冥琳達と合流してから、しばらくして、遂に黄巾党の大將旗は引きずり降ろされ、遂に黄巾党の本拠地は陥落したのだった。

「よし！今こそ決着の時！皆の者、黄巾の獣共を狩り尽くし、我ら孫呉の勇名を天下に知らしめるのだ！総員猛進せよ！」

孫策の号令と共に孫呉の兵士達の雄叫びが戦場に響き渡り、孫呉の兵達は猛進し始めた。そして兵達は自然と各主将の下に集結し、逃げまどう黄巾党の残党に怒涛の追撃を仕掛け、遂に黄巾党は全て殺し尽くされ、大陸全土を脅かした黄巾の乱はその幕を引く事となった。

孫呉の将兵の雄叫びは夜空に木霊し、空には紅く染まった惨劇が繰り広げられた城内とは違う美しい月が輝き、その鮮やかさは美しいを通り越し、恐怖すら感じさせるのだった…

戦の勝敗を決した俺達は本国へ凱旋する前に一度、本陣に戻った。その本陣は勝ち戦で兵士達は勝利の喜びに酔いしれ、各所で笑い声が上がっていた。そんな歡喜に包まれる本陣を俺は抜け出し、俺は空を見上げた。

「勝ったんだよな…俺達…」

俺はその場に座り込み、自身の手を覗き込んだ。

「この手で殺したんだよな…初めて…なんだよな…」

この世界に初めて来たときも、人を殺している…自分が殺されるかもしれない恐怖、無抵抗の人を傷つける者を許せないと思う憤怒…そんな感情から俺は殺した。でも、今回は少し違う。敵である者を討つ…そんな最初から殺すという意志で槍を振るい、敵を討った。俺は拳を握りしめ蹲った。

「…また一人で考え事か？」

俺は顔を上げ、声の主のほうに顔を向けた。

「孫権…まあね…」

「今度は何を考えているの？」

その問いに俺は明確な答えを出す事は出来なかった。

「うーん…俺もよくわからないんだ。」

不思議そうな顔をする孫権に言葉を続けた。

「戦が無事に終わって皆が無事に生き残れた事に対する安堵感…本
当の戦場に立つて戦場独特の気風に当てられて気分が高揚している
のか…いろんな感情が俺の中で渦巻いていてさ…」

納得してくれたのか孫権は

「意外と考え無しな人かと思ってたんだけど、いろいろと考えてい
るのね…」

余りの物言いに

「意外と…なのかな…」

孫権はそんな俺の様子を見て、口元に手を当て少しだったが笑って
いた。

「孫権こそどうかしたの？みんな向こうで酒宴をやってるんだろ？」

孫権は俺のほうに向きなおり顔を引き締め口を開いた。

「あなたに言っておきたい事があったから…」

その言葉に俺は首を傾げた。

「俺に？どうかしたの？」

孫権は小さく頷き、言葉を続けた。

「あ、あなたの…戦いぶりはいしつかりと見させてもらってたわ。そ
れで、その…さっきは失礼な事を言った。すまなかった…」

俺が不思議そうな表情をしているのに気付いた孫権は

「…何を不思議そうな顔をしているんだ？」

少し不機嫌そうな声を上げる。

「いや、謝罪を受ける理由が思い当たらないからさ…もし孫権が俺
の事を胡散臭いって言った件の件なら気にする必要はないだろ？あ
の時、孫権はそう言っただけでしかるべきだった…いや、そうあるべきだ
ったんだから…」

昼に合流してから今までに孫権が俺に行った事なんて言われて当たり前の事だから謝られてもどうしようもない。

「いいや。悪かったのは私だ。私が姉様の話を信じていればよかったのだから…」

それでも孫権は納得できないように喰らいついてくる。

「孫権は悪くないさ。」

「謝る事ができないではないか…そう言われてしまうと…」

「謝る必要なんてないんだ。孫権は雪蓮の為に…孫呉の為を思っ
て口にした事なんだ。それを悪い事だとは俺も思わないし、むしろそ
うあるべきだって俺は思う。だから、孫権が気に病む事とは何もな
いんだ。」

「気にするなと言われても、そうかと言って納得はできん。」

「分かった…」

「ならば改めて言わせてくれ。最初会った時はすまなかった。そし
て、さっきの戦場ではありがとう…私はあなたに救われた…おかげ
で助かったわ…」

口元に笑みを浮かべた孫権が手を差し伸べた。

「私の真名は蓮華と言う。この真名をあなたに預けたい…」
その言葉に驚いた。

「…いいのか？俺なんかに真名を預けて…」

孫権は首を振り答えた。

「なんかじゃない…あなただから…あなただからこそ私の真名を託
したいの…」

その言葉に俺は孫権の真摯な思いを感じた。だったら俺はそれにこ
たえるのが礼儀だろう。

「…分かった。その真名、確かに頂戴する…その対価に相応しいか
は分からないけど、俺も改めて君に約束する…俺は…皇武は孫呉の
為に…蓮華の為に戦う事を…そして君を護り支えろと…」

俺は差し伸べられた蓮華の手を取り、しっかりと握りしめた。

俺の瞳に映る蓮華の姿に戦の前の痛々しさは無く、白い月の光を

浴び、優しい微笑みを湛えたその表情に俺は見惚れていた。

十二章 拠点フェイズ／孫策・周瑜&陸遜・黄蓋&周泰

俺がこの世界に来てから野党との戦いと黄巾の乱と幾つもの戦いが続いていた。

そして、先日、大陸全土を脅かしていた黄巾党の乱を制圧し、平和な時が訪れていた。

居候と言う立場上、ただ飯を食べる訳にもいかず、警邏として城下の巡回をしていた。というのもこれは俺が言いだした事だった。城下の治安維持でいちいち兵士を出動させるのは効率が悪い。それを冥琳が言っていたのに対して、新兵の訓練としてみてもどうかと提案したのだ。この方法であれば、防備が薄くなる事もなければ、新兵に軽い実践経験の場を提供する事ができるからだ。そして、城下の各所に詰め所を置き、住民からの要請があつた時に急行したり、定時巡回などを行わせ、治安維持に努めている。俺はその提案者と言う事で城下の巡回作業を手伝っていると言うか指揮しているのだ。

「武！」

「ん、程普か？」

彼の名は程普。先代孫堅様の頃から仕えていた武将だ。歳は俺に近く、数少ない同姓という事もあり、日頃からよくつるむ事が多い。祭さんと同時期から仕えてきた武将で、黄蓋、韓当、祖茂、程普の四人は正史において孫堅に仕える将の中でも有名だ。ただ、正史とは少し違うこの世界では年齢が若干違っているようで程普の年齢はまだ十代後半だ。全くどれだけ若い頃から戦っていたのか…

「程普か？じゃない！」

何やらお怒りのようで…

「さつき兵士から連絡があつただろう！北東の六の三で争いが起きているって。」

「ついさつきね。大丈夫でしょ。そんなに急がなくても…」

俺はゆつたりと水を口に含みながら、暢気に答えていると程普の口

から飛んでもない事実が発覚した。

「…本当にそんな事を思っているか？例え、その近辺に孫策様が
いるって聞いても同じ事が言えるか？」

その言葉に口に含んでいた水を盛大に噴き出した。

「急ごう…」

俺達は全速力で現地へと向かった。

雪蓮の武力は孫呉の中で最強と言っても過言ではない。但し、そ
れを制止できる者が孫呉の中に少なく、それを完全にコントロール
できるのは冥琳くらいのものだ。その冥琳は現在、執務中…つまり、
今の雪蓮は野に放たれた虎に羽をつけてやったようなものだ。案の
定、現地には既に雪蓮がいて、ならず者にとどめを刺そうとしてい
た。俺と程普は雪蓮とならず者たちの間に割り込み、俺が雪蓮の剣
を止め、程普が腰の抜けたならず者達に縄をかけていった。

「…雪蓮。そこまで…後は俺達が引き継ぐから…」

かろうじて受け止めた剣の下で俺は雪蓮に伝える。

「あれ？武、どうしたの？」

俺の力が抜けるのと雪蓮の力が抜けるのはほぼ同時だった。雪蓮が
剣を鞘に納めたのを見届けてから俺は十手を腰にさした。

「どうしたの？じゃないって…」

俺はため息をつきながら、

「冥琳には伝えてるよね。城下に来る事…」

雪蓮は視線を反らして、そっぽ向く。

「…まあ、いいか…で、何してるの？」

確か冥琳から聞いた話だと今日、雪蓮は目を通さないといけない書
簡が大量にあるって言うってたが…

「城下の巡察？」

彼女の風来坊っぷりは今に始まった事ではない。

「…それで、たまたま遭遇したひったくりをその剣でぶった切ろう
とした訳？」

「そんなところね。」

即答する雪蓮に俺はため息をついた。これは確か先日も説明した筈だったんだが…

「前も言っただと思うけど、罪人はその罪状に応じて労役を課すから、現行犯であつてもその場で罪人を切り捨てたらいけないって…」

「だって…」

「雪蓮の言う事もわかつてる。今の孫呉に罪人の働く場所を提供するほどの余裕はない。でも、その罪人を労働力として使役しないとイケないくらいに人員が不足しているのも現実なんだから…それに労役くらいで更生できるなら安いもんだろ？」

雪蓮は少し我俣で自由奔放なところもあるけれど、凄く心根が優しい人だ。だけど、自身が守るべきもの…孫呉に関係する者全てを傷つけたりする者は決して許さない。だから、罪人はその場で処断するべきという雪蓮の考えもわかる。その刑罰が罪を犯せばこうなるという見せしめになる。そう知らしめる事、それは現代社会の死刑とて同じ意味合いを持っている。だからこそ俺は罪人は捉え、その罪の重さを自覚させて、更生の切っ掛けを作りたいんだ。それでも更生の余地がない時は俺も容赦はしない。

「まっ、ここでのんびりするのみな…皆、持ち場に帰ってくれ。これから休憩に入るものはすぐに引き継ぎを行う事。以上、解散！」俺は兵士達に指示を出し、雪蓮の方を振り向いた。

「さて、雪蓮。行こうか？」

キョトンとするの雪蓮に言葉を続けた。

「俺、丁度、休憩に入ろうとしていた時に呼び出しを受けたんで、まだ昼を食べてないんだ…一人で食べるのって、何か味気ないからさ、一緒に食事しないか？雪蓮、この辺の店に詳しいんだろ？」

その言葉に沈んでいた雪蓮の表情はパツと明るくなった。

「よし！それならとびっきりの店を紹介してあげるわ！」

そういうのと同時に俺の手を取り、雪蓮は走り出したのだった。

「戸籍作成と国営事業の展開？」

俺は冥琳と穩と共に新たな内政制度についての検討を行っていた。以前、提案した新兵教育に関する案件の城下に治安維持部隊の詰め所を置き、そこに警邏部隊として新兵を配置するというのが思いの外、成功だったようで今回は税收増加に関する問題を話し合っていた。それで俺が今回提案したのは税制を安定させる為に戸籍を作成する事と国営事業の展開を提案してみた。

「戸籍は税制を確実なものとする為には必要だし、国営事業は例えば米、塩、砂糖って言った絶対に必要とされるものをいったん集めてそれを売るんだ。もしくは商人を介して売って、その収益を俺達に納めさせるんだ。他には公共の交通機関の整備…言ってしまうと、各地に駅舎を配置して、有料で…とは言っても金額は民衆が利用しやすい割安の金額で護衛付きの馬車を出すんだ。こうすれば、民衆も移動しやすくなるから経済もよくなるだろうし、実戦を兼ねた兵士の訓練もできる。もう一つこれの利点を付け加えれば、この駅に国境警備の役割を持たせる事も可能かな。後これが最も重要なんだけど、鉾山の開発かな…銀、銅は貨幣として使用できるし、鉄は武器の他にも農具としても使用できる。鉄製農具に変更すれば農業の作業効率も良くなるしね。」

「ふむ…戸籍の作成か…民全てのものを集めるとなると難しい話だな…しかし、いつかは作成しなければならんな…」

冥琳は顎に手を当て考え込む。

「そうですね、でも、どの制度もいずれは作っていかないといけないかもしれないかも…」

「まあね、ただ戸籍に関しては早いうちから取りかかった方がいいだろうね。孫呉がこれから大きくなっていけば、さらに人が増えるだろうから後回しにすると、とんでもない事になるだろうね…」

「うむ、そうだな。まずは戸籍作成から手をつけようか。駅舎の設営と鉾山の開発については並行して実施する事にしよう。穩、お前は開発可能な鉾山の選定を頼む。」

「了解です。」

穩はそう言つと兵士を呼び出し、鉾山の選定に向かわせた。

「なら、私は戸籍の作成に取り掛かるう。武。すまないが、国营事業の展開はお前に任せても構わないか？」

「ああ、でも草案は既にできているから、後は専売は商人の選定、駅舎は場所がよければ建設に取り掛かれる。」

「分かつたなら。一度その草案を見せてくれ。まあ、お前が考えたんだ。ほぼ間違いないだろうがな。」

「そう言つてもらえるとありがたいな。」

その後、冥琳からの許可を得た俺は駅舎の設営と商人の選定に取り掛かつたのだつた。

冥琳達との内政の調整に目処がつき、何とか落ち着いた時を過ごしていたある日の事だつた。部隊訓練、ただそれだけを聞かされた俺は祭さんに連れられて、城下から少し離れた森林の中に来ているこの場にいるのは祭さんとその部隊の中でも精鋭と分かる面々が揃つていた。

「祭さん…部隊訓練つて言つてたけど、その割には二個小隊しかないけど…何の訓練？」

「…すぐにわかる。」

その時だつた。背後から息を詰まらせたようなくもった声が聞こえたかと思うとドサツと言つ何かが倒れるような音がした。音がした方を振り向いた時、目の前には縄で拘束され、倒れている一人の兵士がいた。

「始まつたな…」

「何が始まつたつていうの？」

「今日是对工作員の訓練だ。相手は明命。既に周辺に潜伏しているで、油断をすればこの通りじゃ…」

祭さんがうつ伏せに倒れたその兵士を仰向けにひっくり返すとその

兵士の顔には

“私が本日一番の餌食でーすv”

「…切ないな。」

「ちなみにこの墨は特注品でな…水で洗っても落ちんから、落書きをされたまま、城下町を帰る事になるんだ…その姿を城下に晒すのは屈辱以外の何物ではない。」

「…って言う事は俺達は二手に別れて策敵を行い、明命を捕獲すればいいって事だよね？」

祭さんは頷き、

「ウム、その通りじゃ。二手に分かれ、儂はこちらお主はあちらを頼む。」

「了解…」

そして、俺達は八人の小隊で森の中を突き進んでいった。

俺達は周辺の警戒を行いつつ、慎重に歩を進めた。そんな時、真横の茂みが揺れ、二人の兵士がそこに飛び込んだ瞬間だった。飛び込んですぐ聞こえたのはカエルが鳴くような声…二人を茂みから引き抜くと

“注意力不足”

“釣られて追っかけて自爆しました”

簡単にやられているようだが、彼らは一般兵士ではなく精鋭部隊のメンバーだ。繰り返すが、彼らは精鋭部隊のメンバーだ。それが不意をつかれたとはいえ、精鋭部隊の兵士二人があの小柄な女の子に一瞬で無力化されたうえに拘束して顔に落書きしてその気配さえ感じさせないとは…明命、恐るべし…

「た、武さま…どういたしましたよう…」

「それぞれの配置を変更する…」

俺は残った六人の兵士たちを呼び集め、指示を出す。

「しかし、それでは…」

「よく聞け！これは対工作員の戦闘だ。工作員の明命が正面から戦

いを挑んでくる事は無い。だから……」

そして、俺は隊を先頭に前方左右を警戒する二人、その後ろに後方との伝令役が一人。更にその後方に二人が左右の警戒、最後に殿で待機する俺との伝令役が一人で列を組ませ、森の中に入っていた。

武の行動に周泰は驚いていた。これまでの訓練において自身の隊を分ける指揮官は一人もいなかった。大抵の指揮官は隊の壊滅を恐れるあまり、密集陣形を取っていた。だからこそ、少しでも物音を立てれば、皆がそちらに気を取られる一瞬をつけば、簡単に制圧する事ができた。しかし、隊を分散させられたとなると片方を潰そうとした時、残りの一隊は少し離れた場所にいる為、互いを援護しやすいのだ。その為、周泰は攻め手を迷い、先に黄蓋の部隊を制圧する為にその場を離れたのだった。

明命もこちらの手の内は分かっているようで警戒の範囲を散らし、また一人と兵士を拘束していった。何とか壊滅を避けた俺は開始地点に戻った。丁度、そこに祭さんがやってきた。

「祭さん、他のみんなは？」

「やられてしまったよ。何とか反撃しようと追いかけたんじやが……遮蔽物が多いうえに明命は中々すばしっこいからの……矢が切れたから戻ってきたんじや。そちらは……結構残っているの……」

「確かにこつちも残ったとは言っても、残り兵士は二人……」

振り向けばそこにいたのは拘束された一人の兵士、

“油断大敵です”

「……流石は明命。我ら孫呉が誇る最高の工作員……」

「祭さん……余裕だな。もう残りは俺と祭さんだけだつて言うのに……」

「な、何！？クツ、まさかまた勝ちを譲るというのか……」

「余り聞きたくない気がするんだけどさ……明命は何戦中何勝しているの？」

「この訓練で負けたという話は来た事がない……」

つまりは全戦全勝…勝率十割…

「凄いな…孫呉最高の工作員って言う理由がよくわかるよって…祭さんもか…」

振り向いた目の前には拘束され、無残にも顔に落書きをされた祭さんが倒れていた。しかも顔にはご丁寧に…“乳ばかりでかくなりすぎです”

「…なんか私怨が籠ってないか？」

思わず俺は声を漏らす…その刹那だった。背後にわずかに風が揺れ、俺は咄嗟に身を屈めた。風を切る音と共に明命が一瞬、姿を現すがすぐに木立の中に姿を隠した。

「そっちがその気なら…」

俺は駆け出し、少し開けた場所に座り込んだ。

周泰は武の姿に再び考えを張り巡らせていた。武の姿は無防備そのもので警戒を張り巡らせているようではなかった。誘っているのは確実だろうが、それが分かるからこそ手出しをできずにいた。時間に制限がないとはいえ、この硬直状態を続けても全く意味はなかった。周泰は腹を決め、武との距離を縮めた。気付くか気付かないかの距離まで近づいた周泰はもっていた小刀を投げつけた。しかし、武なら回避できるという周泰の予想は外れ、小刀はその背中に命中し武はその場に倒れ込んだ。周泰は驚き、武の様子を確認しようとその場から動こうとした時だった。

「これで積みだな…明命。」

武に背後から十手を突き付けられた周泰は思わず振り向き、

「いつの間に背後に来たんですか!？」

「いつの間について言われても…正面から明命がやってくる事は無いだろうから、あらかじめ俺の上着を被せた木をあそこに置いてその背後の襲撃できそうな木の上で待ってただけ。で、攻撃が成功したら、囨に近づこうとするだろうから、その隙を狙って接近したんだ。で、これで捕獲成功…かな？」

周泰はうなだれ、

「ううゝ初めて負けましたゝ」

武は笑いながら答える。

「実際のところ、明命が引つかかってくれたから何とか決着がついたけど、もし明命が接近戦に先に持ち込んでたら勝敗は分からなかったさ。」

武が周泰の頭を撫でると、落ち込んでた表情はどこへやら…周泰は気持よさそうな顔をしていたのだった。

もちろん、その後は体中に落書きされた孫呉の部隊の将兵が城下の大通りを練り歩いていた…将兵の顔が紅く染まっていたのは見間違いではない。武は心の底から安堵したのだった。

十二章 拠点フェイズ／孫策・周瑜&陸遜・黄蓋&周泰（後書き）

黄巾の乱が一応終結。

今回の話は閑話休題という事で拠点フェイズ。

ストライクフリーダムな孫策とそれを抑えようとする警備隊の苦闘の日々…話的には今回が孫策の初めてではなく、すでに前科あり…

どんな事したら豊かな国が出来るのかなって考えて、一番無難かなって思った国営事業というか専売。一個の企業が独占すれば必然的に利益は上がるわけですし、だから独禁法が制定されたのわけですし…

黄蓋&周泰の拠点の中にある“先頭に前方左右を警戒する二人、その後ろに後方との伝令役が一人。更にその後方に二人が左右の警戒、最後に殿で待機する俺との伝令役が一人”という隊形。はつきりとは覚えていないんですが、実際に搜索作業などで使われていたものだったと思います。実際、この状況になる事はないでしょうけど、要救護者などの搜索は大抵7、8名の少数の班が複数で作業に当たっていたと思います。それで要救護者を搜索させるつもりで使ってみました。

次回もまだ拠点フェイズは続きます。その後は反董卓連合に傾れ込みますので楽しみに！

十三章 拠点フェイズ／孫権・甘寧、そして…

ある日、俺は突然、冥琳に

「武。お前、今日は休め。」

そう言われ、暇を持て余していた。

「…休めと言われてもする事がないんだけどな…って、俺なんかよりも冥琳のほうが働いてないか？」

確かに俺は内政と城下の警邏とか他にも幾つか協力しているけど、あくまでそのほとんどが冥琳の補佐だったりするわけだから、働いている量という事では明らかに冥琳が多い。

「…冥琳こそ休暇を取れよと思うんだけどな。」

とか何とか言いつつ、休暇をのんびんだらりと過ごしている俺が言えた事ではないと思う。

「しかし…何をして過ごそうか…」

そんな時、練武場の方から剣撃の響く音が聞こえた。

「うん、練武場のほうにでも言ってみるか…」

俺は歩みを速めて練武場に向かった。

練武場には結構な人数の人がいた。その中でひととき目立ったのは部隊訓練をする兵の集団ではなく剣を交わす二人の武将、孫権と甘寧だった。二人の練武を見ていた武は蓮華の実戦そのものの裂帛の気迫を発する姿に一抹の不安を感じさせられた。とはいえ、その気迫は声をかけるのを躊躇わせるほどのものだった。武はしばし静観する事を決め、二人の練武に見入っていた。

練武の様子を見てみると蓮華の裂帛の気迫と共に放たれる斬撃を思春は表情一つ変えずに凌ぎきっている。

「…闇雲に切り込めばいいというものではありません。蓮華様。」
涼しげな表情は蓮華を熱くさせるのには十分だったようだ。

「クツ、今日こそはその涼しげな表情を崩してみせる！」

蓮華が放つ剣撃は更に剣速を上げた。

「そうやってすぐに熱くなるのは蓮華様の悪癖です。熱くなれば剣撃の威力を増すかもしれませんが、心を乱します。」

「言わせはしない！」

袈裟がけからの五連突き…流石というのか気迫と言い、その攻撃の鋭さは雪蓮によく似ている。でも、思春はそんな蓮華の攻撃を何事もなかったかのように受け流し、蓮華は間合いを取り、再度構えを取る。

「大体、思春！私だけが攻撃をするのでは訓練にならんでは無いか！」

「…分かりました。では、思春、参ります！」

一歩踏み込むのと同時に思春は蓮華との間合いを一気に詰めると同時に剣撃を放つ。逆手に持たれた思春の剣撃は容赦なく、蓮華に降り注ぐ。見ている限り、斬撃の速さだけならあの雪蓮をも凌駕しているかもしれない。思春は本気ではないとは言っても蓮華には十中八九、荷が重いだろう。そう思っている内に思春の攻撃を完全に受け切れなかった蓮華の剣が宙に舞い上がる。

「しかし…」

俺は意を決して、声を掛ける事にした。

「流石というべきなのかな…？」

二人は俺のほうを向き、

「武…いつから見えていたの？」

「貴様…いつから覗き見ていた？」

反応が違うのは当然なんだがな…

「少し前からだよ…別に覗いてたわけじゃないさ。今日は非番だったもんで暇でさ。いろいろと歩き回ってたらここに着いたってだけさ…」

思春はそれを聞くと背を向けた。

「そうだったの…ねえ、時間があるんだったら鍛錬の相手をしてく

れないかしら？」

「…別に構わないけど、その前に…」

俺は持っていた手拭いと水筒を差し出す。

「蓮華は少し休憩をした方がいいよ。肩で息するほど疲れた状態での訓練は何の意味もない。」

その言葉に二人は驚いたような表情をする。

「そのような気遣いは無用だ！鍛錬とは常在戦場の心持でやらねば意味がない！疲れたからと言ってしないのでは何の意味が…」

俺は言葉を続けさせようとは思わなかった。

「常在戦場というなら、なおさら休憩を取るべきだ。」

「お前は戦場で疲れた者に休めというのか？」

「…当然だな。疲れた者を戦場に出したところで足手まといにしかならないからな。だからこそ、そんな状態で戦場に立たせないように休憩を取らせるんだだけだね。蓮華もそうじゃないのか？」

蓮華は目を見開き驚いていた。

「蓮華も疲れが見えている兵士達に死ぬまで戦えなんて指示は出さないだろ？」

「当たり前だ！って…話をすりかえるな！」

「…何一つ、こ奴は話をすり替えていないように聞こえますが？」

思わぬ援軍に俺は驚いた。

「…思春が弁護してくれるとは思わなかったな。」

「フン！人物の好き嫌いで持論は変えるつもりはない。」

「思春まで私を甘やかすというのか！」

「実戦の為の鍛錬というならば、心身ともに充実した状態でされた方が実になるという考えには私も賛成です。本来であれば、私が強く休憩をお勧めすべきでした。申し訳ありません。」

「だから、私を総出で甘やかすなと…」

「無理をして怪我でもすれば、元も子ありませんよ。」

思春の言葉に言葉を詰まらせつつも、何かを言い返そうとする蓮華に「何も今日の鍛錬がこれで終わりにする必要はないんだ。ただ少し

呼吸を整えたほうがいい。」

「…ええい！休めばいいのだろう！休めば！」

流石の蓮華も俺達二人が相手となると無理と観念するも、不満な様子は隠そうともせず、俺がいた傍の椅子に腰かける。

「…何をしている？思春、お前も少し休め。」

「…いえ、私はさほど疲れてはおりませんので。」

そうきつぱりと断る思春に

「皮肉か、それは…」

蓮華はため息をつく。その呟きは思春には届かなかったようで、思春は素知らぬ顔で剣を納めて、後ろ手に立っていた。

「…蓮華、汗を拭いて水分を補給しておいた方がいい。鍛錬を続けるならそれから…かな。」

俺は水で濡らした手拭いと、竹筒を蓮華に渡す。

「…うむ、ありがとう…」

「おい…皇…」

その言葉に俺は思春の方に顔を向ける。

「暇だと言ってたな…私の相手をしろ」

呉の面々…というか武闘派のメンバーからは事あるごとに挑まれてきていた。思春は表には出さなかったけど、最初に出会った時に取った行動は腰の剣に手を掛け、雪蓮達がいなかったら飛びかかってきていただろう。どうやら状況からして逃げる事も出来そうにはない…

「分かった…」

俺は十手を手にして練武場に入った。

甘寧は武と対峙すると逆手に剣を握りしめ、半身に構えを取った。それに対し、武は甘寧を見据え、腰に十手を差したまま直立しているだけだった。

「…貴様、どういっつもりだ…」

直立した体制のまま行動を見せない武に甘寧はいら立ちを隠せなかった。

「構わないさ……」

そう言う武に甘寧は構えを取りなおすが、対峙した武に隙は無く仕掛ける事ができなかった。攻撃を逡巡する甘寧に

「……来ないならこちらから行こうか？」

そう言われ、甘寧は一気に間合いを詰め、袈裟掛けに剣を振り下ろした。その連撃を武は小さな円を地に描くように最小限の間合いで回避していく。

最小限の動きで攻撃を回避するという事は間合いを詰められる事を意味していた。甘寧は一度、剣を持ち直し、間合いを取った。再度攻撃を仕掛ける為に、甘寧は間合いを詰め、袈裟掛けに斬り込んだ。武はそれを難なく避け、甘寧に一撃を入れようとした時だった。甘寧は剣を振り抜いた次の瞬間、逆手に持ち変え剣先を突き返した。「クッ！」

武は思わず、甘寧の突き返しの動きに合わせてように体を回転させた。そして回転の動きに合わせてように十手の柄を甘寧の肩口に叩き込んだのだった。甘寧はその肩への衝撃に思わず剣を落とし、膝をついた。甘寧が顔を上げた時、目の前には十手を突き付ける武がそこにいた。

「勝負あり……かな？」

「参った……」

思春の素早さを生かしたヒットアンドアウェイの攻撃。その攻撃は鋭く、その攻撃速度という面であれば雪蓮に匹敵するだろう。しかし、鋭く速い攻撃は言いかえれば威力が低く決定打とならない。避けるのは困難だが、当たったとしても致命傷になる事は無い。俺は自身からも間合いを詰める事でその攻撃の威力を抑えていた。そんな思春の繰り出した袈裟斬りを回避した俺は決着をつけようと十手を叩きこもうとした時だった。思春は瞬時に剣を持ち変え、突き

返しに切り替えた。予想してなかった俺はその剣の動きに合わせるように体を回転させ、その流れのままに思春の右肩に十手を叩き込んだ。剣を落とした思春に俺は十手を突き付け、残心を取った。

「勝負あり…だな。」

「参った…」

俺は手を差し出し、思春も手を握り返す。

「流石、孫呉有数の武将だな。恐れ入ったよ…」

「ふんっ！貴様こそよくやる…あそこまで攻撃をかわされたのは初めてだ…」

二人の勝負に見入っていた私は啞然としていた。私が思春と鍛錬をしている時に思春が手加減をしている事を私は重々に知っていた。しかし、今その思春が全力で戦って負けたのだ。それを見た私はかつて雪蓮姉様が不意打ちを仕掛けた時も武はそれを回避し、孫策と互角に打ち合ったという話を改めて理解した。

その後、休憩を終えた孫権も武と鍛錬をする事になり、何だかんだで夕食まで三人で過ごす事になったのだった。

ある朝の軍議の事だった。周瑜達がいつも軍議をやっている広場に慌てた様子で孫策がやってきた。

「冥琳！大変よ！」

「何？朝から騒々しい…」

「いいから！とにかくこれを読んで！」

「はいはい…」

そう言うとう周瑜は孫策が持ってきた手紙を見た途端、その表情は一変した。

「冗談でしょ…」

「冥琳、何が書いてあったというの？」

孫権の問いに周瑜は手にしていた書簡を孫権に手渡した。

“呉のみんなへ

この手紙をみんなが目にする頃は俺はおそらく国外にいるだろう。少しの間、呉を離れる俺の勝手を赦してほしい…

俺はこれから大陸の各地を回って、見聞を広めて来ようと思う。

先の黄巾の乱を経て、これから、力が必要な時代が来るのは明白だ。その為にもこれから各諸侯に直に会って、孫呉にとってどんな存在になりうるか俺なりに見極めて来るつもりだ。

俺は必ずみんなの所に還ってくる。だから、少しの間待っていてほしい。”

「勝手な事を言ってくれる…せめて何か一言くらい相談してくれればいいものを…」

ため息をつく周瑜に

「まあまあ、とにかく先を読みましょう。」

“雪蓮、自由奔放なのが雪蓮の良いところだけど冥琳達に迷惑ばかりかけるなよ。偶には冥琳達に協力して内政を手伝ってあげて。”

「ほう、なかなかいい事を言ってくれる。」

ほくそ笑む周瑜に孫策は泣きそうな顔で後ずさる。

「…武のいけず…」

“冥琳、余計な負担をかけて申し訳ないが、皆の事をよろしく頼む。とは言っても、冥琳は少しは仕事を他に回した方がいい。冥琳が倒れたら、孫呉が乱世で立ち回る事ができないんだから…適度に休暇を取ってよね。働きすぎないかそれが一番心配なんだからさ。”

「まったく人の事ばかり心配して…人が良いにもほどがあるぞ…」

「嬉しそうな顔をしちゃって…何言ってるのよ…」

周瑜は振り向きもせずに

「…ここ最近、大量の書簡がたまっていたな…早いところ済ませな

いとな…雪蓮…」

その声にはその場にいた者全てが周瑜に畏れ慄いたのだった。

“ 祭さん、酒の飲み過ぎには気をつけて。酒は百薬の長とは言っても過ぎたるは及ばざるに同じだからね。少しは飲酒の量を抑えて。そうすれば、孫呉の財源も今より逼迫しないで済むから…もし、飲酒量を減らす事が出来たら、俺が前いた世界の美味しい物をご馳走するよ”

「ほう…祭殿、我ら孫呉の財政を逼迫させるほどのお酒を飲まれていたのですね…」

「ま、待て…落ち着け！冥琳！冷静になるのじゃ…」

「これが落ち着いていられますか！」

周瑜と説教を受ける黄蓋の二人を見ながら

「ねえ、蓮華？武がいた世界の美味しい物って何かな？」

「そうですね…できれば私も少し食べてみたいですな。」

“ 穩、冥琳の補佐は頼んだよ。冥琳は何でも抱え込んでしまふ所があるから気をつけて”

「はいはい！頑張っちゃいますよ…」

“ 明命、猫が好きなのは良いんだが、たまにそれが原因で隙を突かれそうになる時があるから気をつけるように。後、対工作兵の訓練だけでももう少し手加減してあげた方がいいと思う…あれは流石に立ち直れない奴もいるから”

「そんなに酷いでしょうか…？」

しよぼくれる周泰を見たすべての面々の心が一つになった。

『 自覚無しなの！？ 』

“ 思春、蓮華はすぐに無茶をするから、見ていてやってこの間の手合わせの事だけど、思春の攻撃は速さと手数 of 攻めだから確かに早

い。ただ、威力が低いから最後の一太刀を繰り出す時に右足に体重をかけてみて。体重のかけ方一つで今までの倍以上の威力が出せるはずだから。”

「フン！おせっかいな奴め…」

そっという甘寧の口元には笑みが浮かんでいた。

“蓮華、蓮華自身は気付いてないみたいだけど常々肩に力が入りすぎてる所がある。先代の孫堅様や雪蓮の存在が大きいのはよくわかる。でもさ、蓮華は蓮華で孫堅様や雪蓮とは違う。蓮華は孫堅様や雪蓮に比べたら、まだ未熟と思うていると思う。でも、蓮華には蓮華の良いところがあつて孫堅様や雪蓮よりも優れているところもあるんだ。完璧なんて求めなくていい…完璧である必要はないんだ。完璧な人間なんてこの世の中には一人もない。補い合つてこそ人間なんだから…蓮華一人でどうにもならない事なら周りの人を頼る、それが一番だよ。”

「…本当に人が良すぎるわよ…」

“最後になつたけど、三年…三年以内に俺は皆の所に戻ってくる。だから、皆も体には気をつけて…
いつてきます。”

「…全く勝手な事ばかり、言ってくれる…」

周瑜は呆れたような表情をしつつも、その瞳は淋しそうにしていた。それはその場にいたみんなが同じ気持ちだった。

「…武。とつとと帰ってきなさいね。じゃないと許さないわよ…」
孫策の呟きは空に吞まれ消えていった。

十三章 拠点フェイズ↪孫權・甘寧、そして…（後書き）

PV50000アクセス突破！

ありがとうございます！

相変わらずチートな武と今後も変わらぬ声援をよろしくお願いします！

次回から遂に反董卓連合編に突入です！

もちろん忘れてはいませんよ。武の無駄にチートな諸国行脚は挿話として反董卓連合中に掲載しますよ！お楽しみに！

十 四 章 反董卓連合の結成

黄巾党の首魁大賢良師率いる黄巾党本隊を撃破した事で孫呉の勇名は大陸全土にその名を知らしめた。孫策はその天才的戦振りから“江東の麒麟児”と称され、その噂を聞き付けた若者たちが孫策の下へと集まるようになっていた。更に孫策の下には多くの商人達が庇護を求めて集まるようになりそれらの援助もあり、自然と軍備、財力共にその規模は大きくなっていった。しかし、勢力が大きくなつたとはいえ、袁術と比べればまだまだ矮小なもの。袁術にとつても現状は脅威となるような存在ではないが、急速的に勢力を拡大する孫呉を袁術らが警戒を強めないわけがない。今後、袁術からの警戒が厳しくなるのは明白であつた。

武が孫呉を離れてから二年の歳月が過ぎた。その時、大陸に激震が走つた。それは後漢王朝十二代皇帝霊帝が崩御したのだつた。黄巾の乱で無策、無能の実態を顕わにしてしまつた後漢王朝に権威は皆無であつた。更に霊帝の崩御により都では後継者である二人の皇太子、劉弁と劉協がいた。霊帝崩御から半年の間で後継者を巡つて、その二人の後見人である大將軍と何進と十常侍の争いが勃発する。その二勢力の確執による後継者争いは、劉弁が暗殺された事に始まり、劉弁を擁護していた何進が劉協を有する十常侍の暗殺を試みるが、逆にその刃にかかつてしまう。それに激怒した河北の袁紹は十常侍を誅殺した。難を逃れた、十常侍の一人“張讓”は皇太子、劉協を連れて都から逃亡する。逃亡中の張讓を涼州の太守、董卓が討ち、劉協を保護する。そして、劉協は後漢王朝最後の皇帝“献帝”として即位するのだつた。血を血で洗う醜い争いは董卓の手で一応の終結を迎える。

しかし、権力を欲して手に入れようと画策する人間がいる現状において、権力争いは終結を見せる事は無い。誰よりも最初に動いた

のは袁紹だった。袁紹は各諸侯の下に檄文を飛ばしたのだった。

“ 十常侍を討伐した董卓は皇帝を手中に収め、幼き皇帝を盾に取り、専横の限りを尽くし、思うがままの振る舞いをしている。そのような董卓を野放しにするなど言語道断。もし、このまま董卓の専横を許せば、黄巾の乱の二の舞となり天下は混沌としたものとなるだろう。

朝廷に忠誠を誓う諸侯達よ、今、危急存亡の危機に頻している漢帝国を救う為に、董卓を打ち、専横を防ぐのだ。今こそ、我等が漢帝国の為に再度立ち上がれ。”

この檄文はこの割拠の時代に覇を狙う諸侯の心に火をつける事となり、多くの諸侯がこれに呼応した。そして、江東の孫策の下にもこの檄文が届いたのだった。

「袁術ちゃん。私の所にこんな檄文が届いたのだけれど…そっちにも来てるかしら？」

孫策の言葉に

「檄文？何じゃそれは？妾のところには来てないぞ。」

孫策は手に持っていた書簡を袁術に手渡した。

「これなんだけどね。あなたの従姉の袁紹からの書簡よ。」

「ふむ…では見てやろうか…」

袁術はその書簡を見て、

「…」

その書簡を張勳に差し出し、

「七乃、この手紙を読んでたも。妾は手紙を読むのは嫌いじゃ。それにあの妾腹の手紙なぞ読むに堪えんのじゃ。」

張勳は手紙に目を通し、袁術は手紙の内容を急かす。

「はいはい。要は董卓さんが洛陽を制圧しちゃってる袁紹さんはそれが許せない。だからみんなで力を合わせて袋叩きにしちゃいましょうって事ですわね。」

袁術はげんなりとした表情で張勳を見る。

「何じゃ…妾の娘の分際で、妾にこんな命令するとは許せんものじゃ！」

「…最もその書簡は私宛に送られてた物なんだけどね…」

「それならばなおのこと失礼な話ではないか！孫策は妾の家臣なんじゃぞ？その主君である妾を無視するなんてひどいのじゃ！」

その言葉に孫策は眉を吊り上げる。張勳は

「でも美羽様？これって大陸の諸侯に送られた物みたいですから、参加しないと後々面倒な事になっちゃいそうなんですけどお？」

「そうね…参戦しなかったら後で諸侯からどんな扱いを受けるかわからないわね…だから、こうやって袁術ちゃんの判断を仰ぎに来たのよ」

そついう二人に袁術は顔を背け、

「嫌じゃ！妾はあんな妾の娘の下に着くのは嫌じゃ！」

孫策はため息をつきながら

「でもね、袁術ちゃん。考えてもみなさいよ。袁紹が集めた諸侯を袁術ちゃんが手玉に取る事ができたら？もしくは袁紹と仲の良いふりをして、連名で反董卓連合の發起人つて事にでもなれば？」

「どういう事じゃ？」

ここまで言つて意味の理解できない袁術にさらに続ける。

「もし今回の連合で袁術ちゃんが袁紹をうまく裏から動かす事が出来たなら、今後、袁術ちゃんの発言力が強くなる事は間違いないでしょうね。それに今回の戦いで首尾よく董卓を都から追い払う事ができれば、袁術ちゃんが次期皇帝の座につく事も不可能ではないでしょうね。」

それを聞いた袁術はパツと笑顔になり、

「妾が皇帝じゃと！？」

「そう。今の皇帝は既に董卓の傀儡となっている。董卓を追い払う事ができればその地位が空白となり、そこを袁術ちゃんが握れば、後はやりたい放題。いい話じゃない？」

「妾が皇帝、とな…」

「新皇帝美羽様…将来偽帝として名を残すこと間違いなし…偽帝美羽様…ああ、なんて素敵な響き！」

「妾は皇帝になるのじゃ！」

孫策はありもしない将来に思いを馳せる二人にため息をついた。

「じゃあ、袁術ちゃんは参加するのね？」

「もちろんじゃ。当然、妾も参加するのじゃ！」

「…分かったわ。だったら、私達も袁術ちゃんが皇帝になる為に協力してあげる。」

「うむ！よい心がけじゃ。今後もその忠誠心を忘れることなく、妾に尽くせよ！」

「はいはい…じゃ、準備があるから私は屋敷に戻るわね。」

そう言つて孫策は二人に背を向け、ため息をつきながら部屋を出たのだった。

焦燥した様子の孫策を見た周瑜は

「お帰りなさい。その様子だと相変わらず莫迦みたいな事を言つてたみたいね。袁術は…」

「まあね…でも、首尾よく反董卓連合への参戦を取りつけてきたわ。」

「…
」という事はこれで儂達の本当の戦いが始まるという事じゃな。」

黄蓋のその言葉にその場に集まつた面々が頷く。

「その通りよ。今回の戦いは私達が飛躍するための重要な戦い…負ける訳にはいかない…それで今回の方針んだけど…冥琳説明をお願い。」

孫策の言葉に

「うむ。今回の戦いだが、まず参戦する者だが、まずは雪蓮と私、続いて思春、明命。そして蓮華様に参戦して頂く。」

「では、儂と穩は？」

「はい、二人には小蓮様と合流し、建業に向かつてもらいたいの

す。」

「心得た。では穩、儂達はさっそく準備に取り掛かるぞ。」

「はいはい」

孫策はその場に残った面々に

「あなた達はこれまでに何度かの戦いを経験してきている。でも、今のままじゃ孫呉が勝ち抜けないのは分かるわね。」

孫策の言葉に皆が頷く。

「今回の戦いは今後孫呉が飛躍する為にも私達が知勇兼備の軍であるという事を知らしめる…」

「加えて兵の損失を抑えるという事が必要だ。最も今回の戦いは被害を抑えつつ、新人や若者たちが経験を積む修練の場として取りかかる。」

そんな困難な条件に皆、息をのむ。

「ま、兵力の少なさと人員が少ないから私と冥琳も出張るんだけどね。」

孫策は苦笑しながら言葉を続ける。

「とにかく私達はこの戦の後に来る割拠の状況次第で取るべき道は変わる。だからこそこの戦を確実に勝ち抜かなければいけないのだ。」

「だから皆、ここからが正念場よ。心してかかるように！頼りにしてるからね。」

孫策の言葉にその場にいた者達は頷き、それぞれに戦の準備に取り掛かった。

そしてその場に一人残った孫策は

「早く帰ってきなさいよね…」

その呟きは誰にも届く事は無かった。

行動が決定してからの孫呉は早かった。袁術から出陣の号令があった時にはすでに立出できる状態となっていた。今度の敵は洛陽を制圧し、皇帝を傀儡としているという噂の董卓。その勢力は強大

で黄巾党の比ではないだろう。その強大な敵に立ち向かう為に孫策達は出陣したのだった。

洛陽のとある一室。

「賈軀っち！まずいで！ほとんどの諸侯は袁紹が他についてしまつとる！これじゃいくら何でも…」

「クッ！わかつてるわよ！それくらい！それでも月だけは…月だけは何としても守りたいのよ！」

「ええい、うるたえるな！簡単な事ではないか！ただ全ての敵を斬り伏せればいいだけの話ではないか！」

「阿保か！華雄！それができる規模の敵じゃないから言つとんのだや！」

「私、霞、恋の三人でなら何とでもなるだろう！」

「やから、それでどうとでもなるような規模の敵やないっていうとるのが分からんのか！」

喧々囂々と言いあう二人。

「とにかく今は言い争っている場合じゃないわ。急いで防衛の準備を整えて祀水関と虎牢関の二つの関で足止めするしかないわ…霞、華雄。祀水関はお願いね…恋、あなたは虎牢関をお願い…」

「おう！」

その声に二人は応え、赤髪の女の子はコクリと頷き、急ぎ準備に取り掛かった。

「こんな時にアイツがいてくれたら…」

賈軀の呟きは誰に聞かれることなく消えていった。

ここは洛陽から少し離れた小高い丘の上。

「これからどうするつもりですか？」

「知れた事だ。奴はこの外史においてイレギュラーな存在…消さねばならん…」

「フッフ、貴方のそういう憎しみに満ちた表情、僕は好きですよ…」

左慈……」

「ふんっ、相変わらず趣味の悪い奴だ……貴様は。于吉……」

「褒め言葉として取っておきますよ……」

「ならば行くぞ。我が白き軍団よ。この外史におけるイレギュラ
ー。これより北郷一刀を討つ戦いに入る。心してかれ！」

その声にいつの間控えていたのか、約十萬くらいの白装束の集団
が集結し、異様な光景が広がっていたのだった。

「さあ、北郷一刀。貴様を血祭りに上げる舞台は整った。後は舞台
で踊る役者がそろつのを待つだけだ……」

「これからどうするつもりですか？」

「……期を見て俺は今度の戦いに参戦する。君達は君達自身が心から
望むというなら参戦するといい……」

「何を言っている？私と雷紗は何があるかと主と共に歩むと決めた
んだ。参戦しないはずがない！」

そう答える少女は手にした巨大な剣を地面に突き立てる。

「風華の言う通りです。私と風華はあなたと共に歩むと決めたので
す。例え、あなたがこの戦いに私達が参戦する事を拒んでも、あな
たが参戦するのなら私達はあなたが何と言おうとついていきます。」
その二人の言葉に該当の隙間から僅かに見える口元から笑みがこぼ
れる。

「そうか……ならば、俺から二人にお願いする。風華、雷紗。そして
皆、俺に力を貸してくれ。」

その言葉にその背後に控えていた。兵士達と二人の少女が一斉に片
膝をつき、頭を下げる。

「これより我ら“皇龍”は戦場に舞う龍となる！皆、俺に力を貸し
てくれ！」

その掛け声に歓声が響き渡った。

十 四 章 反董卓連合の結成（後書き）

お気に入り登録件数100件突破！

こんな拙い小説がこれだけの読者の方からお気に入り登録してもらえるとは…

さすが、原作がすごいということか…

こうしてお気に入りに入れてもらえるだけでも執筆の励みになります…

本当にありがとうございます！

本戦に入るまではまだ間があるのですが、それでも読者の方々から面白いと思ってもらえるような作品をこれからも書いていくつもりです。

これからもよろしく願います！

十五章 大陸行脚〜メンマとの邂逅〜

この世界に来て、俺がいた現実世界は平和だったと改めて実感した。

各地を歩き、自身の見聞を広める為に北上していたが、幽州に着くまでに相当な数の盗賊達の根城を潰した。特に徐州、青州はいまだに黄巾党の残党が猛威を振るっていた。

呉を離れた俺は北上して幽州の地を訪れていた。現在の幽州は黄巾の乱で名を馳せた劉備が大守に異例の抜擢され、統治されていた。史実では強かな梟雄、演義では仁徳の人…そして、何れも他人を引き付ける魅力があり、多くの英傑がその下に集結した人物だ。

「さて…この世界の劉備はどんな人物か…」

幽州の城下に入り、気付いたのはそこに住む人達の笑顔だった。笑顔で城下が溢れているということは劉備の治世に満足しているということだ。

城下に入って暫く歩いていたら時だった。大通りの脇にある飲食店に人だかりができていた。どうやら何かイベントがあっているようだ。

店の入り口にある看板に記載されていたのは

“大食い王者選手権！期限内に完食できたら豪華景品！挑戦者求む！”

「どこにでもあるんだな…」

この手のイベントはこの世界にでもあるものなのかと疑問に思ってしまう。そんな事を考えながら俺は向かいのラーメン屋に入った。しかし、その店に空いている席は一つ。男の客というなら遠慮せず座るところだが…

「いらっしやい！すみませんね。今は満席ですて…」

「おい、亭主。ここの席は空いているからそちらの御仁が良いなら合席で構わんぞ。」

「そうでございますか…お客様はよろしいですか？」

「…ああ、構わないよ。」

「ありがとうございます。ではご注文は何にいたしましたでしょうか？」

俺は店内の採譜に目を通した。

「…ラーメンと餃子。後は炒飯をもらおうか。」

「へい、少々お待ちくださいね。」

店主は厨房へと入っていき、俺は青髪の女性の正面の席に腰かけた。ただ、俺はテーブルの上に広がる異様な光景に唖然とした。確かにここはラーメン屋で女性が食べているのはラーメンだ。しかし、その女性の前に置いてある丼に入っている食材は何故かメンマ。それも丼にこんもりと山盛りになっているのだ。

「どうされたのですかな？」

「いや、その丼。メンマにしか見えないんだが…」

「メンマですが何か？」

俺の認識が正しければ、メンマはラーメンに何枚か乗っているようなものでメンマだけを丼に持って食べるという事は無かったと思うが、女性は普通の事だと言わんばかりの表情で聞いてくる。

「へい！お待ち。」

亭主が持ってきたラーメンには普通と思えるくらいのメンマが乗ったラーメンが運ばれてきていた。俺は気にする事は止め、とりあえず運ばれてきた食事を片付ける事にした。

「うん、美味しいな…」

「そうでしょう。この店は幽州でも指折りの店。特にこのメンマは絶品ですからな。」

確かにメンマも美味しいが俺が美味いと言ったのはラーメン全体を見てだったのだが…どうやら青髪の女性のメンマ談義が始まったようだ。

「そもそもメンマとはですな…メンマ職人が…でしてな…多くの…であるからして…その時期で…天然の者を利用した物など…絶品という他なく…丹精込めた…それを至高と言わずして…」

…話を聞きながら食べていると新手の宗教に勧誘されているのか、そんなに食べてもいないメンマを大量に食べさせられたような気がするのは気のせいかな…

「聞いておりますかな！」

「あ、ああ…」

「そうですか。それほどにメンマを食べたいと！」

「いや、俺は…」

「亭主！こちらの御仁にいつもの物を！」

「ヘイツ！少々お待ちを！」

「お、おい！」

俺はそこはかとなく嫌な予感がした。

数分もしないうちに奥から店主がどんぶりに山盛りにされたメンマを持ってきた。

「だから、俺は頼んでは…」

「まさか残すとは…言われまいな？」

凄まじい程の殺気をぶつけられ俺は思わずひるんだ。というかメンマ一つでここまで殺気をぶつけてくるのは如何なもんだろうか…

「…わかってるよ。きつちりと完食させてもらうよ…」

とはいえこの量…しかも何がつかいと言えはこの単調な味と触感…

「店主！」

「何でございますか？」

「厨房を借りるぞ！」

そう言っただけで俺はメンマが山盛りにされた丼を持って厨房に入った。

武は厨房に入るや否や中を確認する。

「よし。これとこれを使って…後はアレが欲しいな。店主！この辺に豆腐が売っている場所はあるか？」

「豆腐ですか？それでしたら、この通りの先に…」

「わかった…少し店を離れる。すぐに戻るから待っていてくれ。」

武は店を飛び出し、豆腐屋に走った。

しばらくして戻った武は厨房に入り鍋を振るった。

「あいよつと！食べてみてくれないか？」

女性と店主の前に三人分の丼が並べられた。二人がそれを口にした瞬間、

「……」

「……」

「……どうだ？我ながら美味しくできたと思うんだが……」

俺の言葉に青髪の女性が俺の手を握り締める。

「素晴らしい！メンマと豚の角煮が互いに存在を主張しつつも、奏でられる弦楽の如くお互いを主張しあうこの味……更に口の中に広がる醬の刺激……極めつけはこの角煮の食感。これほどの味を保ちつつ柔らかさを維持するとは……」

「加えてこの丼の一番上に盛られた生の白髪葱と中に入っているこの炒められた葱……この炒められた葱のとろける様な甘さと同時に生の葱の口の中を刺激する辛味……最早これは……」

「……これぞメンマ丼の大革命ではないか……！」

「……そんな大袈裟な……豚肉が柔らかいのは簡単な事だ。煮込む時におからと一緒に煮込んだんだ。おからで煮込めば、豚肉の余分な脂を吸い込んでくれるから豚肉をより柔らかくする事が出来るんだ。醬はまあ……店に置いてあるものに海産物の屑を醬で炒めた物を使っているから少し食感のある醬になっているから余計に辛味がいい具合にはかの具材にあっているんだろうな。で、葱は単純に甘みと同時に来る辛味が合わされば、より違った食感を味わえるんじゃないかって思ってたな。」

「クツ！惜しい事をした……これほどのメンマ丼を作れるとは……さぞや他にもメンマを使った料理でも素晴らしいものを作れるに違いない……もし、今の主に仕える前に貴方に出会えていれば……貴方に絶対の忠誠を誓ったというのに……」

…メンマ料理一つでこれほどまでに言えるってどうなんだ…ってメンマで忠誠を誓うって…

「御仁！」

青髪の女性は俺の手を力強く握り、

「これほどのメンマ井は初めて食した。せめてものの礼として私の真名を受け取っていただきたい！」

「メンマ井一つで真名って…真名はそんなに軽いものじゃ…」

「何をおっしゃるか！私にとってこれほどのメンマを至宝と言えるほどの料理へと昇華させる事ができる御仁など神にも等しい！真名を預けるには十分すぎるほどだ！」

力説する彼女に

「…わかった。確かに受け取るよ。」

「うむ。姓は趙、名は雲。字は子龍。真名は星という。」

その名前に驚いた。

「常山の趙子龍か…これは驚いた…俺は皇武。あいにく字と真名はない。あえて言うなら武が真名に当たるかな…」

そんな時だった。

「敵襲だー！」

大通りに突然の敵の襲来を知らせる叫びが響いた。

「むっ、まだ語りたいことはたくさんあったのだが、そんな状況ではなくなったようだ。武殿、これから気をつけて旅をされよ。」

星は槍をもって店を飛び出した。

「亭主、勘定を頼む。」

「へ、へい。毎度。」

俺は店を出ると城門の方へと向かった。

十六章 大陸行脚く昇竜との共闘く

城壁に上ると2キロ位先で砂埃が立っているのが見えた。城門の方に援軍に向かおうとする軍団を見つけると武は城壁から飛び降り、騎乗しようとしている一人の兵士の馬に飛び乗った。

「すまないがこの馬を借りるぞ！」

言うが早いか、颯爽と飛び出す武に

「う、馬泥棒！？」

啞然としつつ、武を見送る羽目になっていた。騎乗した武は一気に砂埃の立つ戦場に疾駆する。

「青龍の魂が宿りし、白の御雷（ましろのみかずち）、我が手元に集い、その力を示せ。顕現！白雷青龍刀！」

武の叫びと同時に武の手元には刃渡り50、全長2・5メートルにもなる大薙刀が姿を現した…

敵方一千、それに対するのは私一人。

最近はこの規模の山賊が襲撃してくる事は無かった。多少でも時間稼ぎになればと、無茶は承知での突撃だったが、多勢に無勢のこの状況は正直きつかった。

「フム…せめて愛紗か鈴々がいてくれたら何とかなっただかもしれんが…」

無い物ねだりをしてもしようがないのは分かるがそう思わずにはいられなかった。

「てめえら！何たつた一人にてこずつてやがるんだ！」

盗賊の頭領は部下の不甲斐無さに叫び散らした。

「たかが女一人！体力は無限じゃねえんだ！数で囲んでたたんじまえ！」

その言葉に呼応するかのように盗賊達は数に物を言わせて、次々と

趙雲に向かって突撃していった。

幾多の敵を斬り伏せる趙雲の足元には多くの賊徒の亡骸が転がっていた。その亡骸が増え、趙雲の足場は徐々に狭まり、その槍さばきも疲労とともに次第に緩慢になってきていた。

そして、ついに趙雲は斬り伏せていった賊の亡骸に足を取られ、戦場に倒れこんでしまった。そこを狙った山賊達は趙雲に斬りかかっていった…

戦場に倒れ込んだ私に賊共は容赦なく襲いかかってきた。一人の賊が振り下ろしてくる刃が私に向かってきていた。その光景はゆっくりと時が流れるように私の眼に映り、振り下ろされる刃に私は覚悟を決めた…

「断海青龍爪！」

背後から聞こえた叫びと同時に目の前にいた山賊どもが吹き飛んだ。「助太刀しよう！」

私の目の前には先程一緒に食事をしていた武殿が立ち尽くしていた。

「断海青龍爪！」

間一髪だった。振り下ろされる刃が届く寸前で俺の攻撃が賊徒を吹き飛ばした。俺が星を確認すると星は啞然とした様子で賊がいた方向を見ていた。そして何が起きたか理解したのか星は俺の方を振り向いた。

「武殿！？何をされている！こんな処で！」

叫ぶ星に俺は無事を確認してホッとした。

「無茶をする人だ。」

俺は星を引き起こし、星は呆れたように笑い、

「それをあなたが言いますかな？」

俺は思わず、笑みがこぼれた。

「それもそうですね…いけますか？」

星は頷き、

「当然です！何やら負ける気がしませんな。」

俺達は武器を構え、山賊に向かって猛進した。

「無茶をする人だ。」

困ったような呆れる様な表情で差し出される手を取り、私は立ち上がった。

「それをあなたが言いますかな？」

私の問いかけに武殿は苦笑していた。

「それもそうですね……」

言葉を交わす私たちに正気を取り戻した賊共の攻撃が再開される。視線を賊に移した武殿の表情は急変し、武人のそれになっていた。

「いけますか……？」

それに私は大きく頷いた。

「当然です！何やら負ける気がしませんな。」

私たちは武器を構え、賊共に向かって再度猛進した。

十六章 大陸行脚と昇竜との共闘（後書き）

いつも私の拙い作品を読んでくださっている方々、そして、初めて私の作品を読んでいる方ありがとうございます。

実は前回の十六章から長すぎる長文は読者の方々が飽きてしまうのではと思い、大幅に字数を減らしてみました。その分、章数は増える事になりますが、いかがだったでしょうか？

少しでも読みやすい文章となっていれば幸いです。
今後とも面白くて読みやすい文章を書いていくつもりですので、よろしく願います。

十七章 大陸行脚と昇竜との別れ

目の前には略奪の目標だった街…それを前にして賊たちは立ち往生していた。味方の数は千人…しかし、それを目の前にしてたった二人の男女によってその進行を阻まれていた。

「ええい！てめえら！たかが二人じゃねえか！何を手こずってやる！」

賊の頭領は一向に進軍できない子分に向かって罵声を上げる。

「ですが、頭！あの二人…強いなの…」

泣きそうな子分の声と次々と倒されていく子分達の姿を目にして賊の頭領は齒噛みをした。

賊を相手に槍を振るう私は不思議な感覚に包まれていた。初対面というのにもかかわらず、この背中を任せられる安心感、更に槍を振るうたびに自身の武が更なる高みへと昇華するような感覚…まさに僥倖だった。

「武殿！どうも、負ける気がしません！」

武殿は口元を少しだけ上げ、手に持っていた大刀を振るう。その動きは流れるように賊を両断していった。

「それは何よりです。俺もあなたとの共闘は心地いい。」

私はその言葉が嬉しかった。そして、私の手は自然と槍を握る力が強くなっていた。

立ちふさがる二人の武に盗賊達の士気はどん底まで落ちていた。それもそのはずだ。立ち塞がる二人が武器を振るえば仲間が吹き飛ばされるか、斬り殺される。その圧倒的な武力の差に賊は委縮し、数で有利なはずの賊達が追い詰められていた。

俺は星に背中を預け、薙刀を振るった。明らかに士気の下がった

賊を打ち崩すために俺は声を張り上げた。

「聞け！賊共！俺の名は皇武！俺はキサマ達を冥府へ誘う修羅となる！覚悟しろ！」

目の前にいた賊の一人に薙刀を振り下ろし一刀両断にする。

「ならば私も倣おうか…我が名は趙子龍！常山の昇り龍！我が神速の槍その身に味わうがいい！」

俺達の名乗りには賊共は一步引きさがる。それに合わせるように俺達は斬り込んだ。

両断した賊から噴き出した血が武を紅く染めた。武が薙刀を振るうたびに賊達の血が飛び散り、武を赤く染める。その光景に賊の一人が顔面を蒼白にして震えながら呟いた。

「どこかで見たと思ったんだ…」

その言葉に傍にいた仲間が問いかける。

「どうしたんだよ？顔真つ青…」

「逃げようぜ！アイツは…」

その男が口走った名前に賊達は恐怖に包まれた。

「深紅の死神だ…」

武はこの地に来るまでに幾つもの賊を潰していた。多くの賊を相手に立ち回る武が武器を振るう度にその返り血で武は深紅に染まり、その圧倒的な武からいつからか賊の間では“深紅の死神”や“血染めの羅刹”と噂されていたのだった。賊の間ではそいつを見たら相手にするなと伝えられていたのだった。

成す術なく仲間が一人、また一人とその命を刈り取られていく光景はまさに賊にとっては地獄絵図…

趙雲と武が武器を振るえば、戦場に強大な渦が巻き起こるかのように賊は吸い込まれるように討ち取られていった。

「て、撤退だ…」

賊の頭目のその叫び声に武はその声がした方向を睨みつける。

「星。しゃがんでいるんだ…」

その声に趙雲はその場で態勢を低くした。

「逃がすと思うな…」

武は自身を中心に薙刀を大きく振りまわした。

遠心力のついたそれを武は逃走しようとする賊に向かって投げ放った。武の手から離れたそれは回転をしながら賊に目掛けて飛んで行った。それは逃走する頭目の胴と頭を切断し、武の手元に戻っていった。

「残るはキサマ達だ…」

頭目が討たれ、残ったのは百人程度の雑兵のみだった。

三百近い盗賊は二人の刃の餌食となり、七百の雑兵は最早戦闘できるような状態ではなく、多くが動けないほどの負傷をしたものや逃亡していたのだった。

それは武が接敵してから三十分程の事であつた…

賊達に既に戦闘意欲はなく、争いは沈静化していた。幽州から警備隊の兵士が賊をひっ捕らえ、連行していくのを武と趙雲は見送った…

「改めて礼を言わせていただきます。武殿…感謝いたします。」

「…大したことはしていない。それに星と共闘できたからこそここまではやく制圧できたんだ。俺こそ礼を言わせてもらう。ありがとう…」

その言葉に二人は笑いあつた。

「それにしても素晴らしい武でしたな…」

「お互い様だろ？」

「是非行つてご教授いただきたい。ぜひとも幽州の城まで…」

「それは勘弁してくれ。今は旅の途中。先を急ぐのでこれで失礼する。」

趙雲は残念そうな表情を浮かべる。

「うーむ。残念…それでは仕方ないですか…ですが、また会いたいですな。」

「ああ、できる事なら敵としては会いたくないけどな…」

「また会えた時はぜひとも行ってお相手願いますぞ。」

武は笑みを浮かべ、

「分かったよ。受けて立つよ。」

「そうそう言い忘れておったよ。」

思い出したように趙雲は武に近づき、耳元で何かを呟いた。

趙雲の言葉に武は顔を真っ赤にする。

「冗談を言うのは止めてくれて…」

「おや？本気にされましたかな？」

趙雲はひょうひょうとした表情で答える。

「まったく…手合わせくらいは次に会った時、幾らでも受けて立つが冗談でもそんな事は言うなよな…」

困ったような表情で武は答える。

「…俺はこの辺で出発するよ。」

「はい。では、旅のご無事をお祈りしておりますぞ。」

「ありがとう…」

武は背を向け、次の地へと歩き出したのだった。

幽州を旅立つた俺は一路、次の地へと向かって歩き出した。

先ほどの事までを思い出し、

「劉備か…あれほどの武將が仕えているという事はやっぱり相当な魅力を持った人なんだろうな…今後の動き次第で勢力を拡大してくれるのは必然だな…」

星だけにしか会わなかったけど、あれほどの人達が仕える人だ。劉備のもとには関羽、張飛を始めとする五虎将…他にも多くの人材がそろってくる…最初から注目していた人物ではあるけど警戒するに

は十分だろう。

私は段々と小さくなっていく武殿の背中を見つめていた。

「…最後の一言。あれは本気だったのだから…」

『今度出会えた時は男と女として…私を…』

あれほどに求めてしまった事を思い出し、私は一人荒野で赤面していたのだった…

十七章 大陸行脚〜昇竜との別れ〜（後書き）

あけましておめでとうございます。今年一発目の投稿となります。

まず今作…悲惨な事に一度間違つて消してしまいました（泣）

一旦メモ帳で書いていたものに加筆修正を加えていつも書いているのですが今回は特に加筆修正を加えていたものですから、元の見ても新しく書き上げたものとは全くの別物…自身でもかなり満足していた出来でした…でもそれが…

とにかく後悔しています…とはいえ何とか形になったところで不完全燃焼ながらも投稿する事に…

かなり拙い文章となっていますが、楽しんで頂けたなら幸いです。

では、今年も多くの読者様に読んでもらえる事を願って執筆をづけていきますので今後もよろしく願います。

十八章 大陸行脚〜陳留〜

劉備の大体の人となりを確認した俺は陳留へ向かった。そこには治世の能臣、乱世の奸雄と謳われた曹操がいる。おそらくこの乱世で十中八九台頭してくる群雄の一人であり、これから孫呉の前に立ちはだかる強大な国となる。

「さて…この世界の曹操はどんな人物か…」

俺が城下に入って暫くして、すりを発見した。俺は横を駆け抜けようとしたすりに足をかけ、取り押さえた。ざわめく民衆を掻き分け、武官と思える銀髪の少女と数名の兵士が駆け付けてきた。

「ご協力、感謝ます！」

少女は一礼し、兵士達がすりに縄を打ち、連行していく。俺は警備兵の対応の速さに驚いた。おそらく孫呉と同様の方法を取っているようだ。

「本当に助かりました。あの者は過去にも何度か繰り返していたのですが逃げ足が速く、後一步のところで取り逃がしていたのです。」

「そうだったんだな。それは手助けできてよかったよ」

俺はその銀髪の女の子に笑いかける。女の子は顔を少し赤らめ、

「っ！と、ところで、お名前を伺っても良いでしょうか！？先程の身のこなしを見る限り、名のある武人の方とお見受けします。」

「…俺は皇武。君は…」

「申し遅れました。私は姓を楽、名を進。字を文謙と言います。」

楽進。魏の五將軍の一人と名を成す勇将。雪蓮達を見てもわかるが、
「やはりギャップがすごいな…」

「ぎゃっぶ…ですか？」

不思議そうに顔を傾げる楽進に

「ああ、すまない。噂に聞いていた大梁義勇軍の楽進がこんな可愛い女の子だったと知って驚いたんだ。」

その言葉に顔を真っ赤にした楽進を落ち着かせようとしていると兵士を連れた一人の男がやってきた。

「帰ってくるのが遅いから様子を見に来ただけ、どうしたんだ？」

その男の服装を見た時、俺は管輅の占いを思い出し、確信した。この男が天の御使いだと……

「その服装は……あなたが天の御使い様ですか？」

「ええと、あなたは……」

「コウブと言います。先ほどはすりを捕えたところをこちらの楽進殿に引き渡したところだったんです。」

流石に旅の装束だから俺が別の世界から来た人間だなんて気付かないだろうけど……念の為に偽名を使っておくか……

「そうだったんですか……申し遅れました。あなたが言われる通り俺が天の御使いと言われている北郷一刀です。」

「やはりそうでしたか……旅のいい土産話ができました。ところで楽進さんが固まったままですけど……大丈夫ですか？」

その言葉に

「呸、大丈夫か？」

「気付きそうにないですね……何か俺に原因があるみたいですし、俺が運びましょう。」

「でも……」

「気にしないでください。せめてものお詫びです。ただ、どこまで搬送をすれば、いいかわからないので案内をお願いします。」

「……分かりました。こっちです。」

俺は北郷一刀に案内されるままに警備兵の詰所の本部までやってきた。

「……ん」

「気がついたみたいだな。」

「ああっ！ってここは？」

私が周りを見渡すとそこは見覚えのある詰め所にある仮眠室だった。

「気がついたみたいだな。風。」

「風、大丈夫やったか？」

「風ちゃん、驚いたの。」

「隊長、それに真桜に沙和…一体…」

何が起きているのかが分からずにいる私を真桜と沙和の二人が笑みを浮かべてこちらを見ている。

「風ちゃん、羨ましいの。」

「せやせや、白昼堂々あんなことを…」

二人が何を言いたいのかわからず、キョトンとした表情で二人の様子を窺う。そんな私をにやにやとした表情で目を併せると

「だって風ちゃん。皇武さんに横抱きに抱えられてここまで運ばれてきたんだもの。」

「しかもさつき目を覚ますまでずっと横にその兄さんが付き添ってくれてたんですよ。」

「付き添ってたって言ってもそんな長い時間じゃ…」

「一刻は結構長い時間と思うの。」

沙和の言葉に一気に目が覚めた。

「申し訳ありません！会って間もない御方にそのような痴態を晒すとは…」

「気にする事はないよ。それよりもここの警備兵は統制がとれているな…驚いたよ。」

「はい、隊長が現体制を作ってくれましたので…」

なるほど…やはり、現代の知識を持っている北郷は脅威の存在だな…

「良い指導者なんですね。北郷さんは…」

俺の言葉に

「いや、そんな事はありませんよ。風や真桜、そして沙和の協力があるからこそ現状が維持できているんですから。」

その言葉に俺は思わず、笑みがこぼれる。

「その三人を見ればわかるよ。いい関係を築けている。」

「そう言っていたけると自信がきます。」

「…歳はそんなに変わらないだろう。敬語は必要ないよ。楽進、あと…」

「李典や。」

「于禁なの？」

「楽進、李典、于禁。君達も俺に対して敬語は必要ない。別に俺は君達の上司でも何でもないからな…」

俺の言葉に楽進が何か返そうとした時だった。

「北郷ー！貴様、着いてこい！」

突然、室内に入ってきた女性に北郷一刀は連れ去られていった。

「…何なんだ…？」

「何だかわからないけど、私達も行ってみるの！」

「風、後、兄さんも行くで！」

「お、おい…」

俺は李典と于禁に両腕を掴まれ、

「二人とも…たく…ここはお前達に任せる！」

「了解しました！」

楽進も李典、于禁を追って詰め所を後にした。

十 八 章 大陸行脚と陳留（後書き）

PV10万アクセス突破！
新年早々有難い限りです！

三話ほど前に反董卓連合のさわりまで行きましたが、反董卓連合本戦に入るまであと三話…

それまで武の大陸行脚と称したエピソードを投入していく事になりますが、存分にお楽しみください。

十九章 大陸行脚く魏武の大剣と霸王く

俺が連れてこられたのは城内にある練武場。しかも何故か目の前にいるのはさつき北郷を引きずっていた女性…しかも剣を構えている。

「状況が掴めないんだが…」

「あら、聞いてなかったのかしら？」

小柄な金髪の女性が説明をしてくれるようだ。

「さつき、凧から聞いた話だとなかなかの使い手という話だったから、腕次第では仕官してもらおうかと思ったのよ。」

「今は放浪の旅の身…仕官する気は更々無いんだが…」

「何だと、華琳様を侮辱するというのか！」

侮辱する気もさらさら無いんだが…

「春蘭。少し抑えなさい。まあ、あなたの武を見せるくらいはいいでしょ？」

俺はため息をつき、

「それで相手が…あなたという訳か…」

俺は中央へ行った。しかし、まあ、考え物だよな…有力者の領土に入るたびに戦闘をしてないか…どうしたものか…

俺や華琳達は驚いていた。いや、むしろ目の前に広がる光景が信じられなかった。構えを取る事なく春蘭と対峙した皇武は難なくその斬撃を紙一重でかわしていく。

「ちょこまかとすばしっこい…」

春蘭が放つ烈昂の気迫は一般人が当てられようものなら、委縮して動けなくなる。しかし、それをあの皇武という男は飄々とかわしていく。

「ちょこまかとすばしっこい…」

この私が繰り出す斬撃は目の前の男にことごとく空を斬らされていた。突然、間合いを取った男は動きを止めた。私は間合いを詰めようとすると、片手をつきだした男から放たれる威圧感に思わず踏みとどまった。

「…おい。少しだけ手加減をしてやる。」

突然、何を言い出すかと思えば、男は持っていた棍で地面に直径三尺強くらいの円を描いた。

「俺をこの円の中から出せたらお前の勝ちでいいぞ？何なら他の面々も加わっても構わないか？」

最早我慢ならなかった。私は剣を振り上げ、渾身の力を込めて猛進した。

夏侯惇は魏軍の中でも最強と名高い武将。このまま続けてもじり貧になるのは目に見えている。それゆえの挑発…思った通りに猛進してくる夏侯惇の攻撃は単調となってきた。

男は片足を軸に円を描くように小円の中で立ち回る。私の繰り出す攻撃のすべては受け流され、柳の枝を相手にしているようだった。「そろそろこちらから攻撃しても構わないか？」

「おのれ…！」

歯噛みし、再び攻撃に入った瞬間だった。刹那、手に衝撃を感じ気付いた時には私の手に七星牙狼はなかった。

夏侯惇が放とうとした上段からの剣撃は振り下ろされようとした瞬間、練武場の壁に突き刺さっていた。

「隙だらけだよ…」

夏侯惇の眉間に棍が突き付けられていた。

「そ、それまで！」

一瞬の事だった。その場にいた誰もが目の前の光景を信じる事が

できなかった。曹操軍に置いて最強の魏武の大剣と謳われた夏侯惇が負けたのだ。時が止まったかのようにその場にいた者達は静止した。

「す、凄い…」

楽進のその一言に止まった時が流れだしたかのようだった。

「…欲しいわね、その力…。あなた、ここに仕官してくれないかしら？」

「さっきも言ったと思うが断る。俺は今は旅の途中だし、それには大切な仲間がいる。ここで君に忠誠を誓う事を選べば、仲間を裏切る事になるからな。」

「貴様！華琳様の誘いを断るというのか！」

「なら夏侯惇。君に問うが、君はその武を認められ、仕官するように誘われた時、喜んでそっちに行くというのか？」

「そんな訳なかるう。私の武は華琳様唯一人だけの物！天地がひっくり返るうとそれは変わらん！」

「なら俺もそう言う事だ。曹操。君にはすまないが、俺は君に仕官する事は出来ない。」

「分かったわ。だけどこれだけは覚えておきなさい。味方として現れたなら私は貴方を歓迎するわ。でも敵として現れたのなら私は容赦しない。いいわね？」

武は曹操の言葉に頷き、

「分かった。こちらとて加減をする気はない。まあ、敵として出会いたいとも思わないけどな。」

笑いかけ、曹操に手を差し伸べる。

「…何？」

「握手だよ。敵として出会いたくはないけど、たぶん敵として出会う時がいつかは来ると思う。俺は敵として出会った時は必ず曹操、君が最大の壁になると思う…だからこそ俺は曹操の健闘を祈る。英雄同士の最高の戦いが見てみたい…そう思うから…」

「そう…なら皇武。私は姓は曹、名は操。字は孟徳。真名は華琳。」

私の真名、あなたに預けます。」

「か、華琳様!?」

「…分かった。なら俺も本当の事を言わなければいけないかな…俺の本当の名はスメラギタケル。コウブと名乗っていたが、文字こそ同じだが、これが俺の本当の名だ。江東の麒麟児。孫伯符に助けられた管輅の占いの片割れだ。その北郷一刀と同様にな…」

「やはりそうだったのね…だったら早く行きなさい。まだ旅の途中なのでしょう?」

「ああ。」

「一つだけ聞かせてもらうわ。もし、私達が孫策達より先に会っていたら…」

「分からないな…どちらと先に会っていたとしても俺は華琳達にとっても理解者でありたいと思う…」

曹操は満足そうに頷くと

「それで十分よ。今後の乱世での楽しみを増やしてくれた事感謝するわ。」

そして、武は曹操達に別れを告げ、陳留の地を立ち去ろうとした。
「皇殿!」

咄嗟に呼ばれる声に武が振り向くと一人の女の子が駆け寄ってきた。息を切らせながら走ってくる女の子を武は待った。

「楽進か…」

「はい…お願いがあります…」

その言葉に武は耳を傾けた。

「私は強くなります…また出会えたその時は…私と手合わせをしてください!」

「…分かった。確かに君はまだ強くなれる。立ち振舞いを見るだけでもそれが見て取れる。楽しみにしているよ。」

「はい!よろしくお願いします!皇殿!」

「…武でいい。」

「はい？」

「他人行儀なのは嫌いなんだ。武と呼んでいいと言っているんだ。」

「…ありがとうございます！ならば、私の真名は凧！私の真名を受け取ってください！」

「ありがたく頂戴するよ。」

武と銀髪の少女、楽進は固く握手を交わし再会を誓った。

二十章 大陸行脚く北平・河北く

次に向かったのは北平だった。そこには劉備と同門の人で北方民族の侵略の阻止をしている公孫讃がいた。南船北馬という言葉があるように大陸を南北で分けて見た時、北方の豪族は匈奴など騎馬に優れた者たちが多く、それに対し、南方の豪族は孫呉を始めとし、水上での戦いを得意とする者が多い。そして、公孫讃の騎馬隊は白馬義従と謂れ、大陸中にその勇名を知らしめていた。もし、敵として立ちふさがったとなれば陸戦に不慣れな呉にとっては驚異の存在となるのは必至だった。

「さて…この世界の公孫讃はどんな人物か…」
北平に入った俺は義勇兵募集の看板を見て、公孫讃の人となりを見る為に公孫讃が居を構える屋敷に向った。

俺を出迎えたのは公孫讃配下の将、嚴綱だった。黄巾の乱では何かと普通に活躍していた公孫讃の領内は取り立てて悪いところもなく、無難に安定した土地だった。面会を求める者に対するチェックもそこそこ厳しく、それなりの警戒態勢がひかれていた。もちろん俺もその例外ではなく、武器を取り上げられた状態で公孫讃の前に引き出された。

「私に面会を求めていると言うのはお前だな？」

「…まあ、そんなところなのかな。」

俺は目の前にいる女の子に答えた。

「黄巾の乱が鎮静化に向かっていている今の情勢が今後どうなるか、そして、公孫讃はこれからどうするつもりなのかを聞いてみたい。」
俺の言葉に公孫讃は考え込み、しばらくしてその口を動かした。

「うむ…当面は国力の増強…と言ったところだな。黄巾の乱が終わったとは言っても人心は安定してないからな…」

確かに公孫讃の言っている事は間違いではない。しかし、間諜を放

って各諸侯の動向を探って置く事は絶対必要な事項だ。でなければ、いざという時に立ちまわれなくなるだろう。

会話を交わした感じでは何でも卒なくこなす万能の人…大守としては優秀なのだろうが、長所も短所もない器用貧乏な人と感じた。普通と言ってしまうは普通…

「今さりげなく失礼な事を思わなかったか？普通とか…」

「…今後も戦いは続いていくだろうけど、乱が終わるたびに一息をつく暇はないよ。確かに内に目を向けることは大事だ。でも、今は戦乱へと世の中は向かっている。常に間諜を放って各諸侯の動きを警戒するべきだ。北の動きには十分に注意した方がいい。袁家の連中は馬鹿ばかりだけど、その分、考えが読めないからな…」

後、どうするかは公孫讃次第だが…それにできる事なら公孫讃と縁が出来ていた方が得だ。純粹な分信用もできる。それに袁家と争いになった時、二方面から攻め込めるのはこれ以上の利はない。

次に向かったのは河北。そこは四代に渡って三公を輩出した袁家がいた。史実における袁紹の評価は高くはないが、それが所持する財力、兵力は今の孫呉にとって驚異だ。もし、総力を挙げて戦闘を仕掛けられた場合、最悪力圧して押し切られてもおかしくない。史実通りなら袁紹と袁術は不仲だったというが、もし、この二勢力が同盟を組んで押しかけてもすれば、たいていの諸侯はひとたまりもないだろう。

「さて…この世界の袁紹はどんな人物か…」

そんな事を考えながら城下に入った時、癪に障るような高笑いが耳に入り、そちらを見ると筋骨逞しい男達が抱える神輿に踏ん反り返るように腰掛ける金髪のドリルヘア…

「…袁紹は只の馬鹿と」

俺はそのまま踵を返し、次の地に向かう事を決めた。

二十一章 大陸行脚く洛陽・上

次に向かったのは洛陽。そこは今、三国志史上最凶最悪の大悪人と言われた董卓がそこにいた。

黄巾の乱が終息した今、史実通りに事が運ぶとなれば、近く反董卓連合が組まれるのは間違いない。

ただこの世界は史実の世界ではない並行世界…先入観を持って当たるのは危険でしかない…

俺はそう思い、董卓を人柄を探る為に洛陽へと向かった。

洛陽に近づくにつれて俺は違和感を感じていた。史実通りに大悪政がひかれていれば、最悪の手段を取ろうかとすら思っていた。しかし、既に洛陽に入っている董卓からそれを連想させるような噂は周辺地域でも一つも聞かなかった。そんな疑問を感じながら俺は洛陽へと入った。

「さて…この世界の董卓はどんな人物か…」

洛陽に入ろうと城門を抜けようとした時だった。俺は門番に止められ、かなり厳重な身体検査を受けさせられた。商人に変装していた俺の荷物と言えば、行商用の装飾と護身用に作った杖…

兵士達が警戒を解くことはなく、城門周辺には物々しい空気が漂っていた。

「…暗殺者への警戒か、密偵の侵入への警戒か…いずれにせよ、董卓に直接会ってみたいな…」

俺は情報を収集する為に城下を廻る事にした。

市場は首都と言う事もあり、地方から多くの人が集まっていた。ざっと見ただけでも北部、南部だけではなく西方からの商人も何組か確認できた。そして、多くの人が集まる市は賑わい活気に満ちて

いた。

市を通り抜けた武は一人の易者に呼び止められた。

「もし。その若いの…」

「…俺の事か？」

「そうじゃ…」

易者は武の顔をのぞき込むようにして言葉を続けた。

「お主…受難の相が出ておるようじゃ…気をつけよ。」

易者は占筮を鳴らし、

「これからもお主の前には幾多の困難が待ち受けていよう。しかし、お主の存在を許さぬ白き者達がある。重々気をつけておけよ…」

重苦しい声で易者は言葉を続けた。

「この後、お主の前に近く黄砂の矛と盾がお主の前に立ちふさがるときが来よう…」

易者は一息つき、言葉を続けた。

「その者達はお主を支え、お主は真紅の王を支える事になるじやろう。できなければお主の身に待つの破滅のみ…それがお主を待ち構える運命…」

武はその言葉を心の中で反芻した。

「御忠告どうも…」

武はその易者に小銭を渡し、

「幾多の困難？上等だな。俺がこれから歩んでいく道が平坦な道だなんて最初から思ってたなんていないさ…」

口元を軽く上げ、笑みを浮かべた。

「谷があるならとび越えてやる。崖があるっていうなら登りきってやる。全部の障害、ぶち抜いて突き進んで…自分で新しい道を切り拓いてやるよ！」

易者は驚いたような表情で武を見た。

「だから…運命なんてものを俺は信じない。誰かに決められた運命

をたどるなんて俺は願い下げだ！」

易者は口元を上げ、

「その意気や良し。幸運を祈っておるよ……」

そう言うと易者は人混みの中に消えていった……

二十二章 大陸行脚く洛陽・中く

市を抜けた俺は腹ごしらえをする為に飲食店が立ち並ぶ通りに行った。飲食店街に入っただけでしばらく行っただけで目に入った店に入る事に決めた。

店内に入っただけで目に入っただけで六人の女の子達がテーブルを囲んでいる光景だった。

そのうちの一人…赤髪の女の子が食事をしている光景は周りの空気を和ませるには十分だった。俺はカウンター席に座り、食事を注文した。

「なあ、亭主。風の噂で聞いたんだが、董卓が圧政を布いているってきたんだけど、本当なのか？」

「貴様！そのような法螺話を信じる気か！」

突如として背後から聞こえた怒声が店内に響く。振り向くと先程の入口付近のテーブルで食事していたグループの一人の女性が立ちあがり、こちらを睨んでいた。

「華雄！止めいって！」

女性を制止しようと一人が抑え込もうと必死になっていた。

「…何か悪い事を言っただけ？」

「根も葉もない噂に振り回されおって！」

「…つまり噂はどこかの誰かが流したでっつちあげという事なんだな？」

「その通りよ。大方、袁紹辺りが月の事を妬んで流した絵空事にすぎないわ！」

「詠ちゃん…」

その会話を聞いていてある事に気付いた。

「君達は董卓軍の人達…しかも董卓に近い人達だな。」

その言葉に軍師風の女の子が驚いていた。

「なんでその事を…」

「おいおい…今、自分で言っただろ？董卓の真名と思える名を言ったのは君だろ？真名を呼ぶって事は近い間柄と推理するのは容易な事さ。」

その言葉に全員が哑然とする。

「それに俺は噂は噂でしかないって事くらいは何となくわかっていたさ。」

不思議そうな表情をする彼女達に俺は言葉を続けた。

「洛陽に入ってからここに来るまでの間、そんな噂は聞いてないし、何よりも皆が生き生きしている事と君達みたいな人達が付き従っているという事を考えれば董卓という人物は噂とはかけ離れた人物だっと思ってたのさ。違ったか？」

「よくそこまで推測できたわね…確かにそうよ。私は董卓軍軍師、賈文和よ。」

「…という事は君が董卓だね？」

武は中の一人の女の子に向かってまさかと思いつつもそう問いかける。その女の子はコクリと頷いた。訪ねておいてこんな事を思うのは失礼な話だろうが、余りのギャップに面食らった。確かにこの世界の英傑たちの多くが史実とは違う可愛い女の子になっているのを武は自覚していた。しかし、今回はその予測の遥かに斜め上をいていた。今後、武がこれほど驚く事はないだろうと思ってしまっただったのだ。

二十二章 大陸行脚〜洛陽・中〜（後書き）

PVアクセス15万、お気に入り登録件数200突破！

ありがとうございます！

感想をくださった読者の方々！執筆の励みとなっています。

読者の方々から面白いと思っただけのような作品を書けるように頑張っていきます。

拙い作品ですが、今後もしろしく願います。

二十三章 大陸行脚く洛陽・下く

董卓。字を仲穎。三国志序盤において官軍の将として登場。何進が暗殺された際に皇帝を保護し、実権を握った人物。その後は思うままに振る舞い大陸を恐怖に陥れる。己が欲望のままに生き、最後は家臣の裏切りに会い、その生涯を閉じる。

贅の限りを尽くしたその肥えた体は糸を挿して火を着ければ火が七日七晩は消える事がないと言う逸話すらある。

それが…これだ…

「こんな可愛らしい女の子だったとは驚きだな…」

俺は思わず董卓の頭を幼子を撫でるようにして撫でる。

「へう」

顔を赤らめ、力が抜けるような声を出した女の子の反則とも言える底知れぬ可愛らしさに俺は思わず目を背けた。

「あんた！月に何してるのよ！」

「す、すまない…余りの事に思わず…」

「思わずって何よ！大体あんたは何者な訳？」

その言葉に俺は名乗っていなかった事を思い出す。

「そう言えば名乗っていなかったな。俺の名前は皇武。よろしくな。」

俺は軽く名乗り、皆もそれに反してくれた。

「私は董卓。字は仲穎。真名は月です。」

直感的なものだったと思う。私はそう思うのと同時に私は真名を預けていた。

「ちょ、ちよつと月！？会って間もない奴に真名を託すなんてどう言うつもり！？」

「自分で言うのもなんだが賈軀の言う通りだと思っぞ…」

「うん。そうかもしれない。けど、皇武さんは優しい人だから…」

「そつかゝ優しい人かゝよっしゃ、月が認めたんや。間違いない。ウチは張遼。字は文遠。真名は霞。よろしゅうな！」

張文遠…知勇兼備にして降将ながらも曹魏において名を成し、孫呉に張来々と恐れられた驍将。

「ならば、私も名乗らねばなるまい。私は華雄。よろしく頼む。」
演義では関羽のかませ馬だったが、史実では良将と名高い勇猛果敢な将。

「…恋は呂布。字は奉先…真名は恋…」

ここでもまた驚かされた。呂布と言えば“人中の呂布、馬中の赤兔”と謳われた三国志史上最強の武人。

それがこんな小柄な女の子だったとは…しかし、この女の子から発せられるものは一線を画していた。

「…いいのか？」

呂布はコクリと頷き、

「恋でいい…」

小動物感が溢れる呂布の動作に思わずほんわかとなる。

「分かった。確かにその真名を預かるよ。恋。」

「れ、恋殿…」

「…ねね。真名。」

「な、何ですとー！？ねねも真名を預けなければいけませんかー」

「…それが信頼」

「うつつ、しょうがないです…姓は陳、名は宮。字は公台！真名は…ねねね！」

「了解。よろしくな。ねね…」

「私だけ真名を預けないのはおかしいじゃない…しょうがないわ。私の真名は詠よ。」

「ああ、よろしく。」

思わぬ出会いに驚いたが、俺が何よりも感じたのは彼女達が純粹だという事…

今まで出会ってきた英傑達もそうだったけど、誰もが自分が心に決めた事に信念を持ち、それに邁進している。それは本当に凄い事だと思う。

そんな彼女達の姿に俺はこの彼女達を守りたいと心に思った。

二十四章 大陸行脚く新たなる仲間・上

董卓達と別れた武は更に西進した。

西へと向かう途中にさしかかった山で武は数人の賊徒に囲まれた。男達は下卑た笑みを浮かべながら武に武器を突き付けた。

「ヘッヘッヘ…おら！有り金全部置いて行きな！さもなきゃ…」

男は武器を舐め、

「俺様の剣で切り裂いてやるよ！」

武は溜息をつく

「相手にするの…面倒なんだけどな…悪い事は言わないから早いところ消えな…」

心底憐れむような眼で賊達にそう告げた。

もちろん男達はそれで尻尾を巻いて引き上げる様な事はなかった。

「今更…謝っても許しはしねえぞ…」

男達は一斉に武器を構えた。

「蒼天に輝く焦熱の陽光…闇夜に注ぐ極寒の月光…その光をもって悪しきを斬り裂け…天照！月読！ここに顕現せよ！」

突如として武の手元に現れた剣は一本は熱気を纏い、もう一方は冷気を纏っていた。

それを見た男達は後ずさる。武はそれを睨みけ、

「生きながらにして地獄を味わうといい…」

それから賊徒は武の宣言通り地獄というものを身をもって体験することになった。武は徹底的な力の差を見せつけ、一人も殺さずに戦闘不能に追い込んでいく。男達が反撃しようとしてもその素早い動きに男達は翻弄され、同士討ちを始めていた。

賊の頭領は啞然とした。自身の周りには地に這いつくばり、うめ

き声を上げる部下達…その眼は恐怖で満ち溢れ、失禁する者すらいたのだった。

「そんなバカな…三百はいたんだぞ…それがこの短時間で…」
「さて…」

武は賊の頭領に一步一步歩み寄っていく。

「残ったのはお前一人…覚悟はできたか？」

殺気を放ちながら歩み寄る武に賊は剣を向けながらも徐々に後ずさりをしていた。

「く、来るな！」

なりふり構わず剣を振り回す頭領。武はその剣を一瞬ではたき落とし、賊の首筋に剣を突き付けた。徐々に力を加えていく。

「…最期だ。言い残す事はあるか？」

武は男に向かって冷淡に言い放つ。剣が少しずつ喉に食い込んでいく感覚に

「た、助けてくれ…今後こんな真似は絶対にしねえから…」

男は泣きそうな声で訴える。刹那、男はひんやりとした感覚を喉元に感じた。

「へっ？」

疑問を感じた男はそれ以上の思考を維持する事は出来なかった。男が最期に感じたのは顔が地面に着く感覚と薄れゆく対峙した武の顔だった。

「…一体お前はこれまでに何度その言葉を聞いてきたんだ？」

武は吐き捨てるように男に言ったその言葉が男の耳に届く事はなかった。

二十五章 大陸行脚〜新たなる仲間・中〜

賊徒を制圧し、先を急ごうとした時、背後から鋭い殺気を感じた武は振りむいた。そこには覆面を被った武将と思われる人いた。武と視線が合った次の瞬間、その一人が抱えていた大剣を振りかざし、突進してきた。

俺は即座に槍を顕現させ、山賊頭に対峙する。

「ったく…どんだけ重い一撃だよ…」

ぼやいていると今度は背後に回り込んでいたもう一人の山賊頭が手にしていた細剣で攻撃を繰り出してくる。俺は後方に跳び退き、斬撃を地面に放ち、礫を二人に目掛けて飛ばして二人を牽制する。それを見た二人は同時に飛び出し、攻撃を開始した。息のあった二人の攻撃に俺はかわすのだけで精一杯だった。

「くっ！」

俺は間合いを取り、二人を視界に入れる。ただ対峙する二人からは何故か違和感を感じていた。何となくだったが、放たれる攻撃はわずかに急所を外れており、試されているような気がしてならなかった。俺はその違和感を解消させるために対峙する将たちに問いかけた。

「あんた達はそれだけの腕を持ちながら何故、民衆を襲っている！？」

その言葉に二人の動きが止まる。

「それだけの力があれば、仕官する道もあるだろう？それにそれだけの力持っている君達なら多くの人を助ける事も出来る筈だ！それなのに何故！？」

俺の問いかけに一人が応えた。

「ならば、貴様に問う！朝廷は苦しむ民衆達に何をしてくれた！税

を貪れるだけ貪り、納める事ができない者達は反抗の意思があるとして殺される。諸侯とてその手先にすぎん。そんな奴らを貴様は信じるというのか！」

言葉と同時に間合いを詰め、攻撃を仕掛けてくる将の攻撃を受け流しながら思い返す。

この人の言う事は事実だ。

役人は好き放題に振る舞い、民衆から高い税金を絞り取り、商人と結託して私腹を肥やす。そんな事が日常茶飯事なのが今の世の中だ。

「…確かにその通りだ。でも、少数とはいえ、諸侯にも信じるに値する人達はある！」

この人たちの言葉を俺は完全に否定する事は出来ない。

「大勢の前で小勢は淘汰されるこの世でそんな少数派が何になる！」目の前にいる将が振るう剣は義憤に満ちていた。

助けたくとも助ける事が出来なかったそんな叫びを耳にしているようだった。

この世界に來た時、俺は最初にそれを思い知らされた。いきなり目の前で繰り広げられていたあの光景は忘れる事は出来ない。目の前にいる将もそれを幾度となく感じてきたとそう直感した。

でも、俺は信じている。短い間とはいえ一緒に過ごした雪蓮達の思いは本物だと感じていた。俺は將に自身の思いの丈を伝える為に構えを取ったのだった。

二十六章 大陸行脚く新たなる仲間・下

武はその言葉を噛みしめる。確かに今の世界は弱者が強者を踏み
にじるそんな世界…武は嫌というほどにその事をこれまで思い知ら
されていた。だからこそ武は対峙する将を見据え、

「世の中が信じられない…そんな事をいうなら…俺を信じる！」

俺は槍をかざし、雄叫びを上げた。

「俺は強者が弱者を踏み躪るような世界は許さない！俺が目指す世
界は誰もが笑いあえるそんな暖かな世界。」

武は一気に間合いを詰め、連続で攻撃を加える。

「そんな世界が実現できるものか！」

その将も負けじと反撃し、思いの丈をぶつけていった。

「だったら俺は戦う！戦って…戦って…戦い抜いて！皆が笑いあえ
る世界が来るまで戦い続けてやる！それを阻もうという奴がいるな
ら、俺は修羅にでも何にでもなつてやる！」

俺は渾身の力を込めてその将が構える大剣に打突を繰り出した。そ
の打突に将は後ろに下がった。刹那、将が構えていた大剣に亀裂が
走った。

「だから、お前も俺と…皆が笑いあえる世界を作る為にその力を貸
せ！」

その叫びに対峙した将の大剣は粉々に砕けた。

「世の中が信じられない…そんな事をいうなら…俺を信じる！」

あいつは槍をかざし、雄叫びを上げた。

「俺は強者が弱者を踏み躪るような世界は許さない！俺が目指す世
界は誰もが笑いあえるそんな暖かな世界。」

あいつの言葉は私の胸に響いた。普通なら信じる事も出来ないよう
な絵空事…だが、なぜかこの言葉を発しているのがあいつだと思っ
となぜか信じる事が出来た。あいつは私との間合いを一気に詰め、

連続で攻撃を加える。

「そんな世界が実現できるものか！」

こいつの言葉を信じたい、そう思いながらも私は思いの丈をぶつけていった。

「だったら俺は戦う！戦って…戦って…戦い抜いて！皆が笑いあえる世界が来るまで戦い続けてやる！それを阻もうという奴がいるなら、俺は修羅にでも何にでもなつてやる！」

あいつの言葉は攻撃の重さとともに私の武器に降り注ぐ。その打突の重さに私は後ろに下がった。刹那、私が構えていた大剣に亀裂が走った。

「だから、お前も俺と…皆が笑いあえる世界を作る為にその力を貸せ！」

その叫びに私の大剣は粉々に砕け散ったのだった…

「…流石という訳か…」

「もういいか？」

その言葉に俺が感じていた違和感は確信へと変わった。

「そう言う事か…あなた達は？茂さんと波才さんですね…」

「どこで気付きましたか？」

「最初に二人がかかってきた時に違和感を感じてた。あれだけ攻める事ができていたなら俺に止めをさす事はいつでもできた筈だった。だから、自分は試されているんだって思ったんだ。後は使っている武器が似ていたから…」

「その通りだ。最も今は名前を黄天吉…」

「私は黄天叉と変えています…」

「御無事で何よりです…」

俺は嬉しかった。二人が何より生きていてくれた事が…以前、剣を交えた時、彼らは根っからの悪人ではないと感じたあの時のままだった。

「／／／たく！そんな嬉しそうな顔をされたら毒気が抜けるった

「らありやしない！」

「フツ…風華。我慢しないでいいのよ？」

「雷紗…誰が我慢しているって…」

「なあ、二人とも俺と共に来てくれないか？確かに俺が言った皆が笑いあえる世界は理想に過ぎない。それを実現させる為にも…今後の乱世を切り抜ける為にも俺には力が必要だ。だから、？茂、波才。二人の力を貸して欲しい。」

その問いに二人は穏やかな表情をし、

「風華だ。」

「私の真名は雷紗。私達の真名をあなたに預けます。」

「じゃあ…」

「はい。私達はあなたと共にこの乱世を歩いていきます。」

「あたし達はあるあなたの剣となり、盾となる。あたし達の力、存分に使ってくれ。」

「ありがとう…でもさ…これだけは言っておくよ…」

俺の言葉に二人は耳を傾ける。

「俺は君たちを俺の剣だとか盾だとは思わない…大切な仲間だから、対等な関係を築いていきたい。そう願うよ。」

俺は手を差し伸べ、二人と握手を交わす。二人が仲間に加わり、その二人に着き従っていた兵士達もそのまま俺に着いてきてくれる事になった。

俺が大陸を巡り、既に二年の時が流れていた。遂に反董卓連合が結成され、諸侯は連合に参加する為に続々と集まろうとしていたのだった…

二十七章 反董卓連合の開戦

孫策達は反董卓連合の諸侯が集まる地に到着した。そんな孫策達を待っていたのは総大将を誰にするのかというどうでもいいような議題だった。最もそれもいつの間にか袁紹がやるという事になり、作戦は追って各軍に伝えるという杜撰なもの…それから各軍に通達された事は

『各軍、華麗に雄々しく…そして優雅に前進せよ。』
これを聞いた周瑜は

「これを作戦と呼ぶのは軍師としての矜持に反する。」

と言わしめた。そして、今回の祀水関攻めの先陣を任されたのは幽州の州牧劉備の軍だった。

「冥琳。今回の戦にはどこの諸侯が参戦しているの？」

「発起人の袁紹とその尻馬に乗った袁術、北平の公孫瓚。陳留の刺史であつたが、黄巾の乱の後、着々と勢力を伸ばした曹操。先の乱では義勇軍を結成し、その力を世間に知らしめ、幽州の州牧にまでなりあがつた劉備。そして、我ら孫呉が今回の連合での主な軍勢になるだろうな。その他は小勢がほとんど…取るに足らない相手と言つたところか…」

周瑜は手元にある情報を見て見解を伝える。

「大なり小なり、多くの諸侯が集決してますから…最もこの戦の後に勢力を伸ばして一年後、残っているかは予測できませんね…」

孫権の見解は間違ひではない。この戦の後、連合が勝つにしろ董卓が勝つにしろ天下が乱れ、群雄割拠の時代を迎えるのは火を見るよりも明らかだ。

「蓮華の言つとおりね…一年後に残る勢力と言えば冥琳はどこだと思ふ？」

孫策の問いに周瑜は顎に手をあて、しばし、考えると、

「この戦の後に残っている者となれば、まずは曹操だな…人材、兵力、資金を十分に用意している。この先、強大な存在となる事は間違いない。」

軍議の席で曹操を見た周瑜は曹操がこの先、孫呉の前に立ちふさがり諸侯の中で最も手強い相手となるだろうと確信していた。

「次に袁紹。強大な資金、兵力を有している事は油断できんな。とはいえ、それを率いる人材…特に総大将が凡人以下だ。あれならば勝手に自滅してくれそうだ。気にする事もない。実際の話、ここに集まった諸侯のうちの大半は一年以内に消えるだろうな。」

よほど先ほどの軍議に根をもっていたのか辛辣な言葉が飛び出てきた。

「あら？袁術ちゃんがいるじゃない？」

周瑜は何を馬鹿げた事を言っているんだという表情で

「袁術は私達が倒すから消えるのは確定だ。」

孫策もそういえばと言った感じで

「ま、当然よね！」

「確かにそんなところでしょうか…」

「あら、私はもう一人気になる子がいるけど？」

その言葉に冥琳を除くすべてが疑問を浮かべる。

「劉備か？」

周瑜も劉備の事は多少は気にかけていたが、今後曹操ほどの大きな障害になるとはあまり考えてはいなかった。

「ええ、義勇軍の将でありながらいつの間にか幽州の州牧まで成り上がり、急速に力を着けてきている。配下には勇将、智将が揃っているって話だしね。天の時、人の和に恵まれている。もっとも周囲を諸侯に囲まれているから、今でこそ目立ちはないけど、確固たる領土を手に入れたら強大な勢力になるのは間違いないわね。」

「うむ。まあ、領土を手に入れるとすれば、涼州か巴蜀といったところか…」

「その辺の領土を手に入れたとなると手強くなりますね…」

周瑜はため息をつき、

「なら、劉備の陣に使いを出しておくわね…」

「あら、ありがとう。さすが冥琳！」

「ええ、それぐらいの貴女の行動を読めなければあなたの軍師なんて勤まらないわよ。」

「フフツ、感謝しているわよ。冥琳！」

「はいはい。だったら、もう少し王としての自覚を持ってくれると嬉しいんだけど？」

「あら、藪蛇だったわね…」

その場は笑いに包まれ、孫呉の面々は戦闘の準備に取り掛かった。

二十八章 反董卓連合の開戦

孫策は孫権、周瑜を引き連れ、劉備の陣に向かった。

陣地に入った三人を制止したのは劉備配下の将、関羽であつた。

「待たれよ！お前達は何者だ？何用あつて我らの陣地に立ち入る？」
敵意むき出しで三人を迎えた関羽を周瑜が一喝する。

「控えよ！こちらは我らが孫呉の盟主、孫策様とその妹君、孫権様だ。陣を訪れる事は先触れの使者から伝わっているはず…通されい！」

それを聞いた関羽は

「貴女が江東の麒麟児か…」

感嘆の声を上げる。

「何それ？何の話？」

孫策は何の話か見当もつかず、首を傾げる。

「姉様の異名です。最近、巷では姉様の事はそのように噂しているのです。御存じではなかったですか？」

孫権はそんな孫策を呆れる様な表情で

「全然。私ってそんな風に呼ばれていたんだ。」

「貴女の勇名は大陸中に響いていますからね。」

「で、そういうあなたの名は？」

「わが名は関羽。字は雲長。」

「貴女が関羽ちゃんね…ねえ、劉備ちゃんはいる？ちよつと話があるから呼んで欲しいんだけど…」

「…呼ぶ事は構いませんが、話の内容を先にお伺いしましょう。」
にこやかな笑顔の裏に警戒心をたたえる関羽という少女が孫策を覗き込む。

「…下がれ下郎！」

にこやかな孫策の表情は一変し、優しかった目は戦中のそれになった。

「何っ！」

その孫策の物言いに関羽は怒りを顕わにする。そんな関羽の様子を気に留める事もなく孫策は続けた。

「我は江東の虎が建国せし孫呉の王！その王が貴様の主人に面会を求めているのだ。家臣であるならば、貴様は主人に取り次ぐのが礼儀というもの。それすらも劉備の将は分からぬというのか！」

孫策の気迫に押されながらも関羽は

「クッ、我らには主を守るという義務がある！たとえ、王といえど不信の物を主、桃香様の下に通すなど家臣としてあるまじき行為！それでもまかり通るといふなら、この間雲長が相手となろう！」

関羽は手にしていた青龍堰月刀を構える。

「ほお、大言壮語だな、関羽。面白い、ならば少し遊んでやろう。」
孫策も剣を抜き構える。両者武器を構え、一触即発の状況であった。その二人に割って入ったのは一人の女の子だった。

「待つて、待つて！愛紗ちゃん！どうしたの！？」

「と、桃香様…」

「気にする事無いのだ。お姉ちゃん。愛紗と孫策のお姉ちゃんがちよつと喧嘩しただけなのだ。二人とも本気の喧嘩じゃないから、心配いらないのだ。」

横で孫策と関羽のやり取りを見ていた少女が劉備に答える。孫策もその言葉に驚き、

「あら、私が本気じゃないってどうして分かるのかしら？」

「だって、構えた武器から殺気を感じなかったのだ。だから鈴々は安心して見ていたのだ。」

「ふーん。すごいわね…」ところで、貴女は？」

少女はニコリと笑顔を浮かべ、

「鈴々は張飛なのだ。お姉ちゃんもすごいのだ。…愛紗、もう武器を納めて下がっているのだ。」

関羽は渋々と武器を納め下がった。

「すみません…愛紗ちゃんがご迷惑をおかけしました…」

孫策は軽く笑顔を浮かべ

「別に気にしてないわ。どうせ関羽も本気じゃなかったみたいだし。それで、あなたが劉備？」

「え？そ、そうですけど…あなたは？」

「孫策。字は伯符。呉の王よ。ま、呉王という立場だけど今は領土もなく、家臣も少ないけどね…」

「貴女が孫策さんだったんですかあ…」

劉備は驚いたような表情でまじまじと孫策の顔を見つめる。

「それで、ご用の方は…？」

「挨拶とちよつとした提案にね…」

「提案ですか？」

「ええ、あなた達が先鋒にさせられたと聞いてね。私達と手を組まないかと思ってね。」

「えっ!？」

その突然の孫策からの提案に劉備は驚きを隠せずにいたのだった。

二十九章 反董卓連合と開戦

「劉備軍と私達の軍が協力して敵にあたれば、兵の数も二倍になるし、今よりは勝てる見込みも高くなるんじゃない？」

孫策の提案は寡兵の劉備軍にとつては有難い提案であつた。

「それはそうですね……」

劉備は孫策に疑いの眼差しを向ける。

「でも……孫策さんが私達に協力して何の得があるんですか？少なくとも私には孫策さんが協力してくれる理由が思い当たりません。」

劉備がそう考えるのは当然の話であつた。孫呉は孫子の流れをくむ江東の名家。それに対し、劉備は中山靖王の流れをくむ血筋とはいへ、それを知る者は少ない。その上、黄巾の乱に乗じて軍を立ち上げた義勇軍から成りあがつて幽州の州牧になつたに過ぎない。そんな彼らに協力を申し出てくるのが信じる事が出来ないといえは当然だつた。

「ふむ……まあ、いいわ。だつたら、貴女を信じて、胸襟を開いて見せましょう。知っているかどうか分からないけど、今、私達は呉の土地を奪われ、袁術の客将という立場に甘んじている。もちろんこれから今の立場に甘んじているつもりはない。必ず母様が広げた領土を回復して見せる。その為にも内の味方だけでなく、外の味方が必要なの。分かるかしら……」

「だから私達に協力してくれるんですか？でも、味方につけるといふ事だつたら曹操さん達の方が味方につける方が利点があるんじゃないですか？」

「そうね。でも、あなた達にもそれは言えるわよね。これからの割拠の時代を生き抜く為に、どこかに味方が必要でしょう？その時に曹操を味方につけるのはいいでしょうけど、曹操を味方につけよう

とあなた達は考えるかしら？敵に回そうとは考えなくても、忪から信じようとはしないはず……」

「確かにその通りです。曹操さんは強いから味方になってくれるなら心強いです……」

劉備の言葉に続けるように後ろに控えていた女の子が言葉を続けた。「ですが、曹操さんの歩む霸道は桃香様が願う天下とは相容れないもの……いずれ敵対するのは明らかですけど……」

それは劉備軍の軍師諸葛亮であつた。その言葉を聞いて孫策は口端を上げた。

「そうでしょうね。私達の願う天下も曹操が願う天下とは違うもの……」

孫策は劉備と諸葛亮を一瞥すると言葉を続けた。

「で、私があなたに誘いを掛けたのは貴女が義理堅そうで、信用できそうだったからって言うのが一番の理由。後は貴方達の勢力の規模が今の私達とほぼ一緒だからよ。」

その言葉を聞いた劉備は少し考える素振りをする

「……なるほど。分かりました。でも、孫策さんが信用できるか、今の場で判断できません。だから今回の戦闘でそれを見極めさせてもらいます。」

孫策を真正面から見据えた。

「……分かったわ。なら、見せてあげましょう。」

孫策は大きくうなずき、劉備達に背を向ける。

「孫呉の戦いぶり、その目に焼き付けなさい。それを見て貴女が信頼に足らないと思うならそれはそれでいい。いつか戦場で剣を交えるだけよ。」

「分かりました。孫策さんの信義、この目で確かめさせてもらいます。」

「なら、一刻後に出立という事でいいわね？」

「はい。」

孫策は劉備に宣言すると踵を返し、劉備軍の陣を後にしたのだった。

三十章 反董卓連合へ開戦4

劉備との対面を終えた孫策達は出陣を控え混雑する連合軍の陣地を抜ける。

「なかなかやるわね…彼女。」

「確かにそうですね…」

「うむ、こちらの言う事を全て疑ってかかっているようであったしな。が、あれくらいでなければ、この乱世で生き残る事は出来まい。」

「そうね。ただ、見た目に反して結構したたかだったのは、ちょっと意外だったわね。」

「それは私も感じました…」

見た目は確かに穏やかでのんびりとした印象を与える劉備であったが、実際に話すとそうではない。韜晦しているのか、なかなか真意を見せようとせず、強かな印象を三人は受けていた。

「でも、ああいう型の人間は一度信頼できると感じさせる事ができたら、心強い味方になってくれるわ。」

「ならば、まずは初戦の祀水関で信用を得なければならぬな。」

「しかし、祀水関に籠る敵は八万から十万。私達と劉備達の兵を併せたとしてもそれには遥かに足りません。」

「そうね。それに加えて祀水関という難攻不落の砦…」

「兵力差に加えて難攻不落の砦…打つ手なしか…考えられる手とすれば、砦に籠る兵士を何とか砦の外におびき寄せて、野戦に持ち込むしかないか…」

祀水関をどう攻略するか二人は考え込んだ。

「そんなこと必要ないわよ。火の玉になって総勢で押し掛ければ…」
「そんなところに孫策のトンでもない発言…」

「戯言はお止めください！」

孫権はそれを諫めるも

「蓮華様。気にする必要はありません。とりあえず情報の整理から行いましょう。」

周瑜は華麗にスルーした。

「無視するなんて酷いわよ。冥琳。」

周瑜は呆れた表情を隠しもせず、

「酷い発言なのだから仕方ないな…で、敵の情報だが、祀水関に籠る兵は八万から十万。率いる将は驍将、張遼と猛将、華雄の二人。」

将の名前を聞いた孫策が思いついたように

「華雄って、確か以前母様に手ひどくやられた武将でしょ…大したことないんじゃない？」

「さてな。華雄の実力は知らんが、あの時は配下の暴走が原因での敗走。あの時の戦いを基準にしてはいかんだろう…」

「それに噂で華雄は猛将にして良将とも言われています。警戒しておくにこした事は無いでしょう…」

「蓮華様の言うとおりです。」

「でも、華雄ってそんなに優秀な武将だったかしら？」

「こと武に関してはな…だから、今回は華雄を挑発して軽く一当てして撤退するのが上策か…」

「それでしたら、華雄も乗ってくるでしょうか…」

「ただし、その場合、問題となるのが、罵倒する者の質…そして、あからさまに我々がしゃしゃり出ては袁術に勘ぐられる可能性があるから不味い…」

「それでは本当に打つ手なしなの？冥琳。」

「だからこそ劉備に会ったのですよ。蓮華様。」

「じゃあ、劉備にその策を伝えるのね？」

「ええ。劉備軍ならうまくやれるでしょう。関羽、張飛といった将がいるのだからな。」

「その場合、劉備軍だけが危険な状態にならないの？」

「初めはそうでしょうが、苦戦したとなれば我らには先鋒を助けるという大義名分ができるからな……」

「それなら袁術ちゃんの目もごまかせる、か。じゃあ、それで行きましょう。」

「はい。では私も準備に取り掛かります。」

三人は急ぎ、自身の隊へ戻り戦闘の準備に取り掛かるのだった。

三十一章 反董卓連合と祀水関 其の一、開戦

一刻後、連合軍に総大将の命令から戦意を削ぎ落とすような命令が発せられた。

「さあ、皆さん！雄々しく！勇ましく！華麗に進軍いたしますわよ！」

その号令にいろいろな表情がする者がいたが、連合軍は祀水関に進路を向け、進軍を開始した。

峡谷を幾つか抜け、左右を絶壁に囲まれた広い道に連合軍は到着した。

その絶壁の間の道を遮るように建設された巨大な城壁、それが祀水関である。

絶壁の間にある為、包囲される事もなく防備に必要なのは正面のみ。加えて、部隊を展開するには通りは狭く、一気呵成に押し寄せ、る事も不可能である。大陸中にある関の中でも最高級の防御力を誇る関と言っても過言ではない。

周瑜から作戦を聞いた劉備軍は華雄への挑発を開始した。しかし、敵方も優秀な将である。挑発に怒り、突出しようとする華雄を張遼がそれを必死で喰い止めていた。挑発して引きずり出す場合、短期決戦に持ち込まねばならない。時間が経てば経つほどに相手は冷静になっていくからだ。しかも遠征軍である連合軍に長期戦になって勝てる要素はほとんど無くなる。孫策は袁術に先鋒の劉備と協力するという許可を取り付け、出陣するのだった。

孫策は孫権、甘寧と共に兵を率いて、劉備軍と合流した。

「苦戦しているみたいね……」

「あ、孫策さん。敵さんが思ったよりも冷静で……このまま硬直した

状態が続くと不味いかもしれませんね…」

「そうね。だから、私達が来たのよ。」

「でも、袁術さんは…？」

「大丈夫よ。袁術ちゃんの許可は取ってあるから。ま、腹立つけどね…」

孫策の不機嫌な表情に劉備は苦笑する。

「とりあえず、華雄の挑発は私が受け持つわ。劉備は釣れた魚の調理をお願い。敵が釣れた後は劉備が張遼を…私達が華雄を。それを基本方針としましょう…」

「了解しました。私達だけで張遼さんと華雄さんを相手にするよりはるかにましですから…むしろ感謝しています。」

「そつ…ありがとう。」

「では、ご武運を…」

孫策は祀水関に寄り

「祀水関守将、華雄に告ぐ！わが母、孫堅に敗れ、その無様な姿を我らに晒した貴様が再び我らの前に立ちはだかるなど片腹痛い。その頸を貰うのに何の苦労があるという。そのような者の頸など取ったところで何の価値もなし！命は取らずにいてやろう。おとなしく兵を退き、祀水関を明け渡すがいい。」

流石の華雄も我慢の限界であった。張遼が止めるのも聞かずに自身の部隊を率いて突撃を敢行した。

挑発に乗った華雄は脇目も振らずに孫策軍に突撃した。

それに対して孫策軍は無造作に軍を後退させる。孫策軍の行動に華雄は逆上し、更に追撃をかける

「孫策がどれ程の者という！我等の誇りを傷付けた事を身を以って償わせてくれる！」

華雄の激に兵士も応え、雄叫びを上げる。その突進力は計り知れず撤退しながらそれをいなすのは至難であった。

孫策軍の最後尾に華雄軍が喰らい付こうとした時だった。華雄軍の左から多数の矢が降り注いだ。あらかじめ左に伏せていた周泰と甘寧の部隊が頃合いを見計らい、一斉に矢を射かけたのだった。その射撃を合図に孫策の大号令が戦場に響く。

「孫呉の精兵達よ！今こそ反撃の時！これより反転し、甘寧隊、周泰隊と呼応し敵を討つ！皆修羅となり、戦場を駆け抜けよ！」

孫呉の将兵達の指揮は最高潮に達し、追撃してくる華雄軍に逆撃を仕掛けたのだった。

華雄を援護しようと疾駆する張遼軍の右横つ腹に劉備軍が横撃を加えた。

「クッ！怯むんやないで！このまま突っ切って華雄と合流するんや」
関羽や張飛の猛撃をかわしながら張遼軍は疾駆した。その速さは神速の一言に尽きた。瞬く間に前進する華雄軍との距離を縮めて行った。

「速い！私達も遅れるな。急ぎ前進し、張遼と華雄を打ち、祀水関を制圧するぞ！」

関羽、張飛、趙雲の三隊は追撃を開始した。

前方は劉備、孫策。左方からは甘寧、周泰。右方からは関羽、張飛、趙雲。三方からの攻撃に張遼と華雄は徐々に押し込まれていき、進退窮まってきた。

孫策、劉備軍の包囲が完了し、勝利を確信した。しかし、それと同時に連合軍はたった一人の武人に震えあがり、恐怖する事となった。その武人とは天下にその名を轟かす飛將軍、呂布の襲来であった。

三十二章 反董卓連合と祀水関 其の二、鬼神襲来

突如として孫呉、劉備両軍の背後に現れた呂布はたった一人で連合軍に突撃する。方天画戟を振るう度に兵士が吹き飛び、兵士達はその呂布の強さに恐怖した。瞬く間に大地を地に染めていく、その姿は無人の野を駆けまわる鬼神のようであった。

呂布。字を奉先。演義において最強の名を欲しいがままにした英傑。

方天画戟を振るえば、その間合いに生きた者はおらず、弓を射れば酔っついても寸分違わず的を射たという伝説が残っているほどに凄まじい人物であった。この世界においても単身で黄巾軍三万を単独で壊滅させたという。孫呉、劉備両軍に襲いかかったのはそんな英傑だったのだ。

関羽と張飛がそれを抑えようと立ち向かうも呂布には通用していなかった。

「…お前達弱い。」

「鈴々は強いのだ！これでも同じことが言えるのだ！」

鈴々は渾身の力を込め、蛇矛を振るう。呂布はそれを軽くよけ、

「…攻撃が直線的…」

「なら、これならどうだ！」

関羽の青龍堰月刀が風を切り、呂布に襲いかかる。呂布は方天画戟を片手で一振りするだけでそれを弾き返す。

「…攻撃が軽い…」

「クッ！強い…」

「なら、これならどうだ！」

突如として現れた趙雲の神速の突きが呂布に襲いかかる。呂布はそれも軽く受け流し、

「…早いだけで、怖くない…お前達弱い…」

「だったらこれはどうかしら？」

孫策の連撃が呂布に襲いかかる。呂布は少し驚いた表情を見せるが、すぐにそれも回避し、四人に対峙した。

「…少しはまし…でも、まだ足りない…少し本気を出すから四人同時に来い…」

そう言った途端に呂布から放たれる殺気は鬼気迫るものがあり、地面に方天画戟を叩きつけた。その衝撃は衝撃波となり、四人に襲いかかった。思わぬ事に四人は吹き飛ばされる。

「でたらめなのだ！」

「次元が違いすぎる…」

「全く本物の鬼に出会えるとは…」

「冗談じゃないわよ…幾らなんでもこれはきついわよ…」

関羽。青龍堰月刀を手にし、その義侠振りからも敵味方関係なく畏怖されていた。

張飛。蛇矛を手にし、関羽に武においてははるかに上を行くといわしめた。

趙雲。優れた判断力を持ち、劉備軍の先陣を常に取りつてきた猛将。孫策。幾多の戦場を駆け抜け、そのカリスマ性から江東の小霸王と謳われた。

史実において、この四人は何れも評価は高く、武においては上位にいる者たちだった。

とはいえ、呂布を抑えながら、挟撃を受け、混乱した部隊を指揮しながら戦場を切り抜ける事は困難なものだった。

そんな中、呂布の追撃が孫策達に襲いかかる。吹き飛ばされ、体勢を崩していた孫策はその一撃を受ける事もかわす事も出来なかった。

その時だった。風を切り裂く音と両者を割るように一本の槍が両

者の間に突き刺さり、一人の青年が舞い降りてきたのだった…

三十三章 反董卓連合と祀水関 其の三、帰還

孫策達が呂布との戦鬪を繰り広げている時、高台からそれを見下ろしている謎の部隊があつた。

「…どうされますか？」

軍師と思われる者が問いかける。

「ご託はいい…とりあえずは突撃、それでいいだろう。」

武将と思える者がそれに返す。

「何を馬鹿な事を言っている…それに私は主に聞いているのだ…」
呆れたような声でそれに応える。そんな二人に中央にいた将が答える。

「これがこの部隊の初陣だ…気合いを入れていこう。」

「そうですね。では、主、皆に檄を飛ばしてください。」

その将は頷き、背後に控える兵に向き直った。

将が兵士達の前に立つとざわついていた空気が一瞬で静まり返った。将は一息つく

「我等の目の前にあるのは平和な世を蹂躪せんとする悪逆の徒。

その者は仙道の身でありながら人の世に介入し漢帝、そして、我が友、董卓を傀儡とし、今回の乱を引き起こした…

お前達にも親、兄弟、恋人、それぞれに護りたい者達がいるだろう。

我等が戦うは大切な者達を護る為！

その思いを刃に込め、我等“皇龍”はこれより修羅道に入る！総員、拔刀！突撃せよ！」

その鼓舞に兵士達の士気は高まり、一斉に拔刀すると突撃を開始したのだった。

少し遅れて進退窮まる劉、孫両軍の左方から立ち込める砂塵。そ

れは一時、呉を離れていた武だった。

武は集めてきた千五百の部隊を率いて突撃した部隊を前方の援護に行かせ、武は後方の呂布に向かった。

呂布の目の前に降り立った武は地に突き刺さった槍に手を掛けると勢いよく振り回し、呂布と対峙する。呂布も間合いを取り、初めて構えを取り、武と対峙する。

「…久しぶりだな…恋。」

その言葉に呂布はコクリと頷く。

「…武も久しぶり…」

「再会を懐かしんでいたところだが、彼女達に追撃はさせない。霞と華雄を連れてここは退け。」

その言葉に呂布は頷き、背を向けて立ち去ろうとした。

「待て！」

呂布を制止しようとする関羽の喉元に武の槍が突き付けられる。

「言ったはずだ。追撃はさせないと…」

武の放つ気迫に関羽は押し黙る。

「おや、確か武殿でしたか…息災のようですね。」

「星か…星こそ元氣そうで何よりだ。」

「おのれ、貴様！何故！奴を逃がす！奴を逃がせば、連合軍に被害が大きくなるだけではないか！」

その言葉に

「この戦の真意も知らずに踊らされているだけのお前が何を言う？」明らかに蔑むような眼で関羽を見据える武は更に言葉を続ける。

「袁紹が発した今回の檄文。それは権力争いに後れを取った袁紹が結果的に権力を握る事となった董卓を妬んで発せられた物…董卓達の人となりを知れば、それは偽りだったと容易に知れる。だから俺は董卓を守る。」

「という事は私達の敵に回るといふの？」

孫策は武に剣を突き付け、問いただす。

「敵に回るつもりは全くないよ。何せ、董卓を助ける為には雪蓮や冥琳達の協力は絶対に必要だからさ……」

その言葉に孫策はため息をつき、剣を納めた。

「全く…その優しいところは全く変わってないわね…お帰りなさい。武。」

「ああ、ただいま…雪蓮…」

武は孫策と向き合い、久方ぶりの言葉をかわす。

「さあ、そろそろ戦闘の方も終了するはずだ…それに冥琳達に話もある。俺達も自分達の部隊に合流しよう…」

武の言うとおり、祀水関での戦闘は沈静化しつつあった。前線にいた甘寧、周泰の部隊。そして、劉備軍は軍の再編成を開始した。

三十四章 反董卓連合と祀水関その四、終結

「一体、前線で何が起きている！情報を急ぎ集めよ！」

情報が錯綜する連合軍陣営は騒然としていた。

「冥琳、姉様は無事なの？」

「蓮華様…私にも真紅の呂旗が立ってからの状況が掴めておらず、現状がどうなっているのか…雪蓮の事だから大丈夫とは思いますが…」

その時であつた。

「報告！ただいま雪蓮様がお戻りになりました！」

二人はその報告を聞くや否や陣を飛び出した。

「雪蓮。無事なの！？怪我は！？」

「雪蓮姉さま！御無事ですか！？なんであなたはそんな無茶ばかり…」

掴みかかるようにして孫策に詰め寄る二人に満面の笑みを浮かべ、

「大丈夫よ。ほとんど掠り傷だから。それより…二人とも嬉しい報告よ…」

孫策の言葉に二人は顔を上げる。

「ただいま…蓮華、冥琳。遅くなってごめん…」

二人の目の前には武が立っていた。

「武…お帰りなさい。よく戻ってきてくれたわね。」

「……」

「どうしたのよ。蓮華？」

孫策は何の反応も見せない孫権の顔を覗き込む。その途端、孫権は武に飛び込んでいった。武はそれを受け止めるも勢いまでは殺すことはできずに後ろに倒れ込む。

「この馬鹿…！なんで勝手にいなくなるのよ！」

「…ごめんな。蓮華。」

武は蓮華の顔を起こし目元をに浮かぶ涙を拭う。武は顔を上げた孫権に微笑みかけ

「ただいま…蓮華…」

その言葉に孫権も笑みを溢し、

「…お帰りなさい。武…」

と、応える。

「…盛り上がっているところ悪いけど蓮華。いちゃつくのは後にしてくれるかしら。」

孫策の得意げな笑みに孫権は赤面して飛び退くように武から離れる。

「武。話してくれるな…？」

「はい。俺はこの二年間各地を旅して、諸侯と出会ってきました…」

武の話は今後の対策を取る為にも重要なものばかりだった。袁紹、劉備、そして孫呉同様に天の御使いを擁する曹操、今回標的にされている董卓の本当の姿。更には現在の大陸に暗躍する白装束の集団。「当面の敵と言えるのは袁術だけです。時期が来れば、劉備、曹操とも刃を交わらせなければいけない時が来ると思います。更にこの曹操や劉備よりも脅威と言えるのが大陸に暗躍する白装束の集団…しかも正体が掴めない上に五胡ともつながりがありそうなこの組織の行動が読めません…ただ分かっているのはこいつらが敵視しているのはこの世界に本来は存在しないはずの俺や曹操軍の北郷一刀だという事です…」

「そうか…我らも気をつけなければならないな…」

私は考えがえこんだ。

「ところで武。一つ聞きたいんだけど、武が連れてきたあの部隊は何？」

孫策の疑問は尤もだ。一人で旅だったはずの武が連れてきた謎の部隊。気にならない方がどうかしている。

「彼らは…」

「武。部隊の再編が終わったぞ。」

「いつでも出撃できます。」

武が説明をしようとした時、二人の将が武の背後に現れた。

「丁度良かった…彼女達は今、雪蓮が言った部隊を指揮する将の二人。自己紹介を…」

「お初にお目にかかります…私は黄天叉。真名を風華と言います。」

「…名は黄天吉。真名は雷紗…」

二人の放つ気迫は孫策にも匹敵するほどのものだった。

「彼女達とは旅をしている時に出会った。俺の思いに賛同して力を貸してくれる事になったんだ。あの兵士達はもともと彼女達に着き従っていた兵士たちなんだ。」

「それが我らに力を貸してくれるというのか？」

「ああ。でも、彼らは独立の部隊として扱ってほしい。って言うのも余りに癖の強い連中達だから、俺、風華、雷紗の言う事しか聞かないんだ…」

苦笑を洩らす武に孫策は

「いいわ。最大限に力を発揮できるならそれに越したことはないわ。それに武が私達を裏切るなんてしないし、その武が信頼する彼女達も同じことでしょ？」

その言葉に二人の将は片膝を付き、

「ハッ、我ら二人、武にこの命を預けております。故にその武が命を賭けて守ろうとする者の為に我らは剣となり、盾となる所存！」

「

「うん、ありがと。あなた達の真名、確かに預かるわ。私は孫伯符。真名は雪蓮よ。よろしくね。」

それに続き、周瑜、孫権と全員が真名を交換したのだった。

そして、孫呉は兵を纏めて、虎牢関へとその進路を向けたのだった。

三十五章 反董卓連合、虎牢関其の一、暗躍する者

連合軍は進軍し、虎牢関へと詰めかけた。虎牢関に着くまでの間に俺は大陸各地に斥候を放ち、祀水関での孫呉の活躍を喧伝させた。今後の割拠の時代でより多くの人材を集める為である。

今度の虎牢関の先鋒は袁紹軍と曹操軍。袁紹軍の焦りを曹操は割を食ったような状態であった。それに対し、俺達孫呉と劉備軍は後曲に配置された。袁術軍は兵の損失を恐れてか、軍の最後尾で輜重部隊の護衛を祀水関、虎牢関と受け持っていた。袁術のみが無傷のままこの戦いを終えるというのは俺達にとって良い結果とはいえない。寧ろこの戦いで袁術には大きく兵力を消耗してもらう必要がある。

「兵を損失していない袁術軍…我々にとっては決していい状況とはいえないな…」

冥琳の考えと皆一緒だった。そうなのである。袁術の兵の消耗…兵の質では孫呉の方がはるかに上をいつているが、いまだに兵力差のある孫呉と袁術。それを少しでも近づける為にも今度の戦いでは何としても袁術軍には大きな痛手を与えなければならぬのだ。

「連合軍の最後尾で高みの見物を決め込んでいる袁術軍に被害を与える方法か…」

「巧く袁紹を操って今の状況を作っているからな…最前線に引きずり出すのは難しいか…」

俺は冥琳と現状を打開する策を模索していた。

「私達が動いて直接攻撃を仕掛けるといふ訳にはいきませんしね…」
確かに孫呉に皇龍が合流した事は連合軍には知られてはいない。まあ、一応の同盟関係にある劉備軍や勘の良い華琳達なら場察知していてもおかしくはないだろうが…

「流石にね…存在が知られてないとはいえあからさまに動いたら不味い。」

そうなのだ。いざ、決戦という時に存在が不明な皇龍は切り札になり得る部隊という意味でもこの場で存在の詳細は知らせる訳にはいかない。

「とはいえ、流石に恋や霞達に協力してもらうのは気が引けるしな…」

俺の言葉に冥琳が疑問を漏らす。

「武。今言った者達は誰の事なのだ？」

「そういえば言ってなかったかな…俺は旅をしている間、諸侯の領土を回っていたんだ。曹操、劉備、袁紹、公孫瓚…そして、董卓。霞と恋はその董卓の配下の武将…霞は驍将と言われた張遼…そして、恋は飛將軍、呂布。」

一瞬、場が騒然とする。

「多分、頼めば霞達は乗ってくれると思う。もちろんその対価として向こうが提示する条件をのむ必要があると思う。」

「条件？」

「ああ。それを話す前に今回の連合について少し話さないといけない。実はこの連合の発起人は確かに袁紹なんだが、袁紹を誘導し、今回の乱を起こさせた奴がいる。」

俺は雪蓮達の協力を得る為に今知り得る情報を伝える事を決意した。

孫策達は不思議そうな顔をした。

「どういう事なの？武？」

武は一息つくとゆっくりと語りだした。

「そいつの名は于吉。仲間の左慈と共に仙道の身でありながら、俺達の世界に介入し、世界を意のままにしようとしている。そして、この世界における予定外の因子である魏の天の御使い本郷一刀とそれに係わった者達を消そうと画策しているんだ。」

「于吉に左慈…か…」

「で、その仙道とこの戦いに何の関係があるっていうの？」

「この于吉達は今回の戦いだけでなく、先の黄巾の乱よりも前から朝廷に暗躍していた。皇帝を傀儡にする事で無能さを顕わにさせ、黄巾の乱を誘発。そして宦官の十常侍をのさばらせ、更にこの世を乱れさせた。それを見かねた大將軍の何進が袁紹らを率いて、十常侍を誅殺した。」

于吉達はここでは終わらなかった。更に世を乱れさせる為に董卓を操り、皇帝を保護させたんだ。

後は知つての通り今回のこの反董卓連合が組まれたという事なんだ。俺は董卓。月と会話を交わし、于吉達の企みを知った。だから俺はこの戦いで月を助けて、于吉達の野望を打ち砕く。それで、霞達の出す条件というのは董卓の救出する事。」

武の眼は決意に満ちていた。そんな武を見た孫策は「分かったわ。董卓を助けましょう。」

そう言つて得意満面の笑みを浮かべていたのだった。

三十六章 反董卓連合と虎牢関其二

「雪蓮！？どういっつもりなの！？」

周瑜は孫策の返答に驚愕した。

「だって、もともと今回の戦は袁紹の嫉妬から始まった。こんな茶番に私達が付き会う必要はないわ。だったら、董卓軍を私達の麾下に加えた方が理となるわ。もちろん董卓達は一旦、私達に討ち取られて死んだ事にしてもらうわ。」

孫策の言葉に周瑜は考え込む。

「…分かったわ。だが、武。董卓達の協力を得たとしてどうやって袁術を巻き込むつもりだ？」

周瑜の疑問はもつともだ。携帯電話などの通信手段がないこの時代でアドリブで連携を取るなど絶対に不可能である。

「…賭けと言った方がいいけど、虎牢関前で戦っているところに乱入して、負けたふりをして撤退する。董卓軍を袁術軍の陣地まで誘導して襲撃させる。袁術軍に大打撃を与えた後で俺達が董卓軍の将を討ち取り保護する。で、その間に別動隊を編成し、洛陽に向かい、月と董卓軍の軍師、賈軀を保護する。作戦の大筋はこんな感じかな…」

偶然に偶然が重ならなければ、この状況を作り出すことはできないだろう。

「しかし、虎牢関前で抗戦中の袁紹軍と曹操軍の動きが予測できない上に連携を取るとはいえ袁術の陣地まで距離がかなりある…」

「確かにね…だから、虎牢関前の戦闘に乱入して董卓軍を引き込むのは雪蓮達全員で取りかかってほしい。もつともその前に俺が単身で斬り込んで恋、霞、華雄、詠の四人に接触して、連携を取ってもらう。その後で俺は別働隊の明命、雷紗、風華の三人と合流して洛陽に向かう。」

「大丈夫なの。四人で…？」

「その前に単騎でこの戦場を駆け抜けるなんて…」

武は心配そうな表情を浮かべる孫権に

「大丈夫だよ。俺も前と比べ物にならないくらいに強くなってるし、それは雪蓮がわかってるだろうしね。董卓の顔を知っているのは連合軍では俺と袁紹、後は曹操くらいだろうから…潜伏、諜報に關しては明命の右に出る者はいない。雷紗、風華の武も一線を画している。少数精鋭という事で行くなら連合に顔の知られていない俺達が行くのが一番だからさ。」

武の言葉に孫権も頷き、渋々ながらも納得したようだ。

「ふむ、では作戦を纏めよう。我らはまず全軍で虎牢関前の戦闘に乱入。交戦に入った時、武、明命、雷紗、風華の四人は先行して洛陽に…その後、敗退する振りをして袁術の陣まで董卓軍を引き込む。その後は董卓軍の将を討ち取り保護する。それでいいな？」

「ええ、分かったわ。」

「はい。」

「ハッ！」

「了解です。」

「「承知！」」

「皆よろしく頼む…」

「気にしないの！大体、武は私達の仲間なのよ。遠慮してどうするの？」

「…ありがとう。」

俺は雪蓮の心遣いに心底感謝した。

「さて！みんな！出陣の準備よ！」

雪蓮の掛け声に皆が立ちあがり、準備に取り掛かる為に陣幕から出ていった。

「武…」

陣幕から出ていこうとする俺を雪蓮が呼びとめた。

「どうしたんだ？雪蓮？」

雪蓮は俺の肩に手を置き、そつと耳打ちした。

「いい？無茶はしてはだめよ？貴方が洛陽に行くって言ったのはさつき言っていた仙道がそこにいる可能性があるから…そいつらと戦う事になれば、私達に被害が出る。そう考えての選抜ね？」

雪蓮の問いに俺は応える事は出来なかった。

「武、雷紗、風華は確かに強い。そこに明命を加えたのはもし、仙道達の襲撃を受けた時に撤退を任す為…？違ったかしら？」

武はため息をつき、両手を挙げた。

「降参だよ…全くその通りだ。多分奴らと接触したら、逃げるのは正直難しいと思う。だからこそその選抜だよ…最も俺は無理をする気はないし、死ぬつもりもない。必ず戻ってくるさ…」

その目に諦めの色は無く、

「ええ、当然よ。必ず私達の所に戻ってくる事。これがあなたに陣を許す絶対条件よ。」

「了解だ。必ず戻ってくる。」

武はそう宣言し、陣幕を後にしたのだった。

三十六章 反董卓連合、虎牢関其の二丁（後書き）

まだまだ続きます。 反董卓連合…

次回は趙雲の単騎駆、当陽橋の張飛ならぬ武の無双モード炸裂（爆）
むしろ超えるつもりで行きます
お楽しみに！

三十七章 反董卓連合、虎牢関其三、各軍の思惑

祀水関を抜いた連合軍は一気呵成に虎牢関を攻め落とそうと主張する袁紹の指揮で大軍で詰め寄せた。

しかし、虎牢関も祀水関同様に高さのある城壁で幅の狭い山間の道を阻んでいた。ただ今回違うのは董卓軍配下の武将、“驍将”張遼、“勇将”華雄、“飛將軍”呂布、更に後曲には董卓軍の軍師賈軀が虎牢関前に陣取っていた。

袁紹軍は虎牢関では先鋒として虎牢関前に詰めていた。前回の虎牢関で孫策、劉備軍に武勲を持って行かれたのがよほど悔しかったらしい。そんな袁紹軍を迎えたのは虎牢関の前に布陣する董卓軍であつた。

「せっかく砦という有利な条件を棄てて、この私の連合軍に勝負を挑もうなんて甚だ可笑しいですわ!」

「きつとアレですよ! 姫! アタイ達に恐れをなして自棄になつてんじゃないですか?」

「そんな馬鹿なことあるわけ…」

なにか必ず策があると考える顔良は当然のことだ。しかし、ここは袁紹軍である。

「やはり、そうなのですわ! 董卓軍など恐れる必要すらありませんわ。さあ、皆さん! 一思いに董卓などやっっておしまいなさい!」

「やっぱりそうなるの、相手はあの呂布なんだよ!」

変わつて曹操軍。流石にこの陣営は冷静であつた。

「華琳様! 敵は虎牢関正面に布陣しております! 旗印は漆黒の華、紺碧の張、紫紺の賈、真紅の呂旗です!」

「どういふつもりだ? せっかく虎牢関という堅牢な砦があるというのに…」

「フーン…面白いわね…」

「華琳様にはあちらの意図が分かるのですか？」

「ええ、春蘭、あなたにも分かるんじゃないかしら？」

「は、はあ…多分なのですが一当てして混戦となった後で撤退する腹と思うのですが…」

「そんな馬鹿な事…」

「いいえ、桂花。春蘭の考えで間違いないわ。私の軍師であるというなら敵の思考だけでなく、魂をも読めるようになりなさい。」

「魂、ですか…」

曹操は余裕の笑みで苟？に笑いかけるのだった。

「伝令！董卓軍は虎牢関正面に布陣。どうやら野戦に持ち込むつもりようです！」

駆け込んできた伝令の報告に諸葛良とホウ統が考え込む。

「難攻不落の虎牢関を棄てて、野戦に持ち込むという事は普通ならしないはずです。」

「それはそうだな…」

「あちらの将がこの状況で考える事は一転突破を行い、連合軍の総大将である袁紹の首を取るか、退却するかです…」

「退却？それなら余計に席に籠り、戦う方が退却しやすいのではないか？」

「あながちそうとは言えません…籠城すれば、関の防御力に頼る事になり、退却の機会を逃すことになりますから…」

「つまり、外なら逃げたい時に簡単に逃げられるって事なのだ！」

「奴らは動きを止めよったな。こっちの出方で動きを変えるつもりやな…どうするよ、恋？」

「…ちんきゅう、指示…」

「はいなのです！私達の行動に敵は疑念に包まれているでしょう！ならば、呂布殿は、その隙を突いて一気呵成に敵本陣を突き、その

混乱に乗じて撤退するのが至上の策！」

「かゝそんなにお簡単に問屋が卸すもんか？先陣におるのは総大将の袁紹とはいえ、横には曹操だっておるんやで？」

「呂布殿がいるのです！何の問題ありません！」

「いや、恋だつて人間やで……」

「霞……恋、頑張る……でも武がいたから少しきついかも……」

「……はっ？」「……」

「さっきの戦いで武に会った……多分あの赤い所にいる……」

呂布は孫呉の陣地を指指し応える。

「堪らん……連合軍だけでもどうしようかというのに……武が敵に回ったのか……」

「おのれ……あれだけ董卓殿に世話になったというのに……」

「そうです！恩知らずも良いところです！」

呂布は大きく首を横に振り、

「武は逃がしてくれた……それに月を守るって言ってた……だから、裏切って何かない……」

「どういうこつちゃ？」

「分からない……多分赤いのも攻めてくる……その中に武はいるだから、直接聞く……」

「そうやな……それが一番や。よっしゃ！そうときまつたら出陣や！恋、一発兵達に気合い入れたり！」

キョトンとする呂布に張遼は

「……そうやったな、まあ、ええわ……ウチがやったるわ！ええか！敵は連合軍とは言つても名ばかりの烏合の衆や！そんな奴らがウチらに勝てる道理はあらへん！訓練のつもりで派手に一発ぶちかましたれ！気合入れい！あいつらに痛撃入れたってから、堂々退却してすんで！ええな！」

「応！」

その董卓軍の雄叫びは大地を揺るがすほどの物だった。劣勢の中これだけの指揮を上げるといふ事は董卓軍の結束の強さを示している

に他ならなかった。

三十八章 反董卓連合、虎牢関其の四、密約

董卓軍の兵士達の雄叫びは大地を揺るがした。

その氣勢は先陣を取っている袁紹軍の兵士達を脅かすには十分なものだ。董卓軍は連合軍に比べ寡兵、多勢を率いる連合軍はその事で安心していたのだ。これほどの軍気を董卓軍が発するなど思ってもいなかったのだ。

「な、何事ですよ!？」

「伝令！敵の攻撃が始まりました。ご指示を！」

「え、ええ！」

「もつ…私達は突撃してくる董卓軍を迎撃します！出陣します！」

「あいよ！」

顔良と文醜は兵を率いて出陣を開始したのだ。

武が予想した通り、十分もたたないうちに虎牢関前に入り乱れ混戦状態になっていた。

「頃合いだな…武、行こうか？」

「ああ、雪蓮…」

「ええ、これよりわが軍は虎牢関前の戦闘に介入する！皆恐れる事はない！突き進め！」

「応！」

孫策軍は遂に行動を開始したのだ。

「流石に手強いわね…」

猫耳フードをかぶった曹操軍の軍師荀？が声を漏らす。

「それはそうだ…董卓軍の中でも精鋭中の精鋭が相手となっているのだから…」

「そう…だからこそ、英雄との戦は面白いのよ。」

曹操の言葉に続けるように一人の兵が陣幕に入り

「伝令、後方に待機していた孫策軍が動ききました！」

「何ですって!？」

荀?は突然の事に驚きを隠せなかった。

「まさか、この乱戦に介入するつもりか！」

それは魏武の大剣の手綱を取っていた夏侯淵も同じだった。

「そんなことしたらますます戦場が混乱するじゃない!何考えてるの!あの江東のじゃじゃ馬は！」

そんな二人を尻目に曹操は口端を上げ、ほくそ笑む。

「…そういう事…」

「華琳様？」

「桂花。孫策にとって一番邪魔なのは？」

「それは…そう言う事ですな。」

「なるほど…」

頭の上にはなマークを飛ばす夏侯惇に

「姉者、後で教えてやる。とりあえず孫策が一当てしてきた後で、我らは撤退するぞ。」

「う、うむ…」

袁紹軍は焦りに焦っていた。数で勝っている連合軍が寡兵の董卓軍に圧されているのだ。それもそのはずだ。董卓軍は董卓を守るという思いで一致団結して戦いに臨んでいる。それに対し連合軍はあくまで袁紹の妬みが元で発起したものだった。兵士にまでそれは生き届くものではない。そんな軍勢が明確な思いの下に戦いを挑む軍勢に例え多勢であろうと勝てる要素などはないだろう。

「伝令、後方に待機していた孫策軍が突出し、こちらに向かっていきます！」

「ええ、それじゃますます混戦状態になっちゃうよ」

「何を考えてますの!あの江東のは！」

将の焦りは兵士達に伝染し、さらに戦況を悪化させるのだった。

突撃を敢行した孫策軍は董卓軍の頭と交戦に入った。そして先頭を切って突撃した皇龍を迎えたのは祀水関でその勇を振るっていた華雄と張遼であった。

「武！貴様！どういっつもりだ！」

「華雄、落ち着き！まずは…話を聞かんとあかな」

「華雄と霞か…久しぶりだな。」

武はその両手に光を湛えて槍を出し、言葉と同時に放たれた張遼の神速の一撃を受け止める。

「まあ、確かに華雄っちの言う通りや…武の真意は？」

「…月を守る。だから霞達にも協力してほしい…」

「どういっつもりだ！」

華雄の豪撃を片手で受け止め、武は言葉を続ける。

「そのままの意味だ。ただ、一つ頼みがあるんだ…」

「何やその頼みって言うのは…？」

「俺が参軍している孫呉はこれから負けたふりをして撤退する。それを霞達で追撃して連合軍の奥にある袁術軍を急襲してほしいんだ。今の孫呉にとって袁術が無傷のまま終わるのは好況とはいえないからさ。」

その間に俺は洛陽に入り、月を救出する。その事は雪蓮…孫策達も既に納得済みだ。袁術軍を霞達が急襲した後、孫策軍は反転し、霞達を討ち取ったという形をとり、保護するから霞達の身柄の確保も確実だ。」

「その孫策は信頼できるんか？」

「俺にとっては雪蓮は命の恩人だ。俺の命を賭けても構いはしない。」

「…よっしゃ！分かった！その誘いに乗ったるわ。」

「おい、霞！」

「ありがとう。霞…」

「そんなわり月っち達を絶対に助ける事。それがウチらが協力する絶対条件や。華雄も納得しい、それに武なんやから信頼できるやろ」

？」

「当然だ…俺は孫呉の人達を支えたい。そして、月を守りたいと思ったからこそこの表舞台に立ったんだ。」

「うゝむ…」

華雄は釈然としないのか唸っていた。

「ええい、考えても埒が明かん！要は袁術を討てばいいんだろ！私も協力してやる！」

「ありがとう…二人とも…」

武は二人に礼を言い、背を向けた。

「恋にも協力を請う。二人は袁術の部隊に向かって突撃を仕掛けてくれ。頼む…」

そう二人に告げ武は駆け出した。

三十九章 反董卓連合と虎牢関其の五、覚醒

前線では想定外の事が起きていた。後方待機を命じられていたはずの劉備軍が前線に出てきていたのだった。

劉備軍は孫呉と連携を取っていたとはいえ、祀水関では決定的な手柄を上げる事は出来てなかった。その為に前線にまで出てきていたのだった。

「何としても呂布を討つぞ！」

「おうなのだ！」

「ふむ……しかし、どう考えてもこちらが悪役のようにしか聞こえんのは何故だろうな、愛紗？」

「ええい、この状況でそんな事を言うな！」

関羽、張飛、趙雲の三人は混戦の中、呂布と遭遇した。祀水関で呂布と既に刃を交えた三人は呂布の人智を超えた武力は経験済みであった。

三人に対峙した呂布に焦りという感情は見えなかった。三人はいずれも一騎当千の将と言っても過言ではないくらいの実力を持っていた。しかし、呂布はその武力をもつても後ろに押し下げることすらできなかった。三人の攻撃を物ともせず、その手にした方天画戟を振るう。満身創痍となった三人の前に武が現れる。武は方天画戟を受け止め、

「星、関羽達を連れて下がれ！」

「……かたじけない。ほれ、愛紗、鈴々ここは下がるぞ。」

「ウム……」

「武殿、我らは今回は退きますが、今度はその企みに一枚噛ませてくだされよ？」

「……分かった。」

武は呂布に向き直り、

「さてと…恋。一勝負行こうか？」

武は槍を構え、呂布に向かいあう。

「ん…恋もしたい…」

呂布も方天画戟を構え、相対する。

吹きすさぶ風のように二人の剣撃が響きあう。

「はああああ！」

「…」

武が連続突きを放てば、呂布はそれをいなし横薙ぎを返す。武器と武器がぶつかり合えば衝撃波が巻き起こり、誰も近づけない。一進一退の攻防に周りの者達は息をのむ。しかし、傍から見れば互角と言えるこの勝負もそうではなかった。武はじりじりと後退させられていた。そんな武に呂布の痛撃の横薙ぎが襲いかかる。武も槍でそれを受けるがその勢いのまま吹き飛ばされる。

「武…何か隠してる…」

「隠してるって言われてもね…」

最悪の状態だ。ここまで連合兵に囲まれていると恋に協力を求めようとすれば、恋だけじゃなく雪蓮達にも危険が及ぶ可能性がある…そう思考する俺の目の前に恋が一気に迫ってくる。

「くっ！」

このままだと何もできなくなってしまう…方法があるとなれば、恋をこの場で捕縛する事…だが、恋を捕縛するなんて事は今の俺の技量では不可能だ…力がほしい…恋を…皆を守る為の力が…その時だった。

—その思い、力に変えてみよ！

かつてこの世界に聞いた時に聞いた声が頭に響く。

刹那、視界は真っ白で音も何もない世界へと変転する。目の前には一人の青年が立っていた。

「このように会話するのは初めてか…わが名は神農。」

「三皇の一人、神農が何の用だ…？」

神農は軽く笑うと

「さっき言ったではないかその思いを力に変えてみよと…我はそなたに“思念顕現”ともうひとつの力“天舞”を与えた筈…その力、今のお前なら間違えることなく発動できよう…その為の鍵を渡しに来たのだ。」

「鍵…？」

「そうだ…皇武…今一度問う。そなたがこの世界で何を望む事は何だ？」

「俺は…平穏な世界を望む！例えこの身を修羅道に落とそうと誰もが笑って暮らせる世界を構築して見せる！」

「うむ！その覚悟、確かに受け取った。ならば、心に強く力を願い、ただ念じよ、強くありたいと。さすれば道は開かれる！」

そう言った神農は目の前から薄れていき、音と光が蘇ってきた。

目の前に迫る呂布の動きがスロー再生のように武には見えていた。それに驚いたのは呂布であった。突然、武の動きが速くなったのだ。

「…やっぱり武、隠してた…」

本能的なところで呂布は武の中に潜在する物を感じ取っていたのだろつ。

「…今の俺なら恋。君を止められる！」

そう告げ、武は呂布に向かって突撃したのだった。

四 十章 反董卓連合、虎牢関其の六、洛陽へ

呂布は武の武力の上昇に戸惑いを隠せなかった。

「クツ…武、強くなった…」

武の連撃の威力は先ほどとは比べ物にならない程に上がっており、呂布はじりじりと後退させられていた。とはいえ、呂布も天下無双と言われた武將、状況を一転させようと渾身の一撃を放つ。しかし、この一撃が呂布の放った最後の一撃になった。武はその一撃に合わせて間合いを詰める。そして、武器を巻き込むようにそれを捕える。「カハッ！」

呂布は肺から空気が漏れるような声と共にその場に倒れ込んだ。武は呂布を鏑迫り合いをするようにして近づく。

「…恋、大丈夫か…？まあ、攻撃した俺がこんな事を言うのもおかしいけど…」

「うん…痛いけど、武、少し手加減してくれた…だから大丈夫…」

「月を助ける為に俺はこれから洛陽に向かう…だから恋は部隊を率いて袁術の陣に攻め込んでほしい。その後は孫呉の部隊と交戦し、わざと負けて保護されてくれ。」

「…分かった…武も必ず月を助ける…」

「もちろんだ。任せてくれ…」

その言葉を最後に呂布は渾身の力を込めて武を吹き飛ばされた。

吹き飛ばされた武は兵士達が入り乱れる中へと吹き飛ばされたのだ。それを確認した呂布は袁紹、袁術の陣地に目を向けると単身で走り出した。

そして、武も兵士達に紛れるようにして洛陽へと向かったのだ。た。

洛陽に向かう武達の前に現れたのは呂布たちの後詰として進軍していた賈軀軍だった。

「貴方は…武!？」

「久しぶりだな…賈軀…」

その言葉に賈軀は剣を武に突きつける。

「貴方が何でそこにいるの…!」

「俺は孫呉の将だ…だから、今、君の前で立っている…そう言えば納得してくれる?」

戸惑う事無く賈軀は武に剣を振り下ろす。

「ふざけるんじゃないわよ! どれだけ月が助けを求めていたと思うの! 今、月がどんな状況なのか知っててそんな事を言っているの!」捲し立てるように放たれるその声は叫び声に近かった。武は振り下ろされる剣に十手を絡めせると叩き折った。

「確かにその通りだろうな…俺に董卓に会う資格も董卓と賈軀の真名を口にする事も許されないのかもしれない…でも、俺は董卓を助きたい、いや絶対に助けて見せる!…だから、賈軀にも俺の策に乗ってほしい…」

賈軀は正面から武の顔を見据える。そこにはかつて、洛陽の飯店で出会ったところと変わらない決意に満ちた表情の武がいた。

「…分かったわ。武、あんたを信じる…但し、絶対に月は助けなさいね…それで僕は何をすればいいの…」

「ああ、賈軀には袁術の陣まで突撃を敢行してほしい。その後、孫呉軍が急襲してくるからそれに捕縛されてくれれば、大丈夫だ。すまないけど頼む…賈軀…」

「詠でいいわよ…」

「…分かった。ありがとう。詠…」

武は賈軀にそう告げ、背を向け洛陽へと再び歩を進めた。

「…月の傍にいる男には気をつけなさい…あの男は危険よ…月を人質に取られて、僕達には何もできなかった…お願い…武、月を…月を助けて!」

「当然だ!」

武達は一気に洛陽まで駆け出した。

四 十 章 反董卓連合、虎牢関其の六、洛陽へ（後書き）

先日は申し訳ありません

どうやら間違えて前話をコピーして投稿していたようです…

改めて四十章の投稿をさせていただきます

あまりにも呆気なく決着がついてしまった対呂布戦ですが、あくまでも武の覚醒の切っ掛けとして扱った為…

むしろ今後の展開で絡む相手もかなりチートかかっていますので今後
も無双モードは全開で行くつもりです。

拙い作品ですが今後ともよろしく願います。

四十一章 反董卓連合と虎牢関其の七

孫策軍の意図をいち早く察知した曹操軍は孫策軍の進撃に合わせ道を開き、孫策軍の後退に合わせるとともに後退を開始した。しかも袁紹軍の撤退が遅れた事で殿を袁紹軍に押しつけるという副産物まで付いてきた。

「曹操がこつちの思惑に乗ってくれたおかげでかなり楽ができたわね。」

「うむ。しかし、曹操が今後の我らの前に立ちはだかるのは明白になったようだな……」

「手強い相手となるでしょうね……」

「いいじゃない。手強くて。手応えのない相手なんてつまらなくてしょうがないわ。」

そうばやく、孫策に二人はため息をつく。

「まあ、いい。袁術軍まであと少しだ。しっかりと董卓軍を引っ張っていくぞ！」

周瑜の掛け声に兵士達は進軍速度を上げたのだった。

所変わって袁術が待機している陣。そこで袁術は暢気に構えていた。

「七乃、蜂蜜水はまだかやー？」

「はいはい。今作ってもらってますから、少し待ってくださいね。」

「うむ！待ってやるのじゃ！なんせ、今の妾はご機嫌さんじゃからな！」

無い胸突き出して袁術は偉そうにふんぞり返る。

「袁術様！蜂蜜水をお持ちしました！」

兵士が持つてきたそれを袁術は手に取り、喉に流し込む。

「ぷふあゝ。世は妾の思い通り。その上、今日の蜂蜜水は最上の味……妾はもう皇帝になったようじゃ！」

どこからその自信がわいてくるのか袁術はただ自分だけが描く未来像に思いを馳せていた。

「流石は美羽様！大陸一の幸せ者！」

そして、張勳はそんな君主を諫めるどころか煽りたてている。最も諫める事が出来る様な重臣であるならこんな我儘娘にはならなかっただろうが……

「もつと褒めるのじゃ！七乃！」

その時、袁術の天幕に一人の兵士が駆け込んできた。

「報告！」

「何じゃ！人がせつかく輝かしい未来をに思いを馳せておったというに。無粋にも程があるぞ！」

「そ、それどころではございません。前方の砂塵の招待が先程ようやく掴めました！」

「孫策が戦勝報告に来ておるのだろうか？」

「違います！袁紹、曹操、孫策の軍が敗走し、それを追撃してくる華雄、呂布、張遼の軍勢がこちらに押し寄せてきています！」

束の間の静寂が袁術の陣幕に広がった。

「……な、何じゃと……!?」

袁術の悲痛な叫びが天幕に響く。

「だったら、早く撤退の準備を……」

張勳も焦りは隠せず兵士に指示を出そうとするが、

「無理です！もう間に合いません！」

「い、急ぎ迎撃するのじゃ……！」

兵士の答えに袁術はただ叫ぶしかなかったのだ……

遠目にそれを孫策達は眺めていた。

「ふふっ、慌ててる慌ててる！」

「作戦は成功か。曹操が巧く乗ってくれた上に、袁紹が良い壁になつてくれたからな。」

「しかし、曹操には大きな借りができてしまったのは……」

「気にする事はないわ。これくらいの借りならすぐに返せるでしょ。」

「

「ふっ、そうだな。それよりも、今は武との約定どおり、呂布、華雄、張遼の身柄を確保しよう。」

「そうね……武が私達が当たった時に最善なのは冥琳が張遼、思春が華雄、蓮華が呂布と言つてたから、それで行きましよう……」

若干不満そうな孫策が言葉を綴る。どうやら呂布にあたる事ができず不満のようだった。最も武は

『味方になれば手合わせくらいいつでもできるんだからそれで我慢してくれよ』

と、諭され渋々これを飲んだのだった。

「わ、私が呂布ですか!？」

「ええ、そう言うと思つて武から言伝を預かつているわよ。“呂布は純粹だ。だから、蓮華が本当にこの世界の未来を憂いて、平和な世を築きたいつて思いをぶつけたら、必ず呂布は応えてくれる。だから、蓮華の気持ちを正面から伝えてあげてくれ。”だそうよ。」

孫権はその言葉に不安そうな顔をしながらも頷いた。

武がこうしたのは訳があつた。張遼に孫策を当てたのは張遼だったから、素直に縛に着いてくれるから無駄な争いは起こらない。仮に華雄に孫策を当てた場合、華雄が逆上するのは目に見えている。それで武力を考えた時に適任なのは甘寧だった。呂布に孫権を当てたのは孫策が言つたとおりだった。呂布は純粹、だから孫権の真摯な思いをぶつけければ必ず応えてくれる事を武は知っていた。

董卓軍の面々が袁術軍に襲撃を加えてから、少しして孫策軍がそれに左右から包み込むように横撃をかける。その為、曹操、劉備、袁紹の軍は孫策軍が壁になっていた為に直接戦闘に介入できなかった。最も袁紹軍は殿となり、董卓軍の追撃を残さずに受け止めた為に戦闘に介入どころではなかったのだ。

「どういうつもりなのかな、孫策さんは？」

「全くです。これでは我らが援護に入る事も出来ないではないですか！」

「うつつ、味方の兵が邪魔なのだ」

「くつ、まさかこういう状態になるとはね……」

「チツ、これでは進軍できないか！」

「ええい、道を開けろ！」

曹操、劉備は齒噛みして孫策軍の戦闘を見守るしかなかったのだ。た。

四十二章 反董卓連合、虎牢関其の八、仙道との対峙

所変わって洛陽。

先行した武、周泰、黄天叉、黄天吉の四人は洛陽の宮殿の玉座の間に到着した。玉座の間に確かに董卓はいた。しかし、董卓の目に生氣はなく、虚ろな表情でただ玉座に座らされている状態だった。董卓の下に駆け寄ろうと武が一步踏み出すがその場で踏みとどまった。

「玉座の後ろにいるのは分かっている…出て来い…」

怒気を孕んだ武の声に

「フウ…やれやれ…左慈の所為ですよ…そんなに殺気を垂れ流しにしているから…」

「ふん、知った事か！その奴が何物かは知らないが、俺達の邪魔をしようというなら容赦する気はない。」

その言葉にとびかかろうとする黄天吉を武が制止する。

「そうだな…戦わずに済むならそれでいい…俺は戦いを望まない。

しかし、彼女は…董卓はこちらに渡してもらおうぞ！」

言葉と同時に放たれる気迫に二人は一瞬怯んだ。

信じられなかった。ただの人がこれほどの氣勢を発するとは…

たったその一瞬でその男は俺達の目の前に姿を現し、傀儡としていた董卓に駆け寄っていた。それにはつとした俺達はその男に向かって攻撃を同時に仕掛けたのだった。

「ふざけた真似を！」

「やりますよ！左慈！」

それを合図に俺の蹴撃と于吉の双剣で仕掛けた。

左慈と于吉の攻撃は確実に武を捉えた筈だった。しかし、その攻撃は二人の少女によって防がれた。

「武に手は出させるものか！」

「武さんの護ろうとするものを傷付けようとするあなたを許す訳にはいきません！」

于吉の剣撃を黄天吉が、左慈の襲撃を黄天叉が防ぐ。

「二人ともしばらくの間、奴らを頼む…明命。こっちに来てくれ！」

「は、はい！」

「行かせはしませんよ！」

「貴様の相手は私だと言っただろう！」

黄天吉の大剣“鬼斬戦迅刀”を振り下ろす。その一撃の威力は凄まじく、衝撃波となつて于吉に襲いかかる。その衝撃波を回避した左慈が武に迫ろうとすれば、

「私を忘れてもらつては困りますね…」

黄天叉が投擲した盾“金剛玄武甲”が左慈を急襲する。

「クツ！」

左慈と于吉は二人から間合いを取りそれぞれに対峙するのだった。

「ええい！邪魔をするな！」

「邪魔はさせません！武殿の下へ行きたいというなら私を倒してからにきなさい！」

左慈は焦っていた。あちらの決定打がこちらに入っていないとはいえ、左慈の攻撃も黄天叉の鉄壁の防御の前に一撃として決まっていなかったのだ。接近すれば盾に防がれ、少し間合いを取れば、細身の剣の連続攻撃が左慈に襲いかかる。

「ええい、うつとおしいんだよ！」

「何とでも言いなさい！私の役目は貴方をここで喰い止める事。例え、何があるうとこより先に罷り通る事は許しません！」

黄天叉が発する気迫に左慈は思わず後ずさるのだった。

黄天吉が駆使する鬼斬戦迅刀は常人が扱えるようなサイズの剣ではないそれを軽々と振り回す。

そもそも本来このサイズの剣は打ち落とすか、薙払うかのいずれかの二択…しかし、あくまでそれは普通の人が扱えばの話である。

黄天吉の細腕からは想像できない程の力で扱われるそれは薙払った後の返しも早い為、攻防一体の武器となっている。その上、床に叩き付ければ、衝撃波を発生。受け止めれば、その衝撃で腕が持つて行かれそうになる程の威力の為、実質的に受け止める事は出来なかった。それを二本の剣で相手にするなど話にならなかった。

「ハアアアア！」

黄天吉の攻撃を受け止める事は出来ず、于吉も例外ではなく吹き飛ばされる。

「グッ…！やりますね…では、これならどうです！」

于吉は何やら呪文を唱え、

「妖炎縛鎖！」

その声と同時に青き炎に包まれた鎖で黄天吉の動きが封じられる。

「…何がしたいというのだ？」

「仙術の一つ縛道術、妖炎縛鎖…妖炎に包まれた鎖で貴女を拘束し無力化しましょう…」

黄天吉はそれを何事もなかったかのように

「この程度の炎で…私を止められると思うな！」

黄天吉は両腕を胸の前で交差させ、一気にそれを開く。それと同時に黄天吉にまとわりつく、炎と鎖は吹き飛んだ。

余りの事に于吉は啞然とした。仙術の中の縛道術でも下位にあたるとはいえ、その拘束力は人が受ければ身動き一つ取れないような力を持っている。それを力技で解除するなど信じる事ができなかったのだった。

四十三章 反董卓連合の其の九、解呪

雷紗と風華が左慈と于吉を相手にしている間に俺は月の状態を確認する。呼吸、脈にこそ異常はなかったが、自分の意思どおりに動く事ができないようだった。

「…道術による放心状態か…不味いな…」

過度のショックなどで人が放心する事は実際にある事だ。それは人が自身を危険から回避する為に本能的に意識を手放すという事。しかし、他者の手により放心状態に強制的にされる事は危険を伴う。特に董卓の場合、意識だけは生かされている状態なのだ。つまり、賈軀達を戦場に赴かせたのが自分という事を董卓はしっかりと自覚しているのだ。人が心に反する行動しか取れなくなつたとすれば、心が壊れてしまうだろう。特に董卓のような優しい心の持ち主なら尚更の事だ。

「…明命、俺はこれから月の…董卓の解呪に入る…周辺の警戒を頼む。」

「は、はい！」

周泰は柄に手を当て周辺の警戒に入り、武は董卓にかけられた術を解除する為に董卓を横にする。董卓の額と腹部に手をかざし武は術式に入った。

私は深い闇に沈んでいた…

突然、現れた二人の道士。彼らによって私は意識を手放していた。私に気が付いた時、目の前に広がっていたのは諸侯の軍勢に向かつていく詠ちゃん達の部隊…

止めてっ！と叫びたかった。

でも声は出ず、ただ私はそれを見ている事しかできなかった…

ただ、大切な人たちが傷ついて行くのを見守る事ができない私の

弱さを呪った…

私はこのまま目を覚まさない方がいい…

そう心に思い、意識を手放そうとしたその時だった。

『行くな！月！君には君の帰りを待っている人達がいるんだぞ！』

どこかで聞いた声だった。その声はまた言葉を綴る。

『君が目になっている世界は確かに現実だ！でも、それは君の事を思っているからこそその行為だ！月はそれを信じる事ができないのか！』

でも、私が弱かった所為で皆が傷ついた…

『確かにそうかもしれない…でも、それは弱さじゃない！君の優しさだ！君の優しさに…そんな人柄に惹かれたから、君を守る為に皆、必死になって戦っているんだぞ！』

でも！

『…月…君はまた皆と会いたくはないのか…皆と一緒に笑いあつて過ごしたくはないのか？』

…

『俺は…俺はまた月の笑顔を見たい…あの時みたいに皆で笑って過ごしたいんだ！』

その言葉にかつて皆で飯店に行つて笑いあつた事が走馬灯のように浮かんでくる。詠ちゃん、霞さん、蓮ちゃん、寧々ちゃん、華雄さん…そして…

武さん…？

『…ああ、そうだ…俺も君とまた笑いあえる時が来るのを楽しみにしているんだ…君の笑顔を曇らせる奴がいるなら…俺は全力で君を守る。だからこの手を掴むんだ！』

目の前には光が差し込み、光の中から手が差し出される。私はその力強い声にひかれるように手を差し伸べた。

俺は月を引き戻す為に何度も念じた。月もそれを感じ取ってくれたのか、月の瞳に光が戻ってきた。

私がうつすらと瞼を開くとぼやける視界に懐かしい…忘れる事の出来なかった顔が目の前にあった…

「武さん…？」

「ああ、お帰り…月…」

思わず涙が溢れそうになる私に武さんは優しく微笑んでくれた。

「泣くのはまた後で…かな…明命！月を頼む！雷紗は二人を援護しつつ、ここから撤退。風華、すまないが少し付き合ってもらうぞ！」

「「御意！」」

「了解です！」

「逃がすかあ！」

左慈が二人に襲いかかるうとした瞬間、その眼前に武が立ちはだかる。

「貴様の相手はこの俺だ！」

左慈の蹴撃に武は拳撃を突き合わせる。武の凄まじい拳撃は鬼気…いや龍を体現するようなその攻撃は龍気というに相應しいのかもしれない。その龍気と仙気がぶつかり合い、そこを中心に爆発が起きる。

「ただの人間である貴様らがなぜそこまでして戦う！」

「護りたい者の為！それを傷付ける者である貴様らを好きにさせるか！」

烈昂の気迫に左慈は

「チツ！もういい！この場は退いてやる！于吉！行くぞ！」

「やれやれ…これでは北郷君を討つ機会はまたという事になりますか…」

「キサマもこれで終わ리と思うな！いずれキサマ達の前に我らは現れる。その時がキサマの最期と思え！」

その言葉を最後に二人は霧散するように消えていったのだった。

四十四章 反董卓連合、虎牢関其の十、それぞれの邂逅、

武の指示で私は袁術軍に猛撃を仕掛ける華雄の軍を確認した。

「…奴が華雄か…」

その姿を確認し、私は華雄への接近を開始した。

私は武の頼みで袁術軍への突撃を敢行した。

「袁術軍の力はこの程度か！」

手応えのない相手に私は辟易していた。そんな事を考えていた刹那、寒気を感じた私は後ろを振り返った。

「…私は孫呉の将、甘興霸…華雄、その御首、私が頂く…」

「キサマが私の相手か…相手に不足はない。相手になってやる！」

私は金剛瀑斧を構え、孫呉の将と対峙した。

私の存在に気付いた華雄は手にした大斧を振りかざし、迷いもなく振り下ろした。私はそれを受け止めようと鈴音を構えたが、とつさにその場を飛びのいた。そして次の瞬間、轟音が響く。大地が砕けそうなほどの威力に私は啞然とするが、間合いを詰め鏑競り合う。

「信じられない程の力だな…華雄…」

「キサマこそなかなかいい動きをする…」

「いいな…我らが約定を違える事はない…武人として許せない事とは思うが、私にやられた振りをしてもらう…」

「…納得はできんがな…月様を守るためだ…止むを得んな…」

「すまない…」

言葉を発すると同時に一瞬で華雄の背後に回り込み、頸椎に峰打ちする。

「敵将、華雄！孫呉が将、甘興霸が討ち取った！」

その名乗りに華雄軍の兵達は一斉に降伏したのだった。

私は武との約定通り、張遼と事に当たった。

「お主が張遼だな…」

「そうや。アンタは…」

「これはすまない。私は周瑜。孫策軍の軍師と言ったところだ。」

「へえ、アンタが周瑜か…アンタがウチの相手をしてくれんるんか？」

いつでも掛って来いというような得意そうな笑みとその言葉に私は笑みを零す。

「フツ…」

「な、何や？」

「武の言うとおりだなと思ってな…」

その言葉に困った表情をする張遼に言葉を続ける。

「聞け。張遼。私達にとって武はかけがえのない仲間だ…その武は三年前に私達に約束した。私達孫呉がこれから来る割拠の時代で生き残る為に…大陸を回り、直に見聞きし、見聞を広めてくる。そして、帰ってくると…武は確かに私達との約束を守った…だから、私達は武が旅先で出会った掛け替えのない大切なものを守りたいと思う…張遼、貴様に問う。貴様を守りたいと思うものが私達と同じというならば、私達に降伏せよ！」

「…せやな。確かに袁術にこれだけの打撃を与えたら十分やな。よっしゃ！分かった。ウチはアンタ達に降った。但し、月を傷付けるような事があれば容赦はせんからな！」

「…心得ているさ。董卓を傷付ける事は武を傷付ける事と同じだからな…」

「まっ！武っちが護りたいって思う人達なんや。それにアンタ達ならこれからも色々と楽しめそうや。これからよろしゅうな！」

「こちらこそな。」

私は微笑み、張遼を引き連れ本陣へと戻る事にした。

武との約束を守る為に呂布は袁術軍に向かって進軍していた。呂

布軍は華雄軍、張遼軍と共に袁術軍を襲撃した。その袁術軍に斬り込んだ呂布の姿は鬼神のようであった。そんな呂布軍の後方から接近する部隊があった。それは孫権の部隊であった。

私は袁術軍を追撃してきた呂布の説得に向かった。私が適任といった武の真意がわからなかった。

「思いの丈を包み隠さずって言われても…」

分らない…私はどうしたいのか…こんな悩みを抱える私に呂布が説得できるのか？私は全く自信を持つ事ができなかった…

四十五章 反董卓連合、虎牢関其の十一、応えるという事

「来た…」

触角？をピクピクさせ、呂布が言葉を漏らす。

「恋殿？どうされたのですか？」

「ちんきゅ…武の友達が来る…」

「まことですか！？」

呂布は頷き、砂塵が立ち上る方角を指差した。

確かに指差した方からは砂塵が立ち上り、そこにたなびく旗印は赤の“孫”一文字…孫権の旗印であった。孫呉の軍勢は呂布と陳宮の前にその歩みを止め、中から一人孫権が歩み出た。

私は雪蓮姉様に劉備という諸侯の関羽、張飛、趙雲という将と共に四人がかりで呂布と戦ったが、太刀打ちできなかったという話を聞いていた。そのような武將に私が敵う訳はない。かといって冥琳のように弁が立つかと言われるとそれもない。武は私に一体何を見たのだろうか…

「…悩み事…たくさん？」

突然掛けられた声に私は驚いた。目の前には赤髪の少女とそれに付き従うようにいる小柄な少女の二人だった。

「…貴女は誰？」

「失礼な奴なのです！人に名を聞く時はまずは自分から名乗るのです！」

「っ！す、すまない。私は孫権。字は仲謀。飛將軍呂布の説得に来た。」

「…恋が呂布。」

その言葉に私は驚きを隠せなかった。雪蓮姉様を加えた四人の将を圧倒するほどの武を持つ武將、呂布がこんな大人しそうな少女だったとは思ひもなかった。

「孫権…悩んでる？」

私を見る呂布の真紅の瞳はなんだか見透かされているような気がした。

「呂布の言う通り…私は悩んでる。私は何故ここにいいのか…武は何故、私を貴女の説得に推したのか…何も分らないのよ…」

その言葉に呂布はその歩み寄ってきた。

「…武は嘘つかない…武がそう感じた…だから…孫権をここに寄越した…」

その言葉にはつと気付いた。この呂布は武の言葉を信じたからこそまで来た。私も武が私を信じてくれ、私も武を信じているからここに来た。

「そうね…あなたの言う通りよ…」

そうだった自信があるとかないなんて関係ない。私はただ、武に応えたい。

「呂布…私の話を聞いて…」

呂布は私から目を話すことなく、

「私は孫仲謀。孫呉の将！孫呉の王、孫伯符の下、敵となるものに立ち向かい…民を愛し、平和の世を築く！私は願う…呂布！貴女が私達の思いに共感し、私達と共に歩んでくれる事を！」

呂布は私に手を差し伸べ、私の手を取った。

「…いい人…」

突然の言葉に私は呂布を直視する。

「呂布…？」

呂布は頭を振り、

「…恋…」

私は呂布の行動が読めずに戸惑った。

「…真名。恋…」

「私に真名を預けてくれるというのか…？」

呂布は頷く。

「…孫権、いい人…だから、武が信賴している…」

私はその言葉が嬉しかった。

「ありがとう…恋…ならば、改めて名乗らせてくれ…私の名は孫権。字は仲謀。真名は蓮華だ。」

恋は頷き、

「よろしく…蓮華…」

ただ微笑む。その姿に私はただ歓喜した。

四十五章 反董卓連合、虎牢関其の十一、応えるという事（後書き）

久しぶりの更新となります

先日感想をいただいたのですがその中に何故、左慈と于吉が武も天の御遣いと気付かなかったのかという指摘がありました。

答えからいえば二人は武が御使いであるという事に気付いています。管輅の予言で最初から二人の御使いが乱世を終結させると謳っているのですから

この小説の設定が恋姫無印からの派生での一刀魏ルート、武呉ルートと同時に進行と言う事が前提となっています。

その為、前回の外史で煮え湯を飲まれた左慈は一刀に執着 一刀を抹消する事に心血を注ぐことになった その為、武を取るに足らない存在としていた

于吉は左慈の願いである一刀抹消を援護する為に武の存在を警戒はしつつも対策はしなかった

実際に武とエンカウントした二人は武の実力に恐れを抱き、今後は本格的に警戒を強め一人の敵として認識して行くという展開にしていくなかでいく予定です

四十六章 反董卓連合、虎牢関其の十二、終幕

「…もうそろそろといったところかしら…」

孫呉本隊では孫策が皆の帰りを待っていた。孫策の勘の良さは群を抜いており、特に戦いに關しては外した事がない。

孫策が軍の陣の入口に着いた時、前方から接近する砂塵を確認した。

「今戻った。雪蓮。」

「ただいま戻りました。姉様！」

「ただいま戻りました…雪蓮様…」

三人の到着はほぼ同時であった。更に三人の後ろには賈軀、張遼、呂布、華雄と董卓軍の面々が顔をそろえていた。

「…あなたが武が言っていた董卓配下の将達ね…？」

「その通りや。ウチは張遼。字は文遠。で、横にるのが賈軀。董卓軍の軍師や。」

「賈軀。字は文和。約束は守ってもらうわよ。」

眼鏡に手をあて、持ち上げるような仕草をし、軽い牽制をかける。

「もちろんよ。武は私達にとって大切な人。そんな人との約束を破る訳にはいかないわ。」

「名乗らなくても知っているだろうが、私は華雄だ。」

腕を組み、どこか挑発的な笑みを浮かべる華雄。

「…ええ、母様が戦った時も勝てたのは偶然だった。貴女はそれほどまでに強かったと母様も言っていたわ…」

「皮肉なものだな…だが、その言葉、素直に嬉しいと思うよ…あの江東の虎がそこまで高く評価してくれていたとはな。」

思わず笑みをこぼした先ほどとは違う笑みを浮かべ、照れ隠しなのかやや頬に赤みがさしていた。

「…華雄、嬉しそう…」

触角をピクピクとさせて呂布は言葉を漏らす。

「貴女は…」

周瑜の疑問に孫策は自慢げに

「冥琳、この娘が飛將軍呂布よ…」

孫策の言葉に周瑜は驚きを隠せなかった。

「え？えっ？この子が！？」

呂布はコクリと頷き、

「恋が呂布…字が奉先。武がここに来て言った…だから来た…」

「ええ、これからよろしくね。」

「孫策達、武が認めた人…恋でいい…」

「あら、嬉しいわ。それなら私も真名を預けないとね。私は孫策、

字は伯符。真名は雪蓮よ。」

孫策達はそれぞれに真名を交わし、董卓軍は孫呉に受け入れられる事となった。

「さてと後は武達だけか…」

「もう戻っている…」

周瑜の言葉の後から武達はその姿を現した。その後ろからは周泰、黄天吉。そして、黄天叉に抱えられた董卓がやってきた。

「詠。約束通り月は助けたよ。」

その言葉に賈軀は董卓の無事を確認しその場に泣き崩れる。

袁紹、袁術の両軍は董卓軍の襲撃により甚大な被害を被った。その董卓軍はいつの間にか沈静され、その報せを受けた袁紹軍は被害を被った腹いせに軍を反転させ、虎牢関を制圧し、洛陽へと迫った。洛陽前に到達した連合軍は洛陽を見て驚いた。董卓軍が一人として存在しないのだ。それどころか煙が立ち上り、かつて繁栄を誇った都の姿はどこにも見受けられなかった。もちろん孫呉は洛陽内部で何が起きているのかは把握していたが、それを知らない諸侯は洛陽入りを戸惑っていた。

四十七章 反董卓連合へ洛陽へ

密かに董卓軍を組み込み、軍を拡大させた孫策軍は諸侯と共に洛陽に迫った。それまでの間に周瑜は武の献策を受け、大陸各地に間諜を放った。今回の戦での孫呉の活躍を喧伝するためだ。

「さて、洛陽一番乗りは他の諸侯に任せましょ！劉備と曹操にはいろいろとお世話になったしね。」

「そうだな。しかし、私は先に潜入させてもらうぞ。」

「あら？冥琳が一番乗りをしたがるなんて珍しい。何があるのかしら？洛陽には？」

「台帳と地図よ。」

「うん、了解。それは冥琳に任せるけど…派手な事はしちや駄目よ？」

その場にいた全員が言葉を失う。

「ん？どうしたの皆？」

「…雪蓮。どの口がそれを言うの…」

「あら、藪蛇だったかしら？」

「まあ、いいわ。興覇！」

「はっ！」

「再度潜入部隊を編成し、洛陽に入る。供をしてくれ！」

「御意！」

「じゃあ、私達は陣を再構築した後で諸侯の一番乗り争いを肴にして一杯やっておくわ！」

「趣味が悪いぞ…」

武の言葉に皆が同意を示す。

「だって、人の難儀は蜜の味ってね！」

「…蓮華様、雪蓮が飲みすぎないように監視しておいてください…武も頼む…」

「ええ、分かったわ…」

「了解……」

武と孫権は盛大なため息をつくしかなかった。

「何よー一仕事終えたんだから、お酒ぐらい……」

「却下だ！」

周瑜と武に同時に言われ、孫策は思わず怯む。

「状況は確かに鎮静化に向かっていている。しかし、それはあくまでも現状を知っている私達の軍という事だ。現状を知らない諸侯達はそうではない。」

「雪蓮。今時点で戦勝を祝つての酒盛りなんてしていたら、袁術の奴がどういふ対応をしてくるかとは分かっているだろ？それに俺達はこの戦が沈静化している事は知っている。だけど本当に戦が終わった訳じゃない。まだしないといけない事が残っているのは分かっているよな？」

武の言うとおりである。孫呉の名声は高まり、これから勢力を拡大させる事は確定だろう。しかし、袁術はそれを快く思う事はない。今後、袁術の監視は今よりも厳しくなるだろう。

そんな時に目立つ事は避けるべきである。そして、勝ち戦とはいえ、敵味方双方に被害は出ている。特に洛陽の民衆への支援をしておかなければ名声が高まっても意味がない。民衆にとって戦争などは人災以外の何でもないのだ。戦争の悲惨さは戦中よりもそれが終わった後なのだから……

「ううー分かったわよ……」

渋々と納得する孫策に思わずため息する他なかった。こねる孫策をしり目に周瑜は甘寧と数名の兵を引き連れ、洛陽城内に入った。

「さあ、俺達は陣の構築に入ろう。蓮華は雪蓮と本陣の構築をお願い。明命、風華は兵站の確保。俺と雷紗は冥琳達が戻った後、洛陽城内の復旧作業ができるように支援物資の準備をする。それでいいね。雪蓮。」

「……そうね。支援物資に関しては出し惜しむ必要はないわ。民衆の支援を最優先に。明命、風華の三人は入城後、治安回復にも努めて

もらうからよろしくね。」

「「御意！」」

孫策の言葉に各自作業に取り掛かるのだった。

作業を終えた武は孫策と孫権の待つ本陣に戻った。その俺の目に入ってきた光景に武は頭を抱える事になった。

「武！先に始めているわよ」

「…さて雪蓮。何がどうなったらこうなるのか…教えてもらおうか…」

怒気を孕んだ武の声に思わず、孫策は後ずさる。

「えっと…流れで？」

「流れで何故、蓮華が酔い潰れているんだ？」

「そ、それは…」

「おそらく雪蓮が飲もうとしているのを止めようとした蓮華にどうせなら蓮華も一緒に吞ませてやろうと…そうしたら思いの外、蓮華の酔いのまわりが早く酔い潰れてしまったといったところか…」

押し黙る孫策がそれを表していた。

「まあ、いいさ。雪蓮。俺はもう何も言わないけど、今、手にしている分が最後だからな。」

武のその言葉にパツと顔を輝かせる孫策。

「但し、その酒を最後な。もし守れなければ…先七日間禁酒だからね。それが嫌だったら冥琳が帰ってくるまで大人しくしている事。いいね？」

武のその言葉に孫策は駄々をこねるような表情になるも、武が浮かべた極上の笑みに最後の酒を飲み干し、手に持っていた大徳利を涙目で武に渡したのだった。武は徳利を兵士に厳重に保管するように指示し、酔い潰れた孫権を陣幕に運ぶ為に抱きかかえた。

武は酔い潰れた孫権を抱え、孫権の陣幕に入った。孫権を寝台に

横にし、

「ふう…蓮華も災難だったな…」

頭を撫で、

「後は俺達に任せてゆっくりとお休み…」

安らかな寝顔を見せる孫権に武は語りかける。

「さて、と…俺も仕事に戻ろうか…って、雪蓮。まさかだけど、もう飲んでないだろうな…」

武は不安を口にし、陣幕を去ろうと孫権に背を向ける。その時何かに引っ張られるような感覚に歩みを止める。

「…？」

裾を見ると孫権の手が武の裾を掴んで、焦点のあつて無い目で武を見ていた。

「ごめんね。起こした？」

武はボーっとした表情の孫権に近づく。刹那、武は思いもしない力に引き寄せられる。そして、次に感じたのは唇に触れる柔らかな感触…

「…」

呆然とする武に寄りかかるようにして、再び寝息を立てる孫権。その奇妙な光景は戻ってこない武を心配した面々が孫権の陣幕に入ってくるまで続き、甘寧から陣中を追いまわされる武とは反面、孫権は幸せそうな顔をして眠りについていたのだった。

四十八章 反董卓連合、洛陽・戦いの傷痕

諸侯が一番乗りを争う混乱の中、周瑜は台帳と地図を手に入れ、陣に戻ってきた。そして、これからの行動について話し合う。

「これからどうするの？地図と台帳は手に入ったんだよね？冥琳。」

「ああ。諸侯の一番乗り争いが済んだ後に洛陽に入城する。ただ、場内が少し荒れているからその再建に力を尽くそうと思う。」

「どういう事？」

孫策の問いに甘寧が答える。

「先程ボヤ騒ぎがあつたと報告しましたが、城内に黄巾の残党が入り込み狼藉を働いたようで…」

その言葉にやるせない思いで歯噛みする。

「…獣どもがいまだに跋扈しているのね…いつか根絶やしにしてやらないと…」

南海霸王を握り締め、孫策は歯噛みする。

「悔しいけどそれは私達がもっと力を付けてからよ。今私達がすべき事は入城後、すぐに洛陽の復興作業に取り掛かる事よ。」

「当然よ！武。」

「ああ、入城次第作業できるように準備は既に終了済みだよ。」

「フツ。流石だな…ならば、伝令を待ち、すぐにでも入城できるように準備しよう。」

「そうね。では入城後、私は町の長老格に話を付ける。蓮華と冥琳は私に着いてきなさい。雷紗、月、詠は炊き出しの準備。思春、風華、霞は治安回復。明命、華雄は仮設天幕を設営を行い、焼け出された民衆へ与えなさい。」

「…了解！」「…」

「しばらくは洛陽に駐留し、復興作業に従事しましょう。」

「多少、計画にズレが生じるが仕方ないか…」

「ズレなんか気にしてる場合じゃないからね…祭と穏に伝令をよる

しく。」

「分かった。」

「伝令！洛陽一番乗りを果たしたのは袁紹軍。続いて袁術の軍。しかし、その一番乗りにおいて袁家両軍がいさかいを起こし城内は騒然としております！」

その言葉にその場のいた者達は頭を抱えた。

「…全く。最後の最後まで手間を取らせてくれるわね…」

「全くだ…」

「とは言ってもこのまま放置しておけば被害が広まるだけ…それだけならまだしも連合軍に対する不満が広まる…」

「そうよね…よし。袁家を除く諸侯に伝令を出して。内容は袁家両軍を抑える為に各諸侯から一軍を派遣してほしいってね。悪いけど、孫呉から出せるのは武の部隊しかないわ。よろしくね。」

「お安い御用だ。」

堂々と洛陽に入場した孫策軍はあちこちでくすぶる黒煙と力なく座り込む民衆の姿を目にした。そんな洛陽の光景に入場した孫策軍は復旧作業の為に各自それぞれの持ち場に入った。

武は数名の部下を引き連れて、諸侯の部隊と合流した。曹操軍からは楽進、劉備軍からは趙雲。西涼軍からは马超と錚々たる面々が集結していた。

「伝令から聞いていると思うけど、とにかくあの馬鹿どもを抑えよう…」

「そうですね。復興作業を行うにもあいつらが邪魔でしょうがないですからな。」

「確かにその通りですね。」

「皆言っねえ。確かに言ってる事に間違いはないけど…」

確かに袁家の二つの小競り合いが今この場にいる面々を揃えたのだ。愚痴も言いたくなるのも事実だ。

「ま、ここで愚痴を言っても仕方がない。」

「しかし、連合でも一、二の兵力を誇るに軍の小競り合い。私達だけで何とかなる物ですか？武殿。」

「確かにその通りです。武さん。」

「あれ二人ともそいつの事知っているのか？」

「ウム、以前世話になった事があってな。」

「はい。私も…」

「まあな。それよりも今回の事だが、袁家両軍の兵士達の暴動を三人の部隊で収集してほしい。本隊同士の争いは俺が何とか止めてみる。というよりあの二人には少し灸を据えてやらんといかんからな…」

武の笑みには流石の三人も引き気味のようだった。そして、この人は怒らせてはいけないと心に思っただった。

それから三人はほどなくして袁家の兵士達の暴動を抑え、集結場所に戻ってきていた。その時には既に事態を収拾した武がそこで待っていた。袁紹、袁術軍を見ると気を失った袁紹と恐怖に青ざめた袁術がいた。

「…何をしたのですか？」

「風…聞かない方がいいと思うよ。」

笑顔を浮かべる武に楽進は聞くのを諦めたのだった…

四十九章 反董卓連合、洛陽・孫呉と昇竜

袁家の暴動を抑えた武達は各軍に戻り、復旧作業に取り組んだ。曹操、劉備からの申し出もあり、孫策軍は城内の復旧工事、曹操軍は仮設天幕の設営、劉備軍が炊き出しを主に手掛ける事となり、それぞれに各陣営の面々が加わり、協力していった。ある意味初めて連合が連携が取れた瞬間と言えるのかもしれない。

復旧作業が進む中、俺は雪蓮や冥琳、蓮華と共に復旧作業を視察し、その進行状況と民衆の表情を確認していた。

「フウ……」

「どうしたんだ？雪蓮？」

「戦争の爪痕。いつ見てもやるせないなっと思って……母様が死んだ後、江東では内乱や侵略、暴徒の反乱……そう言ったのが一気に起こって……私にはそれを抑えるだけの力がなかったの……それが今の光景と重なっちゃって……」

戦で苦しむのは民衆、それはいつの時代になっても変わらない事。ただ権力者同士の争いに巻き込まれ、戦禍に飲まれていく。俺も雪蓮達に保護されてなければそちら側の立場に立たされることになっただろう。

「ですが、この光景は姉様のせいではありません！」

「それでもよ。こういう光景はあまり心楽しいものではないわよ……」
そう言っただけ視線を落とす雪蓮に

「雪蓮。弱音などは聞きたくないぞ。文台様の遺志を継ぎ天下を目指すといったのはどこの誰だ？それは他でもない雪蓮自身だ。だからこそ、私はお前を天下人にする約束した。雪蓮の優しさは私はよく知っている。だがな、それが覇業の妨げとなるなら私は許さない。」

冥琳が叱咤する。

「冥琳…そうね…私に弱音を吐いている暇なんてないんだから…私には私にできる事を精一杯して後事を蓮華に託す事が役目…」

その言葉に蓮華が声を荒げる。

「姉様！そのような不吉な事を言うのはお止めください！」

蓮華の言葉は確かだ。今ここに雪蓮は生きている。その命を自ら捨てるような発言は俺も賛同できなかった。

「蓮華の言うとおりだ。今ここに雪蓮は生きている。それなのに自身命を軽視するような発言は止めてくれ…」

雪蓮は俺達に向かってほほ笑む。

「分かっているわよ。私だって自分から死のうなんてこれっぽっちも思っていないから。」

「…だとしても、だ。例えどんな理由があっても自分の命を粗末にする人に他人を守ることなんてできない。その事を忘れないで…」

「…うん。」

「後もう一つ…俺達は何があっても雪蓮の仲間だ。王としての弱音は冥琳も聞く事は出来ないだろうけど、雪蓮という一人の人間の弱音は聞く事は出来る。俺達が支えるから…孫伯符はただ王として邁進して欲しい…」

雪蓮はコクリとうなずき笑顔を浮かべる。少しでも気が晴れたのだ。したらこれでいいのだと俺はそう思った。そんなやり取りをやっていた時だった。俺達の下に明命が慌てた様子で駆けつけてきた。

「しえ、雪蓮様！冥琳様！大変です！」

「どうした？何か異変でもあったのか？」

「そ、それが！ブワッてなあって、ピカーって光ってて、龍がドーンって舞いあがって、とにかく凄いのなんのって感じなんです！」

「…何それ？」

誰もがそう思った。説明不足も良いところだ。

「明命…はい。ゆっくりと深呼吸してとりあえず落ち着こうか？」

明命は大きく深呼吸を開始する。

「はい。もう一度…」

「ふあああゝ！ふううゝ…」

「よし、落ち着いたところでもう一度説明してくれるか？」

「はい！ええと…説明しゆる事を忘れてしまいました！ゆた！」

自慢そうに言葉を紡ぐ明命に和みつつも

「…とりあえずその何かが起こった場所に連れて行ってくれるか？」

冥琳は眉間に手をあて、明命を促す。

「は、はい！こちらに来てください！」

そう急かされ俺達は町外れの路地裏までやってきたのだった。

五 十章 反董卓連合、洛陽からの帰還

路地裏に辿り着いた俺達を迎えたのは井戸から放たれる輝かしい光だった。

「何だというのだ。この光は…？」

「…明命。ごめんけど、井戸の中に入ってこの光の下を引き上げてくれないか？」

「え、ええ！？」

俺の言葉に驚く明命。

「何？武はその中身が何なのか知ってるの？」

「…多分ね。もし、俺の推測が正しければ、この光を放つ物は孫呉にとつて飛躍の足掛かりになる。そんな代物だよ…」

俺の言葉に誰もが疑問符を頭に浮かべていた。

「武さん…大丈夫なんですか…？食べられたりしません？」

「大丈夫。人体に害があるようなものじゃない。だから、安心して。」

「

俺は明命の頭を撫で、落ち着かせる。

「…分かりました…では、入ります！」

明命は命綱を体に巻きつけ井戸の中に入っていった。それから数分もしないうちに明命は一つの巾着をもつて上がった。

「雪蓮様。このようなものが井戸の中に…」

光が漏れる袋を雪蓮は受け取る。

「何なの？これ…」

「雪蓮。それを開けてみて…」

雪蓮は恐る恐るその巾着を開き中身を取り出す。そこから出てきたのは予想していたものだった。

「えっと…これは小さな印鑑？ってこれ…！？」

思わず声を上げる雪蓮の口を俺は抑える。

「声を抑えて…」

コクコクとうなずく、雪蓮の手元を冥琳も覗き込む。

「本物なのか…？」

「確かに本物だろうね…」

「ええ、確かに本物ね…白い大理石を素材とし、龍をあしらった彫刻。印字は“受命于天、既寿永昌”…秦始皇本紀に記載されていたものと合致するわね…」

「始皇帝が作らせた、皇帝たる証か。…これはとんでもない物を拾ったな…」

「ですが、こんなものが何故このような場所に…」

「おそらくは混乱に紛れて持ち出した方がいいが、持ち出した人間が逃げ切れぬとみて後で回収する為にこの井戸に隠したといったところだろう。」

「冥琳の言うとおりだろうね…」

「確かにこれは天佑ね…」

雪蓮の言う事は事実だ。ただ俺の中には別の考えがあった。

「確かにこれを俺達が手に入れたのは天佑だと思う。だから各地に斥候を放って雪蓮が大陸の覇者たる資格を天から授かったという事を喧伝するんだ。そして、この伝国璽は袁術に渡す…」

玉璽を手にするという事は孫家が天下に覇を成すことの正当性を得るという事。しかし、袁術に玉璽を渡すという事はその正当性を失うという事だ。

「武…どういふつもりだ。」

周瑜は武を睨みつけ問いだす。

「もちろんタダで渡す訳じゃない。朝廷に返還しようとした孫呉から袁術が奪い取ったって悪名付きでな。」

武の答えには周瑜も啞然とした。

「…悪どいわね…」

孫策も呆れた顔をした。

「言ったよね…孫呉が…雪蓮達が覇を成すと言うのなら俺は修羅とな

「つても構わないって…」

「そうだったな…だが、お前も忘れるな。お前が修羅道に落ちたとしても私達は必ずお前を修羅道から引き戻してやるからな…」

その言葉に孫策や孫権が頷く。武は本当に嬉しかった。素性も分からない者を温かく受け入れてくれた彼女達はこの世界で出会った掛け替えのない人達だと武は改めて自覚するのだった。

「よし、武の案を採用しよう。明命。複数の者を洛陽の民に扮装させ、孫策が天より龍が舞い降り、大陸の覇者となる啓示を受けたとさりげなく情報を流せ。」

「了解であります！」

「この噂が広まれば、雪蓮の下には人や物が自然と集まるようになる。…雪蓮。ここからは徳の高い王として演じてもらう。いいわね？」

「はいはい…めんどくさいなあ、もう…」

「これは遊びじゃないの…まだ弱小勢力の私達が天下に翔る為にはこれを利用しなければいけないの…」

「分かってる…ただ、今のうちに本音を出しておきたかっただけ…」

「お願いね…」

「了解。」

こうして俺達は洛陽復興作業という慈善事業を再開する。董卓を追い払った一部の諸侯達は意味のない事をするを嘲笑する。しかし、孫呉の勇名や今回の復興支援の噂により協力してくれる人が集まり中には洛陽の豪商からの支援もあり、着々と復興作業は進んだ。

俺達の行為は得にはならない行為なのかもしれない。ただ、同じ大陸に生きる者として…ただ一人の人として他人が苦しんでいるのを見て見ぬふりをする事は出来ない。俺はただ損得勘定を抜きにして、助ける力があるなら助けたいと思う。雪蓮達も表向きは孫呉の名声を高めるという目的もあるだろうが、それだけの為に資材を投げ打ってまでする事ではない。心の底では本当に助けたいとい

う思いがあるからこそ孫呉独立の計画が先送りになる事を知りながら復興支援という決断をしたのだと思う。

孫呉の名声が高まったのはあくまで戦での活躍だけではなく、戦後処理の迅速さに大きなウェイトを占めていたのだと俺は思った。

反董卓連合は解散となり、各諸侯は各々の領土へと引き上げていった。孫呉も洛陽復興作業に区切りが付き、江東の城に帰る事になった。その際には志願兵の他、洛陽にいた商人達の中にも江東へ来る者もいた。それ以外にも孫策が江東に着いた頃には孫呉の風評を聞き付けた者達が集まってきており、孫呉はその大陸各地の諸陣からの評価が高まり、自然と勢力を拡大していった。しかし、袁術とてそれが分からないほど馬鹿ではない。英雄として評価の高まる孫策と暗愚としての評価が高まる袁術、そんな二人の関係は悪化の一途をたどっていった。自身の不評が高まる事は袁術でなくとも喜ばしい事ではない。形式上は客将であるとはいえ、袁術にとって孫策は家臣である。ただでさえ器量の狭い袁術にとって腹立たしい事この上なかった。そんな袁術は孫呉に対して無理難題を吹っ掛けるも孫呉はそれを軽くいなししていくものだから、袁術は鬱憤が溜まる一方なのだ。

五十一章 孫呉独立に向けて

反董卓の戦いの後、江東は著しい発展を見せた。孫策の勇名を聞き、江東の経済は発展し、新天地を求め江東には多くの人が集まってきた。

孫呉の将は孫策を始め、黄蓋、甘寧、周泰と優秀な将が揃っていた。それらは万能の将であり、能力的には曹操軍にも引けを取る事はなかった。ただ、孫呉は江族征伐で名を上げた勢力であった為、いずれの将も船戦においては敵なしと言えるが、陸上で曹操の軍勢と当たった時、陸戦に慣れている曹操軍にはどうしても当たり負けしてしまう。もちろん、孫策達が弱いというのではない。あくまで曹操軍が強すぎるのだ。しかし、その問題も呂布、張遼、華雄の参入により解決となった。

もともと董卓は涼州の太守だった為、北方民族との戦が多かった。その為、呂布をはじめ、陸上戦には慣れており、その兵も精強であった。また、董卓は太守であった事もあり政務には詳しく、周瑜や陸遜の補佐としても優秀であった。賈軀は政務、軍部の双方に通じていた為、これもまた至高の人材と言えるだろう。陳宮は我儘なところを置いておけば、軍略家としては優秀であった。各国には知られてないとはいえ、孫呉に董卓軍が参入した事は虎が翼を得たようなものだ。

董卓軍の参入を知らない袁術軍にとってこの孫呉の急激な勢力拡大は脅威であった。その存在を掴めない袁術に成す術はなかった。

ある日、孫策の屋敷の中庭では周瑜、陸遜、武が今後の政策について話し合っていた。そこへ呼ばれてやってきたのは元董卓軍の軍師賈軀であった。賈軀は孫呉においても周瑜や陸遜の補佐をする事になった。そして、今日は武もその席に呼ばれ、四人は城下の運営

について話し合う事になった。

私は月と一緒に孫呉に匿われる事になった。表向きはアイツ付きの女中という事になり、月と一緒にいう事で我慢できたけど、董卓軍の軍師として采配をふるっていた私は現状に納得できなかった。しかし、突然の呼び出しを受けた私を待っていたのは孫呉の頭脳とも言える周瑜と武の二人が内政について論議している場だった。

「区画整理？」

「ああ、財政的に厳しいのは分かるけど、治安維持や経済活性を考えていくと早いうちに取り掛かっていった方がいいと思う。」

あいつが提案していたのは城下町の区画整理だった。

「どういう事だ？」

「区画整理を行う必要性はまず治安面かな。よく警邏で城下を回る事があるんだけど、大通りは人目があるから、犯罪も少ないんだ。反面、裏通りに入れば、犯罪は増えてるし、入り組んでいるから検挙するのは難しい。」

その話を聞いていた私は的を得たその意見に驚きを隠せなかった。あいつが博識なのは話をしていて思った事だが、博識だけではなく、柔軟な考えの持ち主でもある事を知ったのは最近の事だった。

「二つ目に区画整理を行う利点はその区画ごとに職種を分ける事ができる。そうする事である区画に行けば必ず目的の物ができるといふ状況が作れる。更にその区画で組合を作らせ、互いを監視させる事で公正な取引を行わせる事ができる。更に大通りの左右に商店を展開させる。多くの人が行き来できる通りを作る事で外部からの商人も入りやすくなる。」

「確かにその通りだ。しかし、実際にそれを実行すると…」

「莫大な資金が必要となるわね。」

資金の捻出、大商人に出資を依頼するか税金を増やす…といったと

ころだけど…

「冥琳が言っている事もだけど、それをしてしまったら外部からの侵入を防ぐ事ができなくなるんじゃないの？」

「…もし、詠が自分の目で見ないと信じる事ができないような情報を密偵が持つて帰ってきたらどうする？」

「それはもう一度複数の密偵を放って確実な情報を探らせるけど…」

「なら、もし、密偵がその建設の手法を持ち帰ってきたなら詠はどうする？」

「それは都の建設を手掛けて強い国づくりを…って、まさか…」

「そこまで言って驚いた。間者が入ることを前提で企画し、それを模倣させる事で他の諸侯を財政難に追い込む。それがこいつの本当の狙いだっただの。」

「危険な賭けだけどね…」

危険な賭けという事は重々承知の上だった。もちろん建設の過程は他の諸侯に知られてはいけない。知られてしまえば、コスト削減の方法まで知られてしまう。

「で、でも、経費はどうやって捻出させるのよ？」

「これも賭けになるんだけど…袁術に都を建設させるんだ。」

流石にこの言葉に二人は驚いた表情をした。

「それはどういう事だ？武。」

冥琳の問いに俺は

「反董卓連合の時に拾得した玉爾を袁術に渡す…袁術を誘導して皇帝と名乗らせるんだ。そして、袁術をうまく誘導して建業の地に都の建設を行わせるんだ。」

「それだったら可能かもしれませんね」

「うゝむ…袁術が巧く乗ってくればいいのだが…」

悩む冥琳に詠が

「…それは袁術に現状の城は縁起が悪い物だから、建業に本拠を移してみたらどうかって進言するといいわ。その前に袁術の城下で不

可解な現象でも起きれば、袁術の事だからすぐに都を移そうとするのは確実でしょうね。それに袁術が皇帝を名乗り、都を建設する事で他の諸侯から反感を買うのは必然。孫呉も都の建設には手を貸す事になるでしょうけど、そこは孫呉に関係のない者達が独断でやったとしてもすれば問題ないでしょ。」

「更に付け加えさせてもらうと、もともと建業は孫呉縁の地でもある。袁術を滅ぼした後、そこに居を構えたとしても何ら問題はない。」

袁術の性格を考えれば、簡単にその光景は目に浮かんた。

「…確かにそのとおりね。」

「ところで冥琳。本城の設計だけど、俺にさせてもらっていいか？」
武の提案に

「何だ。いい案があるのか？」

その言葉に武は一枚の地図を取り出した。

「まずはこれを見てくれ…建業は長江沿いにある都市だ。だから、ここを…」

武は地図に新たな線を描き加えていった。

「これは…かなり大規模なものになるな…」

武が描く構想はかなりのものであった。長江に支流を作りそれを城壁を取り囲む濠とし、西と北からの攻めに対応。東は海へと広がり、海上貿易の拠点としている。更に南には豊かな穀倉地帯が広がり、開発次第では鉱物資源も採取可能であった。まさに守るに易く、攻めるに難い難攻不落の都であった。

「凄いわね…あなた、一体何者なの？」

「気にしてくれるな。武は武…私達の味方だよ。」

周瑜の言葉に

「ありがとう。そう言ってくれるから俺は戦える。」

賈軀は二人のやり取りに自身と董卓同様の絆の深さを感じたのだっ

た。

周瑜達が秘密裏に建業の区画整理に手掛け始めた頃、袁術の城下町ではある噂が立っていた。夜になると街中では人魂が舞い、袁術の屋敷では人魂だけではなく、この世のものとは思えないような呻き声が響き渡っていた。そして、その奇妙な声が聞こえた翌朝の袁術の屋敷の庭や建物の周辺には巨大な足跡が残されていた。それらの現象は周泰、甘寧、黄天吉らが周瑜の指示を受け、人為的に引き起こしたものだった。

その事実を知らない袁術は孫策の誘いにまんまと乗り、建業に居を移す為に私財を投じて、新しい都の建設を命じたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0854p/>

真・恋姫無双～招かれた天の御使いと招かれざる天の御使い～

2011年9月21日02時55分発行